

BULLETIN
OF
TOHOKU HISTORY MUSEUM

東北歴史博物館
研究紀要

東北歴史博物館研究紀要

10

[Article]

Chronological Study on Jomon Potteries from the End Phase of Middle Period to the Initial Phase of Later Period in Tohoku Region
..... AIHARA Junichi 1

[Reports]

Research on the main shrine of Uwanuma-Hachiman-Jinja
..... SEKIGUCHI Shigeki 11
Jomon Pottery of Kusumoto Collection
..... NIWA Shigeru 19

東北歴史博物館
2009.3

10

二〇〇九 東北歴史博物館

[論文]

相原 淳一 東北地方における縄文時代中期末葉から後期後葉に
関する土器編年
—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から— 1

[報告]

閑口 重樹 宮城県登米市中田町 上沼八幡神社の本殿について 11
丹羽 茂 楠本コレクションの調査 縄文土器編 19

東北歴史博物館
2009.3

10

はじめに

この度、東北歴史博物館研究紀要10を発刊することになりました。

当博物館は、宮城県を中心にながらも、東北地方全体の歴史や文化を研究し、その成果を広く発信することにより、世間との交流を促進し、国際化時代にふさわしい地域づくりと地域活性化に貢献することを使命としています。

常設展示で旧石器時代から昭和40年頃までの東北地方史を総合的に扱っていることはこの趣旨を具現したものであり、テーマ展示、館長講座、展示解説、史料講読・ビデオライブラリーなどの諸講座や多賀城跡案内などの諸事業もこの理念に沿って行われています。また、博物館は学校教育ばかりでなく、県民の生涯教育の拠点施設でもあります。地域社会に開かれ、親しまれる教育の場としての博物館を目指して、教育指導者の養成講座や児童と父兄が共に学習できる体験教室など、数々の諸事業を積極的に行っております。それとともに、地域に伝わる貴重な文化遺産を後世に継承させることも当館の大変な仕事であります。そのため、歴史、文化諸分野の資料の収集と保存に努めるとともに、博物館自らが研究し、その成果を博物館利用者の皆様に還元できるように、職員一同研鑽に務めているところであります。

本紀要是当博物館の研究活動の一端を公開するものです。今回は縄文時代関係二編、建築史関係一編を掲載することにしました。

丹羽報告「楠本コレクションの調査 縄文土器編」は当博物館の開設にあたって、楠本政助氏から寄贈・譲渡を受けた縄文時代資料のうち、縄文土器について整理・研究した成果を収録したものです。楠本資料は学術的に高く評価され、その幾つかは既に多くの研究者の出版物や論文に掲載されていますが、本編では、これらを含め108点に及ぶ土器を収録しました。単なるコレクションの紹介にとどまらず、文様・技法上の特徴から土器個々の研究史まで踏込んで詳細な記載となっております。縄文土器研究の現段階の到達点を示すものとして、多く方に活用されることを期待しています。

相原論文は石巻市桃生町山居遺跡から出土した縄文時代中期後葉から晩期中葉にかけての土器群の分析を通して、特に、縄文時代中期末葉から後期前葉に至る土器編作を詳述したものです。

関口報告は宮城県登米市中田町八幡山に鎮座する「八幡神社本殿」について、棟札などの文献史料と建築意匠上からの検討を通して、本神社本殿が江戸中期の神社建築の特徴をよく伝え、安永五年の建築によることを論じたものです。

読者各位の忌憚のないご批判やご意見をいただければ幸いです。

平成21年3月27日

東北歴史博物館長 進 藤 秋 輝



資料1



資料2



資料3



資料4



資料8



資料9

圖版1 南境貝塚(資料1 ~ 4・8・9)



圖版2 南境貝塚(資料5・6・10～13)



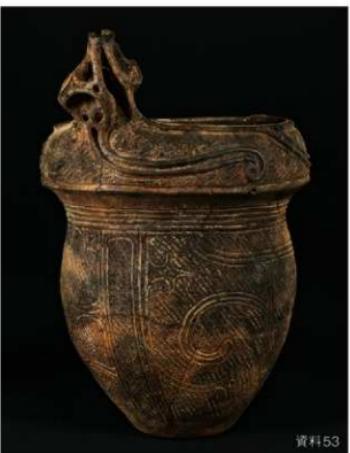
圖版3 南境貝塚(資料14·15·17~20)



圖版4 南境貝塚(資料21～24・27・28)



圖版5 南境貝塚 (資料 30 ~ 33 · 35 · 37 · 39 ~ 41 · 47)



資料53



資料54



資料55



資料57



資料56



資料63



資料62

図版6 仁斗田貝塚(資料53～57) 宝ヶ峯遺跡(資料62・63)



図版7 宝ヶ峯遺跡(資料60・61・64～67・70) 沼津貝塚(資料72・76・77・82) 泉沢貝塚(資料83)



図版8 二渡貝塚(資料84) 女川町尾田峯貝塚(資料85) 青森県八戸市長七谷地貝塚(資料95)

同市是川中居遺跡(資料94) 同県鰐ヶ沢町(資料93) 岩手県大船渡市越喜来泊貝塚(資料91・92)

福島県いわき市平(資料90) 宝ヶ峯遺跡(資料107) (伝)沼津貝塚(資料108)

東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年 — 宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から —

相 原 淳 一(東北歴史博物館)

- | | |
|-----------|------------|
| 1 はじめに | 4 出出土器について |
| 2 山居遺跡の概要 | 5 まとめ |
| 3 層位と検出遺構 | 引用・参考文献 |

1 はじめに

筆者は平成20年11月16日(日)に当館オープン講座において「石巻市山居遺跡の調査成果—縄文時代中期後葉から晚期中葉にかけての低湿性遺跡の調査—」について発表する機会を得た。内容については以下の3点であった。

- ① 層位と検出遺構・出土土器
 - ② ツルマメ混和土器
 - ③ 山居遺跡の性格

今回、ここでは特に縄文時代中期末葉から後期前葉の土器編年に関する部分を主要な論点として述べる。なお、山居遺跡の報告書は2007年に宮城県文化財調査報告書第214集として刊行されている。



第1図 遺跡の位置

2 山居遺跡の概要

山居遺跡は宮城県石巻市桃生町倉字山居に所在する(第1図)。繩文時代中期後葉から晩期中葉にかけての低湿性遺跡が、旧北上川と新北上川が分歧する茶臼山(標高154m)を刻む山居沢の出口部分、沢底-3~4m(標高8~9m)において発見された。

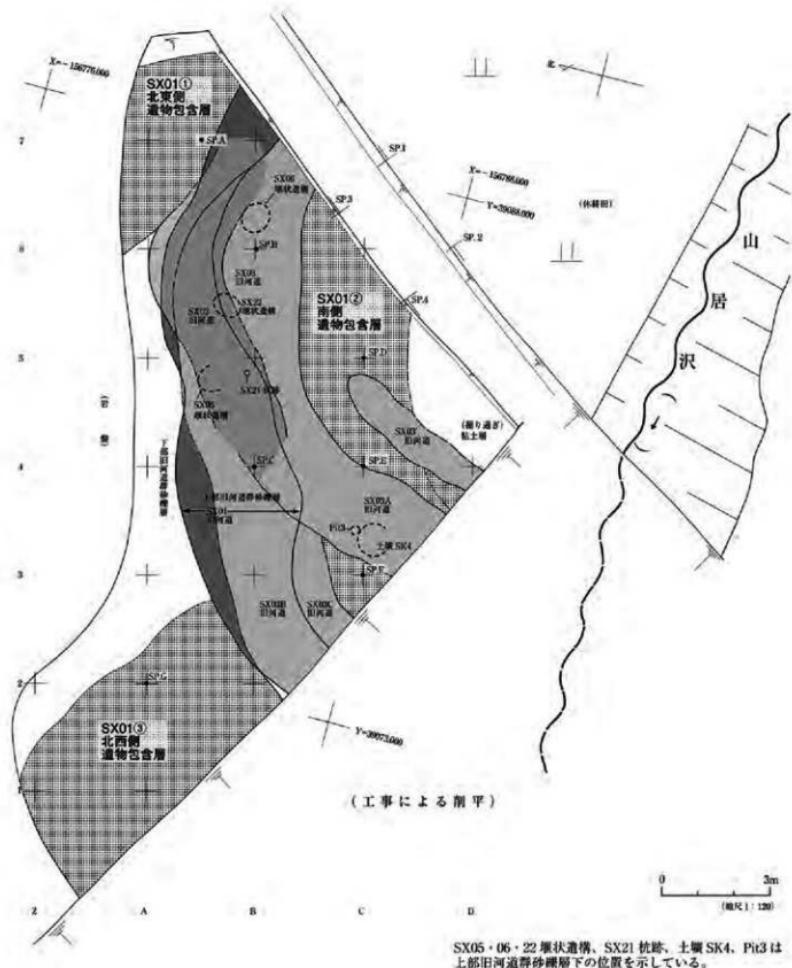
遺構の種類は壙状遺構・杭跡・土壤等で多くはないものの、宮城県内でははじめての縄文時代カゴ断片の発見をはじめ、多量のトノキ種子碎片等を含む廃棄層が検出され、水辺の作業場の一端が明らかとなつた。

3 層位と検出機能

第2図は遺跡全体の遺構配置図、第3図は基本層序とその関係を模式的に示したものである。

繩文時代晚期中葉の旧河道 SX03・SX04を堰き止める形で SX06・05堰状遺構が検出された。遺構の残存状況は必ずしも良好ではなく、基底の一部が残存していたものと見られた。これらの旧河道の両側面に、トチノキ種子碎片が多く含む遺物包含層 (SX01)①東北側遺物包含層・SX01②南側遺物包含層)が形成されていた。

後期後葉では、旧河道SX07の岸辺にSX21杭状遺構が確認された。SX01②南側遺物包含層では2b



第2図 山居遺跡遺構配置図



第3図 基本層序模式図

①～2a ①層上面でこの時期の安定面が検出され、多くの廃棄された土器とともに台石などが確認された。土壤1基とピット1個の掘り込み面もこの安定面と考えられた。

後期中葉では、旧河道SX24中からSX22環状遺構が検出された。遺物包含層は水の影響を受けた砂礫層となっており、残存状況は良くない。

後期前葉では、遺物包含層が調査区の北西側で検出された。遺物包含層は薄い砂層の介在する有機質黒色土層で、土器の出土状況は概して良好で、横倒しにつぶされた状態の略完成土器を含んでいる。

後期初頭～中期後葉では、南側遺物包含層の下部(2b・2c-3a層)が該当する。真上や斜め方向に押しつぶされた状態の土器とともに、およびたらしい量の土器が出土している。最下の3b層上面では、横倒しの状態で土器が1個体出土している。

4 出土土器について

出土土器は調査区では縄文時代晚期中葉～中期後葉を主とし、このほか弥生時代後期の土器が1片検出されている。この弥生土器は調査した中では一番新しい旧河道SX02堆積層中^[31]に含まれていた。

この他の土器は出土層位と土器の特徴から、第Ⅰ～Ⅹ群土器に分けることができた。

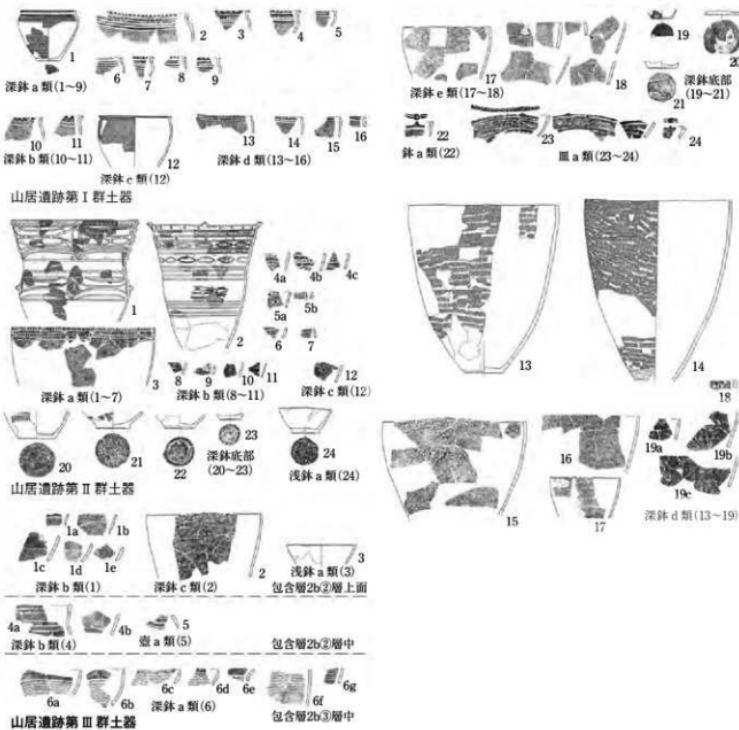
【第Ⅰ群土器】

第Ⅰ群土器は縄文時代晚期中葉「大洞C2式」(山内 1930)後半期(藤沼1989・須藤1998)のものと考えられた。

年代測定を行った旧河道SX03内SX06環状遺構底面から出土した土器ISK-5の較正曆年代はcalBC770(Beta-219644)、および旧河道SX04内SX05環状遺構底面から出土した土器ISK-6は同じくcalBC760(Beta-219645)とはほぼ同じ年代幅に収まるものであった。大洞C2式土器の他遺跡の測定例では、岩手県の資料でcalBC900～calBC780(小林2006)が示されており、概ね矛盾がないものと判断される。また、現在考えられている縄文時代の終末(大洞A'式)のcalBC450～calBC250の年代観とも整合している。

【第Ⅱ群土器】

第Ⅱ群土器は縄文時代後期後葉の「金剛寺式」(伊東1957)と呼ばれる土器型式にあたり、近年の研究成果によるのであれば、「宮戸Ⅲ a式」(後藤1957・須藤編1995)に相当するものである。前章において触れたように、SX01②南側遺物包含層の2b①～2a①層上面で安定面が検出され、多くの土器が出土している。ごく少量の宮戸Ⅲ b式土器がSX01①北東側遺物包含層ii a層やSX01②南側遺物包含層1c層・2a層上面から出土しているが、これらは層位的



第4図 山居遺跡第Ⅰ群～第Ⅲ群土器（縄文時代晩期中葉～後期中葉）（スケール 1:12）

にもまとまるものではない。

炭化物による年代測定は行っていない。

〔第Ⅲ群土器〕

第Ⅲ群土器は、縄文時代後期中葉の「宝ヶ峯式」（伊東1957、志間・桑月1991）や「宮戸Ⅱa式・Ⅱb式」（後藤1957）と呼ばれる土器型式に相当する。「宮戸Ⅱa式」から「宮戸Ⅱb式」への変遷はSX01②南側遺物包含層の2b③層中～2b②層上面にかけての出土土器の様相において概ね把握されるが、SX01②南側遺物包含層の2b層は水の影響を受けており、参考資料に留めるものとした。

炭化物による年代測定は行っていない。

〔第Ⅳ群土器〕

第Ⅳ群土器は多条沈線文や磨消繩文を特徴とし、縄文時代後期前葉の「南境式」（伊東1957）の一部をなすものである。後藤勝彦による南境貝塚8トレンチの分析では第4～6層の「宮戸Ⅰb式より新しい土器群」（後藤2004・2005）に相当する。これらの土器は型式名称こそ異なるものの、福島県の「網取Ⅱ式」の後半期、千葉県の「堀之内1式」の後半期と多くの共通する特徴を有しており、大きな地域差は見出せない。

山居遺跡では、縄文時代後期前葉の連続的な変化を、SX01③北西側遺物包含層の層位における第Ⅳ

群土器～第VI群土器への変遷として捉えられた。

年代測定を行ったSX01③北西側遺物包含層B2西ベルト包含層IIa層(Sec.19層)中出土の第IV群土器ISK-3の較正暦年代はcalBC2030(Beta-219642)であった。同様の測定例としては、福島県上ノ台A遺跡の綱取Ⅱ式土器でcalBC1795(PLD-4305)(日本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)、東京都多摩ニュータウンNo.243遺跡の多条沈線文の施される堀之内式土器でcalBC1710(IAAA31095)(東京都埋蔵文化財センター2003)がある。山居遺跡例はこれらの年代と比較して、やや古めの測定値が検出されているといえよう。

[第V群土器]

第V群土器は1～3本の沈線による懸垂文を特徴とし、縄文時代後期前業の「南境式」(伊東1957)の一部をなすものである。後藤勝彦による南境貝塚8トレンチの分析では第7～8層の「宮戸I-b式」(後藤2004・2005)に相当する。これらの土器は福島県の「綱取Ⅱ式」の前半期、千葉県の「堀之内1式」の前半期と多くの共通する特徴を有しており、大きな地域差は見出せない。宮城県中南部においては、土器のみならず関東地方のハート型土偶とほぼ同じ土偶が見られる(主浜2008)など、全般に高い共通性を示している。こうした関東地方の文化の北上傾向は後期中葉まで継続する。

炭化物による年代測定は行ってはいない。

[第VI群土器]

第VI群土器は胴部に隆線による装飾を伴うものがあり、しばしば隆線上には連続刺突文が施され、いわゆる鎖状隆線文を呈するものがある。文様の交点部分には好んでボタン状貼付文が施されるのも特徴の一つである。こうした土器群は宮城県里浜貝塚補窪地区の調査でまとめて発見され、1965年に「宮戸I式(南境式)」に先行する型式として「袖窪式」(林1965)が設定された。その後、小笠原好彦によつて「袖窪I式・II式」(小笠原1993)の設定も行われている。鎖状をなす連続刺突文は宮城県南部では「称名寺第2群土器」(吉田1960)として、阿武隈川下流域にも確実に分布(相原2008b)しており、これらは並行関係にあるものと考えられる。

炭化物による年代測定は行ってはいない。

[第VII群土器]

第VII群土器は隆線による装飾を伴うものがあり、隆線文の交点部分には2個1対の刻目文が施されるものがある。しばしば大型の環状把手を伴うものがある。これらは「大木10式」^(注3)(山内1937)の一部(藤沼1968、原・馬目1968、宮城県教育委員会1969、宮城県1981、須藤1985)とも、「門前式(小友式)」(江坂1956、江坂ほか1959、吉田1960)、「宮戸I-a式」(隆線・棲線文土器)(後藤1957)、「觀音堂式」(大迫町教育委員会1986、本間1994)などと呼称されてきた土器に相当する。標式資料の「大木10式」に見られる初源的な2個1対の刻目文はすでに分析(相原2007)したように、第VII群土器におけるものとは異なる。

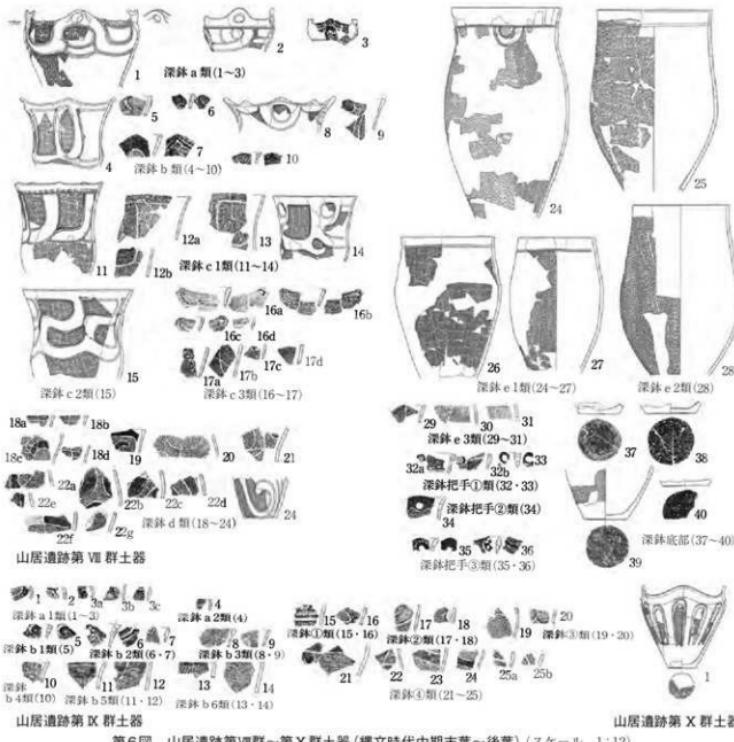
これらに並行する土器は宮城県南部の柴田町向畠遺跡(芳賀1974)や七ヶ宿町大梁川遺跡(宮城県教育委員会1988)等においては、宮城県北部とは異なる様相が把握されている。大梁川遺跡では「称名寺第1群土器」(吉田1960)の範疇で捉えられる後期初頭の住居跡が検出され、他の遺跡においても同土器の出土を確かめることができる(相原2008b)。現在、縄文時代中期と後期の境界を、「称名寺第1群土器」の出現をメルクマールとする説が有力(日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会2005)であり、「称名寺第1群土器」との関係は特に重要である。

年代測定を行ったSX01②南側遺物包含層2c層中の出土の第VII群土器ISK-4の較正暦年代はcalBC2280(Beta-219643)であった。同様の分析例として、岩手県横町遺跡の土器IK4^(注3)(小林ほか2004)の較正暦年代でcalBC2490-2280(Beta-168196)、福島県高木遺跡の称名寺第1群土器でcalBC2470-2400(PLD-4335)(日本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)等の測定値がある。山居遺跡第VII群土器は、福島県側の測定例では、称名寺式第1群とほぼ並行関係にあることになる。現在、有力な縄文時代中期と後期の境をcalBC2470とする見解(小林ほか2003)とも矛盾しない。

山居遺跡では縄文時代後期初頭から中期後業に及ぶ変化が、SX01②南側遺物包含層の層位において、



第5図 山居遺跡第IV群～第VII群土器(縄文時代後期前葉～初頭)(スケール 1:12)



第6図 山居遺跡第VII群～第X群土器（縄文時代中期末葉～後葉）（スケール 1:12）

この第VII群土器から第X群土器への変遷として連続的に捉えられている。

〔第VII群土器〕

第VII群土器は SX01②南側遺物包含層の第VII群土器の下位、2d層上面～3a層上面にかけて出土している。

無文部によって楕円形区画文や方形区画文、横位波瀬文が配され、文様の交点部分にはヒレ状隆線文が付されるものが多い。メビウスの環のようにひねりの入った環状把手を持つものもある。これらは縄文時代中期末葉の「大木10式」（山内1937）の後半期（相原・加藤1988）と呼ばれる土器に相当する。この

大木10式後半期では、北上川水系域の宮城県北部と阿武隈川水系域の宮城県南部では地域差が認められ、概ね福島県中部までが「大木式」の分布圏（相原・加藤1988）で、福島県南部以南は関東地方の「加曾利E4式」土器が分布している。

年代測定を行ったSX01②南側遺物包含層3a層上面の出土の第VII群土器 ISK-1の較正暦年代は calBC2580 (Beta-219640) であった。同様の分析例として、福島県和台遺跡の大木10式後半期土器の較正暦年代で calBC2670-2570 (PLD-4341)・calBC2540-2490 (PLD-4344)、福島県北向遺跡の大木10式後半期で calBC2565-2530 (PLD-4308)・calBC2565-2520

(PLD-4310)、福島県上ノ台A遺跡の大木10式後半期でcalBC2540-2490 (PLD-4302)・calBC2570-2520 (PLD-4303)で、山居遺跡第Ⅷ群土器は福島県の大木10式後半期の測定例ともよく整合している。前述の中期と後期の境界をcalBC2470とする見解(小林ほか2003)とも矛盾しない。

[第IX群土器]

第IX群土器はSX01②南側遺物包含層の第IX群土器の下位、3a層中から出土している。包含層3a層は水の影響を受けた粘土層となっており、土器の出土状況は必ずしも良好ではない。大木10式後半期に相当するものと前半期後半(相原・加藤1988)に属するものが混じって、出土している。

[第X群土器]

第X群土器はSX01②南側遺物包含層の第IX群土器の下位、3b層上面から1個体の土器が出土している。

この土器は口縁部に無文帯がめぐり、胴部には逆U字状の文様が沈線文と隆線文によって形作られており、「大木9式」(山内 1937)に相当する。大木9式では、大木10式後半期に見られるような宮城県北部と南部の顕著な地域差は認められず、概ね福島県中部までが「大木9式」の分布圏(相原・加藤1988)で、福島県南部以南は関東地方の「加曾利E3式」土器が分布している。

年代測定を行ったこの土器(ISK-7)の較正暦年代はcalBC2870(Beta-220719)であった。同様の分析例として、福島県法正尻遺跡93号住居跡の大木9式前半期の土器でcalBC2810-2750 (PLD-4314)、福島県高木遺跡28号住居跡の大木9式後半期の土器でcalBC2700-2580 (PLD-4334)などが示されている(日

本考古学協会2005年福島大会実行委員会2005)。こうした測定値と比較して、山居遺跡の土器(ISK-7)はわずかに古めの値を示している。

5 まとめ

前章までの縄文時代中期末葉から後期前葉を主とする土器編年に関する検討をまとめると、以下の表のようになろう。

研究史的には、縄文時代中期末葉の「大木10式」を後期初頭に位置づける見解も、1959年の江坂輝彌による提示(江坂ほか1959)以来、形を変えながら、根強く主張されて来ているのも事実である。しかしながら、ここまで検討してきたように、層位的にも「門前式」土器は「大木10式後半期」土器に統く土器であり、そして「門前式」土器は宮城県内の山居遺跡第Ⅷ群土器や大梁川遺跡の後期初頭土器を介して、「称名寺第1群」土器と並行関係にあることも、大方の理解を得るものであろう。

縄文時代中期末葉から後期前葉の時期は、近年の周辺科学的分析によって、気候の寒冷化が進行する時代であったことも明らかにされつつある。中期末葉における複式炉の大型化や後期初頭の遺跡数の減少などに関しては、こうした文脈から説明が試みられることが多い。しかし、土器型式の分布において検討したように、気候の寒冷化が進む中で、北方のより冷涼な気候に適応した文化が南下するのではなく、むしろ逆に関東地方のより温暖な地域の文化が全く同じではないにしても、北上して来る様相が把握され、気候の変動と文化の動態は必ずしも一致するものではないことも明らかとなった。

	関東地方	東北地方			山居遺跡較正暦年代
		福島	山居遺跡	宮城県中部～岩手県南部	
晩期中葉			第I群土器	「大洞C2式」後半期	calBC760(Beta-219645) calBC770(Beta-219644)
後期後葉			第II群土器	「金剛寺式」	
後期中葉			第III群土器	「宝ヶ峯式」	
後期前葉	「城之内1式	網取Ⅲ式	第IV群土器	「宮戸I b式」土器より新しい一群	calBC330(Beta-219642)
	「称名寺第2群	網取Ⅰ式	第V群土器	「宮戸I b式」	
	「称名寺第1群		第VI群土器	「南境式」	
			第VII群土器	「袖形式」	
中期末葉	加曾利E4式	大木10式	第VIII群土器	「門前式」	calBC2280(Beta-219643) calBC2580(Beta-219640)
			第IX群土器	「大木10式」後半期	
中期後葉	加曾利E3式	大木9式	第X群土器	「大木9式」	calBC2870(Beta-220719)

表 縄文時代中期末葉から後期前葉を主とする土器編年

(註1) 最も新しい旧河道SX02の砂礫層は基本的に表土として重機で除去したために、その範囲や流路を明確にすることはできなかった。SX01②南側遺物包含層1層(縄文晚期中葉)上面を覆う砂礫層は当初、第2図に示したように旧河道SX03Aに由来する砂礫層として把握したが、この最も新しい旧河道SX02の延長と考えた方が、全体の理解としては矛盾しないことが、後の検討によって明らかとなった。

SX01②南側遺物包含層の上面には、斑状に火山灰が堆積し、その上に問題の砂礫層が検出されている。報告書作成時はこの火山灰を縄文時代晚期のTo-bの可能性を考えたが、この火山灰については産業技術総合研究所地質調査総合センターの工藤崇氏のご教授によれば、火山灰であることは間違いないものの、角閃石が多く含まれ、十和田系とは考えられないとのことであった。宮城県内における縄文時代晚期以降のテフラとしては古墳時代のHr-FP(樺名伊香保テフラ)が知られており、縄文時代晚期のSX01②南側遺物包含層上面の火山灰はむしろこのHr-FPと考え、その上部に堆積する砂礫層はその全体を旧河道SX02の堆積層と考えた方が、遺跡全体の理解としては整合性が高い。

いずれにしても、この火山灰の噴源の同定が待たれるところである

(註2) 「岩手県史」第1巻(1961)は山内清男弁命中の出版物であり、「大木10式」は標式資料として掲載された同氏提供による3葉の写真セットのみに限定する。

(註3) 報告中、この土器は「大木10c式土器」、関東地方の後期初頭に並行するものとされ、「大木10式系の土器自体は、後期前葉期之内式期まで残存するといわれており、IK4はおそらく後期最初頭に位置づけられるよう」(小林ほか2004)とされた。こうした「大木10式」を中心末葉から後期初頭に位置づける見解はその後も諸説(安達・中村2007ほか)へと継承されているが、少なくとも年代測定の行われた横町遺跡の土器IK4は、幅広の口縁部無文帯が内折する器形と断面かまぼこ状を呈する隆線文が用いられており、「大木10式」の範疇で捉えられるものではなく、後期初頭の「門前式」の範疇で捉えられるものであろう。

また、後期初頭の「大木10c式(新)」(小林

2004・小林ほか2005)とされた福島県馬場前遺跡SK1101(山内ほか2003)・馬場小路遺跡2次12・31号埋甕(押山・高松2005)も報告書では「網取1式」とされており、現状の「大木10式後期説」には土器型式の認定自体に問題がある。

(註4) 最も狭い意味での「門前式」は、このスタイルの土器のみを指す。ただし、岩手県清水遺跡(村上2002)や本遺跡での層位を見る限り、この種の土器だけで「門前式」の「土器型式」が構成されているではない。

* 本文中に用いた第1・2・4・5・6図は山居遺跡報告書(宮城県教育委員会2007)中のものを転載ないしは一部改変したものである。

【引用・参考文献】

- 相原淳一・加藤明弘 1988「考察 土器」『七ヶ宿ダメ遺跡調査報告書IV 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』395-455頁 宮城県文化財調査報告書第126集
- 相原淳一 2007「絆括」「山居遺跡(縄文時代編)ほか」253-304頁 宮城県文化財調査報告書第214集
- 相原淳一 2008a「編年研究の現状と課題 東北地方」「縄文時代の考古学」2 145-163頁 同成社
- 相原淳一 2008b「阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」「藏王東麓の郷土記――中橋彰吾先生追悼論文集―」97-132頁 中橋彰吾先生追悼論文集刊行会
- 安達尊伸・中村直 2007「門前式の周辺~地域性認識の試論~」「岩手県における縄文文化の諸相 資料集」17-22頁 2007年岩手県考古学会第38回研究大会
- 伊東信雄 1957「古代史」「宮城県史」1 1-171頁 宮城県史刊行会
- 稻村晃嗣 2008「門前式土器」「絆覧 縄文土器」536-543頁 アム・プロモーション
- 江坂輝彌 1956「各地域の縄文式土器 東北地方」「日本考古学講座」3巻 91-124頁 河出書房
- 江坂輝彌ほか 1959「各地域の縄文式土器形式編年と推定文化圏」「世界考古学大系1 日本I」卷末折込 平凡社
- 大追町教育委員会 1986「観音堂遺跡」大追町埋蔵文化財報告11
- 小笠原好彦 1993「袖窓貝塚出土の縄文後期初頭土器」「宮城史学」特別号(第14・15・16号) 4-22頁 宮城歴史教育研究会
- 工藤崇・佐々木寿 2007「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」「地学雑誌」116-5 653-663頁 東京地学協会



IK4
横町遺跡
2460-2280cal BC
(小林ほか2004より)

- 押山雄三・高松俊雄 2005「町B遺跡」郡山市教育委員会
- 熊谷常正 1986「門前式土器の検討」「岩手県立博物館研究報告」第4号 39-61頁 岩手県立博物館
- 後藤勝彦 1957「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」「塙竜市教育論文」2
- 後藤勝彦 2004「南境貝塚調査の層位の成果 I 7トレンチの場合」「宮城考古学」63-110頁 宮城県考古学会
- 後藤勝彦 2005「南境貝塚調査の層位の成果 II 8トレンチの場合」「宮城史学」24 1-29頁 宮城教育大学歴史研究会
- 小林謙一ほか 2003「AMS¹⁴C年代による縄文土器型式の変化の幅」「日本考古学協会第69回大会総合研究発表要旨」日本考古学協会
- 小林謙一ほか 2004「北上市内遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定」「北上市埋蔵文化財年報(2002年度)」
- 小林謙一 2004「縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—」六一書房
- 小林謙一ほか 2005「福島県郡山市内遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」「町B遺跡」郡山市教育委員会
- 小林謙一 2006「東日本の縄文晩期の年代」「弥生農耕の起源と東アジア」News Letter No.4 国立歴史民俗博物館
- 市立市川考古博物館 1982・1983「シンボジウム堀之内式土器資料集」「シンボジウム堀之内式土器記録集」
- 市川考古博物館 1992「堀之内貝塚資料図譜」市立市川考古博物館研究報告第5冊
- 志間泰治・桑月鮮 1991「宝ヶ峯」財团法人斎藤報恩会
- 主浜光朗 2008「大野田遺跡の土偶」「第5回土偶研究会発表資料 宮城大会」3-9頁 土偶研究会
- 縄文セミナーの会 2007「中期終末から後期初頭の再検討」第20回縄文セミナー
- 鈴木克彦 2004「門前式土器様式の編年学的研究—門前様式の再構築と細分指標—」「考古学雑誌」88-4 28-59頁 日本考古学会
- 須藤隆 1985「東北地方における縄文集落の研究」「東北大学考古学研究報告」11-36頁 東北大学考古学研究室
- 須藤隆編 1995「縄文時代晚期貝塚の研究2 中沢貝塚II」東北大学考古学研究室
- 須藤隆 1998「東北日本先史時代文化変動・社会変動の研究 縄文から弥生へ」
- 東京都埋蔵文化財調査センター 2003「多摩ニュータウン遺跡-No.243・244遺跡」東京都埋蔵文化財調査センター調査報告第132集
- 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会2005「複式炉と縄文文化」「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」
- 丹羽茂 1989「中期大木式土器様式」「縄文土器大観」1 346-350頁 小学館
- 芳賀寿幸 1974「向畠遺跡調査概報」「柴田町郷土研究会会報」7号 8-20頁 柴田町郷土研究会
- 林謙作 1965「縄文時代の発展と地域性 東北」「日本考古学」II 河出書房新社
- 原信行・馬自順一 1968「宮城県大木圓貝塚発見の遺物について」「古代」51 31-42頁
- 藤沼邦彦 1968「石巻市沼津貝塚調査概報」
- 藤沼邦彦 1989「亀ヶ岡式土器様式」「縄文土器大観」4 318-324頁 小学館
- 本間宏 1994「大木10式土器の考え方」「しのぶ考古」10 3-24頁
- 本間宏 2008「南境式・網取式土器」「総覧 縄文土器」544-551頁 アム・プロモーション
- 馬自順一 1968「網取貝塚第四地点発見の掘之内I式土器の考察」「小名浜」福島県いわき市教育委員会いわき出張所
- 宮城県 1981「宮城県史」34(資料篇11)宮城県史刊行会
- 宮城県教育委員会 1969「埋蔵文化財第4次緊急調査概報—南境貝塚」宮城県文化財調査報告書第20集
- 宮城県教育委員会 2007「山居遺跡(縄文時代編)」「宮城県文化財調査報告書第214集
- 村上拓 2002「清水遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集
- 森幸彦 2008「大木9-10式土器」「総覧 縄文土器」360-367頁 アム・プロモーション
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」「考古学」1-3 139-157頁
- 山内清男 1937「縄文土器型式の細別と大別」「先史考古学」1-1先史考古学会
- 山内先生没後25年記念編集刊行会 1996「画竜点睛—山内清男先生没後25年記念集—」
- 山内幹夫ほか 2003「常磐自動車道遺跡調査報告34」「福島県文化財調査報告書第398集」
- 吉田格 1960「東京都武藏野郷土館調査報告書 第一冊 一横浜市称名寺貝塚」「武藏野文化协会
- 吉田義昭 1960「門前貝塚」盛岡市民館

宮城県登米市中田町 上沼八幡神社の本殿について⁽¹⁾

関 口 重 樹(東北歴史博物館)

- | | |
|--------------|-----------------------|
| 1. 由緒 | 4. 史料からみた本殿の造営時期と改築経過 |
| 2. 社殿等の配置 | 5. 建築からみた本殿の造営時期と改築経過 |
| 3. 本殿の建築について | 6. まとめ |

1. 由緒

上沼八幡神社は登米市中田町の東方、北上川沿いの小高い八幡山上にある【図1】【図2】。

前九年の役の際、源頼義・義家父子はここ八幡山に陣を構えた。その際、八幡大神を奉祀して戦勝を祈願、その結果、激しい戦いの末に勝利をおさめることができた。父子は凱旋にあたり、八幡大神の守護に深く感謝し、当地に境内を寄進して社殿を創建する。これが上沼八幡神社の縁起である。創建後は歴代領主に深く崇敬され、慶長9(1604)年には伊達相模宗直が社領を寄進、武具を奉納した記録も遺っている。⁽²⁾。

2. 社殿等の配置

旧上沼小学校から東方に進み、南東に延びる緩やかな御神坂を上ると町道上に大鳥居(平成3(1991)年竣工)があり、その100mほど先の左手に参道が通ずる。この町道は参道を過ぎると北東方向にカーブし、神社境内の南東辺を画す。

参道は、石階段の先にまず「石鳥居」(大正13(1924)年竣工)がある。石鳥居をくぐると、右手に「社務所」(平成12(2000)年竣工)があり、さらに進むと「木鳥居」に達する。参道はさらに続き、30mほど進むと朱塗りの「鳥居」がある。鳥居をくぐると、左手に「手水舎」(昭和20年代後半竣工)、右手に「額殿」

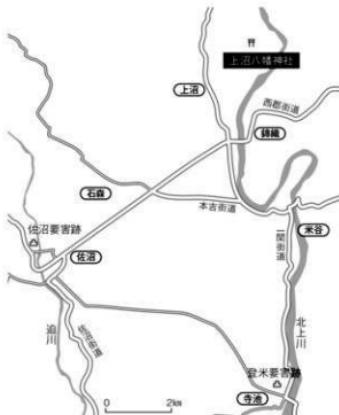


図1 上沼八幡神社位置図



図2 八幡山全景

があり、その先の石段を昇ると「隨神門」【図4】がある。

隨神門をくぐると、「拝殿」【図5】の正面に達する。右手には「神樂殿」(昭和50年代竣工)【図7】、左手には町指定文化財の姥杉2本がそびえる。拝殿奥には「本殿」があり、「幣殿」で連結し、周りには瑞垣を巡らす。また拝殿からは姥杉の間に廊が伸び、「神饌所」(昭和4(1929)年竣工)【図6】と連結している。

これらのほか、本殿東方に「羽黒山神社」(明治初期に藤家家より移築)と「招魂社」(平成7(1995)年竣工)、本殿北方には「境内摶末社」、隨神門東方に「御札所」(昭和50年代竣工)が配される【図3】。

3. 本殿の建築について

本殿は一間社流れ造【図9】。屋根は銅板葺き(も

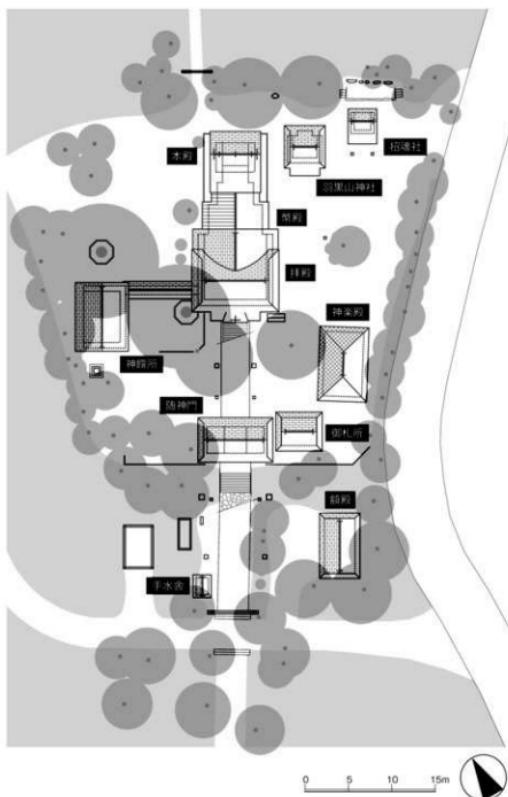


図3 上沼八幡神社配置図



図4 隨神門



図5 拝殿



図6 神饌所



図7 神樂殿

と茅葺き)。棟には千木・勝男木(銅板製)を載せるが、茅葺き当時に同様のものが載っていたかは不明である。

軸部は丸柱、床下では八角柱となる。縁等は角柱。現在これら柱・束は、コンクリート基礎上に井桁状の土台を組み、その上に建っている。コンクリート基礎になる以前は、亀腹の上に礎石があり、その上に直接柱が建つ、いわゆる石場建てであった。礎石は廃棄された否かは不明。なお、この基礎変更の際、拝殿を建て増しているが、その建て増し分だけ本殿の位置を後方に移動したという。

軸部には頭貫、切目長押、内法長押が四方に廻る。正面には両折の柱扉を吊り、他の三面は板壁となる。また正面・側面には高欄付きの切目縁を巡らす。側

面には、板障子、笠木、竹の節欄間の制となる脇障子を備える(現在正面左手の欄間は欠損している)。

柱上組物は出組で、軒支輪あり【図13】。中備には幕股を配する。なお幕股は、正面が三つ巴、側面背面は鳥獸が彫られている(正面向かって右側側面の彫り物は外れており、縁上に保管されている)【図11】。軒は二軒繁重木。

妻部の意匠は二重虹梁。虹梁間は桁を支える平三斗と中央に幕股、また上部虹梁には拳鼻の付いた大瓶束が載る。拌みには鰐付きかぶら懸魚、破風の降りには菊花を象った桁隠しが付く【図12】。

向拝柱は唐戸面を取った角柱で、長さの2/3ほどに地紋彫を施す。地紋彫は麻の葉文様を一面に、上部に雲形文、下部に巴文を配する【図18】。柱上

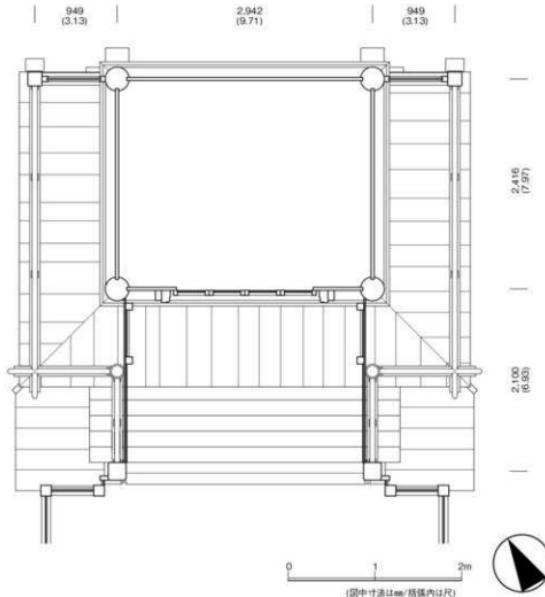


図8 上沼八幡神社本殿平面図

には平三斗を組み、主屋の柱から向拝柱上の組物に向け海老虹梁を渡す【図14】。向拝正面の水引虹梁上部には葵股を置く【図15】。虹梁木鼻は抽象的な象頭【図10】。前面には5段の階段を設け、高欄を付ける。また階段の下には浜床が付く。

向拝柱と主屋柱との間は板壁で囲い、向拝部を幣殿・拝殿と一体化した空間としている。幣殿について
は、『寺院明細帳』(明治17(1884)年／宮城県公文

書館蔵)の上沼八幡神社の項にて「一幣殿間口一間三尺奥行三間三尺」と、本殿階段浜床部に遺る壁痕跡と一致する寸法が記されている。一方、当社に遺る『神社境内図面』(明治3(1870)年)においては、本殿・拝殿間は石敷きとなっている。したがって幣殿は明治初期、向拝板壁もそれ以降の設置されるようになつたとまずは考えておきたい。

垂木・柱・板壁・虹梁・高欄等は朱塗り、虹梁・木鼻・



図9 本殿全景



図10 本殿向拝木鼻



図11 本殿基盤



図12 本殿妻飾



図13 本殿柱上組物



図14 本殿向拝海老梁



図15 本殿向拝水引虹梁

肘木等の文は黒、組物には胡粉彩色の痕跡が見られる。外部は退色が激しく、細かい部分の塗り分けの判別はできないが、風化を免れた向拝部は鮮やかな色彩を残している。向拝部から察するに、軒支輪の間と棊股の中にも胡粉が施されていたようである。ただ朱塗りに関しては、一部塗り替え（あるいは塗り加え）の痕跡があり、建築当初どこまで施されていたかは不明な点も多い。

4. 史料からみた本殿の造営・改築

現在の上沼八幡神社本殿の建築年代・改築年代およびその形態を知る史料は以下のとおりである。

- ①「奉造営八幡宮一宇一天泰平四海静謐祈所」（安永5（1776）年／棟札）【図16】
- ②「奉造営白旗山拝殿一宇鎮護國家五穀成熟祈所」（安永5（1776）年／棟札）【図17】

本殿および拝殿造営の際の棟札である。いずれも安永5年3月14日の日付が記されている。本殿では大工棟梁はか大工3名と小工4名、拝殿では大工棟梁はか大工2名と小工2名が名を連ねる。

両棟札の裏には造営までの経緯が記されている。表現が多少異なるものの内容はほぼ一致し、明和7（1770）年より中興の祖である廣賢を中心となって14,838人の人足をもって社地の造成および本殿拝殿等が造営されたことが明らかとなる¹⁰⁾。また造営に際し、本殿棟札には城主から金百切が、拝殿棟札には神像・灯籠・金剛水引・鰐口等が奉納されたことも記されている。

なお拝殿棟札の裏面左下には「右地明治七年九月土地ニセラレタリ」という近代以降の註釈が記されている。これについては、まず当該部分のみの註釈を考えたいが、筆跡は本殿拝殿棟札顎文等のそれと一致するようにもみられる。記載内容を疑うまでは至らないものの、この二枚の棟札が明治以降の写してある可能性も否定できない。この点については後学を待ちたい。

- ③「奉遷座八幡大菩薩天長地久國土安穩五穀成就村中安全如意欽」（文政12（1829）年／棟札）

本殿に納められていた棟札である。文政12年に

屋根葺き替えを行ったことがわかる。

- ④「奉建立神饋殿一宮 他」（昭和4（1929）年／棟札）

昭和4年の郷社昇格にあわせて行われた神饋所新築、拝殿屋根葺き替え、第二鳥居銅板改造の棟札である。裏面に詳細なる由緒來歴が綴られており、本殿については①と③にある安永5年の建立および文政12年の屋根葺き替えが記される。また過去の棟札にない記述としては、「明治三十三年宮殿拝殿附属社の葺替を行ふ」というものが確認される。

- ⑤「社寺神社由緒調 登米郡」（明治40（1907）年／宮城県公文書館蔵）

「調査意見書／上沼村 村社 八幡神社／（中略）／二 境内及建物／境内ニハ松杉數百本及櫻等ノ古木アリテ生育良好ナリ建物ハ明治三十四年中／氏子及ヒ有志ノ寄付ニヨリテ修繕シタ／ルヲ以テ破損ノ個所ナシ」（“／”は改行を表す）

ここに記される明治34（1901）年の修繕とは④の屋根葺き替えと同一であると推察される。

- ⑥「社記」（中田町史編纂資料集第三集より）

「文明二年及昭和（ママ・明和カ）七年に於いて、大修理を加え、更に、安永五年三月十四日に至り、宮殿を再建し、其後幾々修理を加え、昭和九年四月銅板葺に改造、拝殿は昭和二十九年八月銅板葺に改造、現今に至る。これより先、昭和三年御大礼記念として、神饋所を建造、昭和二十二年社務所を建造せり。（後略）」

以上、史料を纏めると、本殿は下記のような造営・改築の経過があったことが明らかとなる。

- 文明2（1470）年

大修理が行われる。

- 明和7（1770）年

廣賢により本殿拝殿等の造営が開始される。

- 安永5（1776）年

本殿拝殿等が竣工する。

- 文政12（1829）年

本殿屋根の葺き替えが行われる。

- 明治33（1900）あるいは34（1901）年

本殿・拝殿・附属社の屋根葺き替えが行われる。



図16 本殿棟札（安永5年）



図17 拝殿棟札(安永5年)

355
【洋服販賣標札】

昭和9(1934)年

本殿屋根が茅葺きから銅板葺きに葺き替えられる。

5. 建築からみた本殿の造営時期および改築経過

史料によれば、本殿は安永5年の建築であることが分かるが、ここでは建築として相違ないかを検討する。

まず本殿の細部意匠は、虹梁の若葉文、幕股の形状、大瓶束の拳鼻など、史料と合致する江戸中期の堅実な手法がうかがえる。ただ、柱筋よりもせり出す妻飾りなど、江戸中期以降に多くの技術も散見され、この点については些か時期尚早な感もある。しかし登米伊達家の崇敬ぶりを鑑みれば十分に納得がいくことであり、この意匠をもって諸記録の年代を疑うまでには至らない。

向拝柱に施される地紋彫は県下藩政期における社寺建築では例がなく、非常に珍しい意匠である。ただしこの紋には、拝殿および附神門に施される江戸中期を降る意匠との共通性も確認できることから、造営当時のものと結論づけるのは早計であろう。諸記録の精査、拝殿・附神門の調査などを重ね、慎重に検討する必要がある¹⁰⁾。

そのほかの部位については、土台・屋根・浜床に近代以降の改変が確認されるものの、総じて建築形態を大きく変えたという痕跡はなく、江戸中期の神社建築に特徴を良く伝えている。向拝柱に若干の疑問を残すが、本殿の建築年代は史料の示すとおり安永5年と考えられ、それ以降は極端な改築もなく、現在に至っているとして間違いない。

6.まとめ

- 1) 八幡神社本殿は、虹梁の若葉文や幕股の意匠、木鼻や拳鼻の様式などに、江戸中期社殿建築に特有の堅実さ、力強さがうかがえる。一間社でありながらも雄大さを感じさせ、堂々とした造りとなっている。
- 2) 妻飾り・向拝柱に加えられた装飾、極彩色を施された組物などは、地方においては特異なほど洗練さ

れている。

- 3) 向拝柱に施された地紋彫については当時のものか若干の疑問が残る。仮に江戸期のものであるとすれば宮城県下の江戸期社殿建築において遺構例は少なく、大変貴重なものとなる。これを明らかにするには、拝殿・附神門を含めた詳細な調査および詳細な記録資料調査が必要であろう。
- 4) 本殿の建築年代は、その様式や意匠から、棟札が示す安永5年の造営に間違ないと考える。造営や改築



図18 本殿向拝柱地紋彫
(旧中田町教育委員会提供)

の経緯が不明な社殿が多い中、このように年代を特定できる点は評価が高い。また、当神社には登米伊達家の崇敬を示す史料が多く遺るが、この本殿もそれらの一つとして大変重要な史料と言えるだろう。

謝辞：本稿執筆にあたり、上沼八幡神社宮司白旗宏喜氏、旧中田町教育委員会生涯学習課に多大なご協力を賜った。ここに記して深謝いたす次第である。

【註】

- (1) 本稿は平成15年度に旧中田町（現登米市）の依頼により行った調査成果ものもとに、平成20年度の史料調査を加えたものである。
- (2) 中田町史編さん委員会編『中田町史改訂版』（中田町／平成17年3月31日）。
- (3) 同時造営の建築について、本殿棟札には「本社拝殿御門長床附神門共建立」、拝殿棟札には「本社拝殿御門長床四箇建立」とあり、本殿棟札に隨神門に関する記述が確認されない。
- (4) 精査は未了であるが、向拝柱改造の可能性を示すものとして以下2つを追記しておく。
 - a) 当社には「御拝」「石敷」の寄進札が遺る。ここで言う「御拝」とは向拝を意味するものと考えられる。ただし、判読不能ながらも「安永八年」との記述が確認され、竣工直後に改修することがはたしてあり得るのかは検討未了。
 - b) 昭和43年刊行の小倉強『宮城県の古建築』において、拝殿が茅葺きであった当時（昭和29年以前）の上沼八幡神社が紹介されている。ここでは拝殿の向拝柱に地紋彫があると記され、本殿の向拝柱については触れられていない。ただし小倉氏の報告ミスの可能性もある。

楠本コレクションの調査 縄文土器編

丹羽茂(東北歴史博物館)

はじめに

資料の調査

宮城県内の遺跡

石巻市南境貝塚

仁斗田貝塚

宝ヶ峯遺跡

沼津貝塚

泉沢貝塚

二渡貝塚

女川町尾田峯貝塚等

東松島市平田原貝塚

松島町西の浜貝塚

東北地方の遺跡

福島県いわき市平の貝塚

岩手県大船渡市泊貝塚

青森県鰺ヶ沢町の遺跡

八戸市是川中居遺跡

長七谷地貝塚

その他の縄文土器

考 察

終わりに

はじめに

1. 楠本コレクションについて

当館が所蔵する楠本コレクションは縄文時代の資料(土器・石器・骨角器など)を主体とするもので、楠本政助氏がおもに昭和30年代に発掘調査・分布調査(表面採取)などによって精力的に収集したものである。楠本氏は調査や研究の成果を「仙台湾における先史狩漁文化」「矢本町史」第1巻・「石巻市田代島仁斗田貝塚」「石巻地方の歴史と民俗」(宮城県石巻工業高等学校)としてまとめるとともに、多数の論文を発表し、「縄文人の知恵にいどむ」・「縄文生活の再現・実験考古学入門」(筑摩書房)などの著書も出版している。特に、骨角器を中心として狩猟・漁労具の実験的研究に力をそそぎ、その成果は高く評価されている。また、楠本氏の収集資料は各種の論文・出版物にも掲載(実測図・写真)され、多くの

人々に知られるところとなっている。これは、資料の学术的価値とともに、楠本氏の縄文土器復元の技術が優れていたことにもよると思われる。

資料の寄贈・譲渡

当館では東北歴史資料館を発展的に解消し、東北歴史博物館を建設するにあたって、楠本政助氏からコレクションの寄贈・譲渡を受けることになった。資料数が膨大なため、移管は第1次(平成9年3月)・第2次(平成16年2月)・第3次(平成17年8月)の3回に分けて行われた。

第1次移管は主要資料で、泉沢貝塚の土偶や南境・仁斗田・沼津貝塚の骨角器などコレクションを代表するものが含まれていた。平箱への収納と台帳の整備を行うとともに、代表的な資料は平成11年の当館開館時から総合展示室で公開するとともに、縄文土器の一部も当館ホームページで紹介するなど、積極的に活用をはかってきた。第2次移管は楠本氏が東

北大に寄託していた縄文土器である。第3次移管は自宅に残していた土器・石器・骨角器・動物遺存体などである。

移管された資料

楠本コレクションは氏自身によって種類ごとに登録、台帳が作成されていたが、一部に記載漏れもみられた(P.NO: 土器および土製品 B.NO: 骨角牙貝器 S.NO: 石器類)。

当館では、第1・2次移管資料については種類(土器・土製品・骨角器・石器)ごとに整理し、平箱に収納した。ただし、第3次移管資料は、そのままの継続登録・箱収納が困難となったため、「追加箱番号」を新たに設けることにした。

ちなみに、縄文土器に関しては、第1・2次移管資料を「土器箱」①~④、第3次移管資料を「追加工器箱」①~⑤として、収納・登録を行った。他の遺物に関しても同様な方法をとった。

縄文土器について

縄文土器の主体は宮城県石巻市南境貝塚発掘調査および採集資料(52点)・同市仁斗田貝塚試掘資料(6点)である。この他、同市宝ヶ峯遺跡(12点)・沼津貝塚(12点)・泉沢貝塚(1点)・

二渡貝塚(1点)・女川町浦宿尾

田峯貝塚等(2点)・東松島市平田原貝塚(1点)・松島町西の浜貝塚(2点)がある。県外としては、福島県いわき市平(1点)・岩手県大船渡市泊貝塚(2点)・青森県八戸市川中居遺跡(1点)・同市長七谷地貝塚(12点)・同県鰹ヶ沢町(1点)・その他(2点)である。合計108点を本編に収録した。この他、掲載しなかった遺跡名不明の破片が23点ある。

縄文土器のうち、台帳に記載されているのは34点で、全体の3割である。その代わり、土器に遺跡名・出土状況などを書き込んだもの(ラベル・直筆記)が



図1 楠本コレクション関係遺跡
(上段: 東北地方 下段: 石巻市周辺)

比較的多かった。もちろん、無記名のものもあるが、それは氏の著作や教示で補った。

これらの資料について、当館では断続的ながら調査を実施してきた。今回、糸文土器に関する調査成果がまとまつたので、ここに「楠本コレクションの調査 糸文土器編」として公表する。

2. 换修について

楠本政助氏は収集した糸文土器を精力的に復元し、彩色している。その数は75点に及ぶ。石膏を用い、水彩絵具で彩色している。その出来映えは見事なものが多い。しかし、実際に観察してみると次のような問題点も認められた。(1)石膏部分もしくは実物部分が壊れているもの。(2)一部破損もしくは復元が粗雑なもの。(3)水彩絵具が剥落しているもの。(4)資料が脆弱なもの。

そのため、次のような対策をとることにした。

(1)のバラバラに壊れてしまっていたものは接合し

直し、必要に応じて補修した(資料34・38)。石膏復元部が破損しているものは補修を行った(資料56・57)。補修材には石膏とキューテックスを併用することにした。

(2)については二通りの対応をした。今後の展示公開に備えて補修したもの(資料4・44・49・70・84・86・94・95・108)と、文様復元に疑問の余地を残す程度のものは図面に修正を加えたものである(資料11・81)。

(3)はマット・バニッシュ(つや消し保護ニス)を薄く塗布し、保護膜で覆った後、アクリル絵具で補彩した。少し光沢を生じるが、復元部彩色の保護上やむを得ないと判断した。

(4)はバインダー17による強化処理を行った(資料95～106)。

この他、資料78(遠藤源七氏旧蔵)の皿は石膏を取り外し、クリーニングを行った。

3. 調査について

資料の観察と記録

1. 資料の観察結果は、実測図と拓本を併用し、必要事項について注記を加えた。資料の観察には肉眼

の他にヘッド・ルーペ・8倍ルーペ(Canon)・实体顕微鏡(OLYMPUS)を使用した(胎土や含有鉱物の観察)。資料の観察記録として、メモ写真にはデジタルカメラ(Canon)を使用したが、重要度の高いものは6×7判のフィルム・カメラ(Mamiya RZ)で撮影した(タンゲステンフィルム使用)。

2. 大きさ(高さ・幅)は現状を基本とした。復元してあるものは、残存部ではなく復元後の大きさを示す。資料に貼り付けられたラベル・筆記の内容(楠本記録)は注記とともにデジタルカメラで記録した。

3. 正面実測図は原寸で、文様展開図は1/2で作成した。これらの図面は残存部と・復元部を識別できるように図化した(復元部には地文を書き込まないなど)。また、特に大形で情報量があまり多くないものの(糸文施文のみ)については1/2原図とした(資料34・35・38)。

4. 単節斜行糸文については、条間と節高を計測し、mm/条・mm/節を記録した(2条撚りか多条撚りかの識別指標)。内面の焦痕跡については明瞭なものについて図化した。

以上の他、基本的な観察・図化の方法は『上深沢遺跡』(官教委:1978.3)による。

なお、資料の観察・調査・記録とともに、これまでの出版物における掲載文献の調査も併せて実施した。

調査協力者・機関

調査にあたっては、楠本政助氏をはじめとして、次の方々(個人・機関)のご協力をいただいた。深く感謝したい。

阿部博志・阿部恵・相原淳一・天野順陽・新井達哉・加藤道男・菅野智則・菊地芳郎・小井川和夫・小林正史・後藤勝彦・志賀泰治・白鳥良一・閔根達人・次山淳・手塚均・藤沼邦彦・藤原妃敏・増子正三・山田晃弘・八木光則・柳田俊雄

東北大考古学研究室・東北大総合学術博物館・弘前大学亀ヶ岡文化研究センター・福島大学考古学研究室・福島大学考古学研究会・福島県飯野町(現福島市)教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課・宮城県多賀城跡調査研究所

4. 本編の記載・記述について

1. 本文・掲載図・写真図版には資料番号を付け、
番番号・資料の記載内容（ラベル・筆記）を示した。
 2. 資料の印刷正面図・拓本は1/3縮尺、展開図・編
集図は1/6縮尺を原則とした。文中で述べた左右
とは、資料に向かっての左・右を示す。
 3. 県内の遺跡名は「宮城県の貝塚」「東北歴史史料館
資料集」25（藤沼・小井川他：1989.3）・「宮城県遺
跡地図」「宮城県文化財調査報告書」第176集（宮
教委：1998.3）によった。
 4. 楠本政助コレクションの縄文土器が掲載されて
いる主な出版物は次の通りであるが、本文中では
煩雑さを避けるため略称を使用した部分がある。
 1. 楠本政助（1973.5）「仙台湾における先史狩漁
文化」「矢本町史 先史」第1巻（略称「矢本町史
先史」）
 2. 楠本政助（1973.8）「石巻市田代島仁斗田貝塚」
「石巻地方の歴史と民俗」宮城県石巻工業高等
学校創立10周年記念論集（略称「仁斗田貝塚」）
 3. 伊東信雄・藤沼邦彦他（1981.10）「縄文時代」
「宮城県史34 資料集V 考古資料」（略称「宮
城県史考古資料」）
 4. 林謙作（1965.7）「縄文文化の発展と地域性－
東北」「日本の考古学II 縄文時代」河出書房
(略称「日本の考古学II 東北」)
 5. 山内清男編著（1964.3）「日本原始美術I 縄
文式土器」講談社（略称「日本原始美術I」）
 6. 永峯光一編（1981.7）「縄文土器大成2－中期」
講談社（略称「縄文土器大成－中期」）
 7. 野口義磨編（1981.10）「縄文土器大成3－後期」
講談社（略称「縄文土器大成－後期」）
 8. 須藤隆（1985.10）「東北地方における縄文集
落の研究」「東北大考古学研究報告1」（略称
「東北縄文集落の研究」）
- なお、本文中では敬称を省略させていただいた。
ご了承をお願いしたい。

資料の調査

宮城県内の遺跡

石巻市南境貝塚（挿図1参照）

遺跡の位置 石巻市南境字妙見・北境字久保

標高10～20mの東西に長い丘陵鞍部に立地する。
丘陵鞍部の南と北斜面に貝層が分布する。大正期に
遠藤源七・毛利総七郎による調査があった（藤沼・
小井川他：1989.3）。

発掘調査について 楠本政助による南境貝塚の発掘
調査は昭和35～36年とみられる。昭和35年10月
刊行『東北考古学』第1輯「宮城県南境貝塚出土の離
頭話について」で楠本が出土土器との層位の関係に
基づいた考察を行っている（楠本政助：1960.10）。し
たがって、発掘調査の開始は昭和35年10月以前で
ある。さらに、文化財保護委員会に昭和40年2月16
日付けで楠本が提出した「埋蔵文化財現物譲与願い」
には次のようにある。

1. 物件名

(1)宮城県桃生郡河北町北境久保出土

(2)品名及び数量

土器多数、石器26、土製品33、石製品1、骨角
貝製品64

2. 発見年月日 昭和36年8月10日

「河北町（現石巻市）北境久保」とは南境貝塚の
北斜面貝塚にあたる。そして、発掘調査最終日は
昭和36年8月10日ということになる。その後、昭
和41年8月16日付けで文化財保護委員会から譲
与の通知がなされている（宮城県教育委員会文書
写しによる）。

この間の事情にすることとして、楠本政助
(1976.2)は「縄文人の知恵にいどむ」の中(139頁)で、
「約1年半かかる15メートル×5メートルの試掘
溝を2本あけたが、土器や石器の他に動物の骨角で
つくった漁具類が予想以上に多く出土した」と述べ
ている。

出土状況の記録 縄文土器には次のような記名がみ
られる。資料1の内面には「P153 南境」のラベル
が貼られ、「C - I」の書き込みがある。また、資料
14には「B - V P539」とだけ書き込まれ、遺跡名

は記入されていない。しかし、楠本政助(1973.5)「仙台湾における先史狩漁文化」『矢本町史』第1巻の図版38にはその写真が掲載され、出土地は南境貝塚と記されている。これらのことから、「B」「C」は「繩文人の知恵にいどむ」にある南境貝塚発掘調査の「試掘溝を2本」あたり、時には遺跡名の記入を省略することもあったのではないかと思われる。

したがって、これらの略記資料も楠本政助(1973.5)「矢本町史 先史」に基づき、「南境貝塚出土のものとして扱うことにする。ただし、アルファベットに付加されたローマ数字は区名を指すのか層名なのかは「考察」で改めて吟味することにしたい。

資料1(第1図 図版1 土器箱①)

楠本記録 ラベル「P153 南境」 筆記「C - I」
『矢本町史』第1巻「先史」図版26「縄文中期 大木8b式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ23.7cm・最大径(口縁部)17.9cmの深鉢で、胴下・底部は復元補修してある。口縁部は軽く外反し、頸部ですばり、胴部が僅かに膨らむ。

文様は口縁部横位溝巻文帯・頸部無文帯・胴部溝巻主体文帯からなっている。

口縁部文様帯 横位溝巻文は粘土紐(2条)を貼り付け、磨いて仕上げたものである。その断面は凸状に角張った形をしている。横位溝巻文は少し大きな溝巻部分を突起状に3個配置し、その間に小振りな溝巻文や円文(溝巻文の省略形か)を配している。

頸部無文帯には横のミガキが加えられている。

胴部文様帯 頸部無文帯とは2条の横位沈線に画される。胴部には単節斜綱文を施し、その後沈線(2条1単位を基本)による溝巻を主体とした文様を描いている。沈線によって生じた粘土の捲れ上がりはオサエで静め、沈線間の繩文が消されている部分もある(拓本参照)。単節斜綱文はLR(3.3mm/1条・2mm/1筋)継回転であるが、施文単位間に縱方向の隙間がみられる。

溝巻文は大振りの2個と、両側から延びた沈線が棘(剣先)状に溝巻部分を包む小振りの2個からなり、それらが並行沈線で横方向に連結されている部分も

ある(展開図参照)。

内面 内面は口縁～胴上部が横、胴中央部以下が縦の軽いミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通であるが、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。色調は内外面とも灰色を帯びた暗褐色で、一部に橙褐色の部分もある。

胎土はシルト質粘土で、黒色の破碎石片(半透明)が目立つ他、石英・長石・風化砂礫なども含む。

関連事項

石巻公民館(1964.10)「石巻周辺古代遺物展」『目で見る郷土史 シリーズ1』8頁-3に「南境貝塚」として写真が掲載されている。

永峯光一編(1981.7)『純文土器大成－中期』図版54に「大木8b式」として写真が掲載されている。図版解説では「大木8b式土器の基本的な特徴を示すもので、東北地方中・南部に広く分布している。」とある(執筆者:丹羽茂)。

資料2(第1図 図版1 土器箱①)

楠本記録 ラベル「P152 南境」 筆記「C - II」

形状と技術的特徴

現状 高さ25.4cm・最大径(口縁部)25.1cmの深鉢で、胴下半部は復元補修してある。口縁部が大きく内湾して膨らみ、胴部はキャリバー状にすぼまる。

文様は口縁部横位溝巻捺円文帯・頸部無文帯・胴部縦位溝巻円文帯からなっている。

口縁部文様帯 横位溝巻捺円文は、概形製作後に粘土紐の貼り付けによる隆線と沈線技法を併用して形作り、刺突文を充填して、最後に磨いて仕上げている。隆線の断面は隅丸三角形で、頂部が細いものと、平坦面を残す部分がある。溝巻部は捺円部に較べ、隆線が高く立体感を出している。捺円文に充填された刺突文は、縁近くで仕上げ沈線に切られるものが多いが、一部に沈線の縁に盛り上がっているものもある。

これらの横位捺円文群の文様構成を詳細にみると、四單位構成であることが分かる。それぞれの単位は口縁頂部に設置された長く延びる横位溝巻隆線文とその下に組み合わせて配された円形凹み文・横位捺円文・横位溝巻捺円文(抱き込み型)各1個から

成っている。これらの文様配置は規則的である。口縁上部の横位渦巻隆線文の、渦巻部とその直下に配された円形凹み文が四単位文様構成の起点と終点の役割を果たしている。

頸部無文帯 頸部無文帯は口縁部文様帯下部と胴部文様帯上端の隆線文によって画されるが、それらと一体になって、横のミガキで仕上げられている。

胴部文様帯 頸部を画する横位隆起線から垂下する縱位渦巻隆線文が11列あり、それぞれの間に口文が配置され、単節斜繩文が充填施文されている。縱位渦巻隆起文は縱に長く、胴上部で渦巻文が対向している。隆起線は粘土紐の貼り付けによるが、両側の沈線とともにミガキ仕上げである。断面は隅丸三角形であるものの、渦巻部を除けば、頂部に平坦面を残す部分が多い。沈線は縱位渦巻文の側面を縫取るよう引かれているので、胴上部の渦巻き部では口文の幅が狭まって、やや歪んだ形になっている。縱位渦巻文が主体と言える。

口内には単節斜繩文(LR:3.3mm/1条・2.5mm/1節)が縱回転で充填施文されている、周縁が仕上げ沈線に切られるものの、繩文施文末端と施文空白部を残す部分もある。

内面 内面は口縁部が横のミガキ、胴上部は少し粗い横・斜めのミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くとコンコンとカンカンの中間の音を発する。胎土は砂粒を含むシリト質粘土で、石英や黒色破碎石片(半透明)が目立つ。

関連事項

林謙作(1965.7)「日本の考古学II 東北」図24に資料2(「大木9a式」)とともに資料6(「大木9b式」)の1/8実測図が対比させた形で掲載されている。そして、林は「宮城県梨木沢の調査によって、大木9式が少なくとも二型式に細分されることがあきらかになった。前半のものでは貼付による立体的な文様表現が多く、また器形もキャリバー形に近い(図24=3:「資料2」を指す)。後半になると文様の表現技法は磨消繩文に接近する一方、器形はふたたび単純化する(図24=4:「資料6」を指す)。」とした。

この林による大木9式細分説は後藤勝彦(1968.3)・

斎藤良治(1968.12)による批判もある。いずれにしても、後藤が述べるように、「大木9aと9bに細分しているが、これが妥当かどうかはわからない。考え方によってはいくらでも細分出来るが、それが形式的位置づけが出来るかどうかがわからない。」という指摘は、それなりの考え方であろう。

この他、永峯光一編(1981.7)『绳文土器大成－中期』図版58に「大木9式」として写真が掲載されている。図版解説では「この土器は、文様帯が口縁部と胴部に分かれていること、渦巻文様を多用することなどから大木9式でも古い要素をもつものである」としている(執筆者:丹羽茂)。

また、須藤隆(1985.10)は「東北縄文集落の研究」で、実測図を掲示し(第6図2)、林の論考を踏まえながら、大木9a式としている。

資料3(第2図 図版1 土器箱②)

楠本記録 ラベル「C-I」

形状と技術的特徴

現状 高さ20.3cm・最大径(口縁部)15.9cmの波状口縁深鉢で、口縁部3/4～胴部1/3は復元補修してある。残存部の状況から、口縁部は外反する4波の大きな波状と推定される。頸部が縮まり、胴中央部で再び膨らむ。

文様は口縁部無文帯・頸部沈線文帯・胴部渦巻文帯からなる。

口縁部無文帯 口縁部は幅10～15mmの無文帯で、ナメもしくは軽いミガキが加えられている。ミガキの方向は口縁上端に沿っている。

頸部文様帯 頸部には3条の幅広沈線が波状に巡っている。これらの沈線は密接し、その境目は低い稜状になる部分が多い。胴部との境は粘土紐の貼り付けによる微隆起線で、その断面は隅丸三角形や稜状をしている。沈線と共にミガキ仕上げである。

胴部文様帯 胴部上端の波状隆起線から胴下部に向かって、縱位の渦巻口文(抱き込み型)と縱長口文がほぼ交互に配置され、その隙間に頂部の丸い下垂沈線のみられる部分もある(展開図参照)。渦巻部は粘土紐貼り付けの隆起線であるが、その他は、やや幅の広い沈線となっている。隆起線部は低い稜状を

なす(立体感は弱い)。縦位横円文や口文には単節斜縄文(RL:4mm/1条・2.2mm/1節)が継回転施文されている。その後、文様の形状に沿って全体がミガキ仕上げされている。

底部圧痕 底部には木葉痕がある。中心葉脈を含む葉の半分強の大きさが圧痕として残っている。

内面 口縁部から頸部内面は横のミガキであるが、ケズリの痕跡も顕著に残している。胴部は斜めの軽いミガキやナデであるが、底面はザラザラした粗面となっている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面は橙～褐色で黒斑がある。

胎土は比較的均質なシルト質粘土で、石英・長石の他、黒色破碎石片粒(半透明)等が含まれている。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史考古資料』図版66-2に大木9式として写真が掲載されている。

須藤隆(1985.10)は「東北縄文集落の研究」で、実測図(第6図3)・写真(第7図1)を掲示し、大木9a式としている。

資料4(第2図 図版1 土器箱③)

楠本記録 ラベル「P128 南境B-VI」台帳「南境 大木9」

形状と技術的特徴

現状 高さ13.2cm・最大径(口縁部)13.6cmの波状口縁深鉢で、口縁～胴部3/5は復元補修してある。残存状況から、口縁部は2or3波状口縁と推定される。口縁部が外傾し、頸部で締まり、胴中央部付近が軽く膨らむ。

文様は口縁部無文帯・頸部沈線文帯・胴部文様帯からなる。

口縁部無文帯 口縁部は幅10～15mmの無文帯で、頸部沈線を引いた後で口縁部・器形に沿うミガキが加えられている。

頸部文様帯 頸部には2条の沈線が緩やかな波状に引かれている。沈線内部には筋状痕跡が認められる。沈線上面・間にはミガキが加えられ、粘土の捲れを静めている。

胴部文様帯 胴部上端の波状沈線の下には、沈線による渦巻文と縦位口文が交互に配置され、渦巻文の下にも縦位口文が描かれている。沈線の特徴は頸部に見られるものと同様で、内部に筋状痕跡を残している。口文には無節斜行縄文(Lr)が継回転施文されている。その後、沈線上面・間にミガキを加え、粘土の捲れを静めると併に、充填施文した縄文周縁部をミガキ消している。このため、ミガキが及んでいない部分では縄文の施文末端や空白部が観察される。

内面 口縁部から胴上半部内面には、軽い横のミガキが加えられている。その下は摩滅のためかサラサラした面になっている。なお、口縁～頸部には粘土紐積み上げ痕が細い1条の凹みとして残っている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は橙褐色～暗褐色をしている。

胎土は細砂粒を含むが比較的均質なシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明)等が観察される。

資料5(第2図 図版2 追加土器箱①)

楠本記録 ラベル「P150 南境 B - VI」

形状と技術的特徴

現状 高さ16.7cm・最大径(口縁部)17.0cmの波状口縁深鉢で、一部を欠くが完形に近い。破損部は復元補修してある。口縁部は外反する4つの大波状口縁で、頸部ですばり、胴部中央が膨らむ。

文様 口縁部は無文で、胴部全體に縦位横円文・口文が描かれ、内部に単節斜縄文が充填施文されている。その周囲には器形・文様に沿って仕上げのミガキが加えられている。

文様は縦に長い口文と縦位横円文+口文が交互に配置(5単位)されているが、4波状口縁とは照応しない。文様はやや幅の広い沈線で描かれるが、縦位横円文+口文の結合部に粘土が貼り付けられ、周囲より突起部に少し高くなっている。その断面は隅丸三角形で、沈線と同様に仕上げ段階でミガキが加えられている。

文様内に充填された単節斜縄文(RL:33mm/1条・

2mm /1節)は縦・斜め回転施文である。縄文周縁はミガキ沈線によって切られているが、施文末端・空白部が一部に残る。

内面 口縁部から胴上部は横方向ミガキであるが、胴中央部以下は軽いミガキや斜めのナデとなっている。胴中央から胴下部には幅広く暗黒褐色の焦痕が吸着している(この部分の外表面は橙褐色)。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面上部は暗黒褐色から暗褐色であるが、下半部は橙褐色をしている。

胎土は砂粒を少量含むやや均質なシルト質粘土で、石英や黑色破砕石片(光沢あり)が確認される。

資料6(第3図 図版2 土器箱③)

楠本記録 ラベル「P151 南境 B-VII」

形状と技術的特徴

現状 高さ28.2cm・最大径(口縁部)25.8cmの深鉢で、接合後に一部を補修・補強してある。口縁部は外反し、胴上部で強く縮まり、胴中央部が膨らむ。

文様構成 口縁部は無文であるが、器面全体に縦位梢円文・匂文が幅広の沈線で描かれ、内部に縄文が充填される。その文様構成は縦に長い匂文(5)に縦位梢円文+匂文(6)で、交互配置であるものの、前者が1単位少ない(展開図参照)。

文様表現技術 沈線は幅7~11mm・深さ1~3mmで、内部も平滑に仕上げられている。土器上半部で広く深く、下半部に向かうに従って幅が狭く浅くなる。また、土器上半部では縦位梢円文・匂文で区画された内部(縄文施文部)が周囲より少し低くなっている。さらに、「資料5」と同様に縦位梢円文+匂文の結合部には粘土紐が貼り付けられ、周囲より突起状に高くなっている(断面は頂部平坦な隅丸三角形状)。これらは、胴上部のくびれと相まって、全体的に立体感を醸し出している。

単節斜縄文(LR:4mm /1条・2.6mm /1節)は胴下部全体と、縦位梢円文・匂文の内部に継回転施文されている。その後、文様に沿って周囲がミガキ仕上げされる。施文された縄文周縁はミガキ沈線によって切られるが、縦位梢円文・匂文の内部に施文末端・空白部が確認できる(拓本参照)。

内面 土器上半部は横のミガキ、下半部は斜めの軽いミガキとなっている。

胴下半部には幅広く暗黒褐色の焦痕が吸着している(この部分の外表面は橙褐色)。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外表面は灰黒褐色~灰褐色であるが、胴下部は明るい橙褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明)などが確認される。

関連事項

林謙作(1965.7)『日本の考古学II 東北』図24-4に大木9b式として実測図が掲載されている(解説は「資料2」の項参照)。

永峯光一編(1981.7)『縄文土器大成-中期』原色図版16に「大木9式」として写真が掲載されている。図版解説では「大木9式土器の一般的特徴をよく示している。その分布は、東北地方南部を中心として広くみられる。」としている(執筆者:丹羽茂)。

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史 考古資料』図版66-4に大木9式として写真が掲載されている。

須藤隆(1985.10)は「東北縄文集落の研究」で、実測図(第6図4)・写真(第7図2)を掲示し、大木9b式とし、さらに本文中で「大木9b式古段階」の例として説明している。

資料7(第3図 土器箱③)

楠本記録 ラベル「B-VII」

形状と技術的特徴

現状 高さ25.4cm・最大径(口縁部)22.9cmの深鉢で、下半部2/3は復元補修してある。

口縁部から胴上部は外反し、胴中央部が膨らむ。文様構成 「資料6」と基本的に同じで、口縁部が無文、器面に縦位梢円文・匂文が沈線で描かれ、内部に縄文が充填施文される。ただし、文様構成に変則的なところがある。

すなわち、縦に長い匂文(3)に縦位梢円文+匂文(4)の交互配置で、その間は「H字状文」になっている。縦位梢円文+匂文は縦に結合する形をとるのでに対し、「H字状文」は縦に長い縦位匂文を横方向で結

合させた形になっている。しかし、見方を変えれば、無文部の口文と口文を縦に結合したとも見ることもできる（展開図・拓本参照）。

文様表現技術 沈線は幅約7mm・深さ約1mmで、内部も平滑に仕上げられている。縦位梢円文+口文の結合部は両者の沈線が接するため、僅かに盛り上がっているが、「資料6」のような粘土紐の貼り付けによる高まりはない。器形や沈線・縦位梢円文+口文の結合などの表現技術は単調で、「資料6」に較べ立体感に乏しい。

單節斜繩文（LR:3.3mm / 1条・2.2mm / 1節）は、縦位梢円文・口文・匁字状文の内部に綱回転充填施文されている。繩文周縁はミガキ沈線によって切られるが、施文末端・空白部を残す部分もある。その後、文様に沿って周囲の無文部がミガキ仕上げされている。

内面 土器上半部は横のミガキ、下半部は縦の粗いミガキが加えられている。

胴下部の一部に焦痕かと見られるものが一部にある（外面橙褐色）。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は灰褐色で胴上部に黒斑がある（内面も黒褐色）。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎片（半透明）などが確認される。

資料8（第4図 図版1 土器箱②）

楠本記録 筆記「P534 B - VI」台帳「南境 大木9」「矢本町史 先史」図版31「繩文中期 大木9式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ23.5cm・最大径（口縁部）22.3cmの深鉢で、胴下部と背面側1/3は復元補修してある。口縁部から胴上部は外反し、胴中央部が強く膨らむ。

文様構成 口縁部は無文であるが、幅広の沈線で器面全体に縦位梢円文・ハ文・口文が描かれ、刺突文や繩文が充填施文されている。その文様構成は、「縦位梢円文+口文」と「ハ文+口文」の交互配置である。残存状況から合計6部位と推定される（展開図参照）。

文様表現技術 沈線は幅6~8mm・深さ約2mmで、内

部も平滑に仕上げられている。縦位梢円文+口文の結合部には粘土紐が貼り付けられ、周囲より突起状に高くなっている（断面は頂部平坦な隅丸三角形状）。

縦位梢円文・口文には繩文が、ハ文と口文で挟まれた部分には刺突文が充填施文されている。繩文は比較的細かいRL（2.5mm / 1条・1.7mm / 1節）單節繩文で、縦・斜め回転で充填施文している。刺突文は端部が平坦な方形の棒を斜めに突き刺したものである（角押し刺突文）。

繩文や刺突文は粗面部分に施文されている。その周縁は仕上げ沈線のミガキやナデによって覆われているが、刺突による影らみを随所に残している（拓本参照）。その他の無文部は器形・文様に沿ってミガキ仕上げがなされている。

内面 土器上半部は軽い横のミガキで、外面の沈線・刺突による押圧が膨らみとして残る部分もある。下半部は斜めの軽いナデとなっている。胴中央～下半部には暗黒褐色の焦げ痕が吸着している（この部分の外面は橙褐色）。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は灰褐色であるが、胴下半部は橙褐色をしている。

胎土は砂粒を多く含むシルト質粘土で、風化砂礫粒（赤味）、石英・黒色破碎片（半透明）などが確認される。

資料9（第4図 図版1 土器箱②）

楠本記録 ラベル「P146 南境B - VII」「矢本町史 先史」図版33「繩文中期 大木9式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ21.4cm・最大径（口縁部）20.7cmの深鉢で、胴上半の一部が破損し、復元補修してある。

口縁部は内湾し、胴上半部が外傾する。胴中央部でくびれ、胴中央下部で膨らみ、底部に向かってすぼまる。

文様構成 口縁部は無文であるが、器面全体に沈線で波状文（口文とU文を繋いだ形）を上下2段に描き、上段には刺突文、下段には繩文を充填施文している。沈線波状文は上下が対称で、胴中央のくびれ部で結

合している。したがって、無文部は縦に長い楕円文となる。

文様構成は沈線区画による「刺突文・綱文充填部」と「無文部」の交互配置で、合計11単位となってい（展開図参照）。

文様表現技術 沈線は幅4～5mm・深さ約1mmで、内部も平滑になっている。上下波状文の結合部には粘土紐が貼り付けられ、周囲より突起状に高く（断面は隅丸方形・隅丸三角形状）、ミガキが加えられている。

刺突文は楕円形で、端部が丸い棒（箇）の先を斜めに当てるよう突き刺したものである。波状文のU部に充填すると併に、口状頂部沈線に沿わせ、1列に並べている。綱文はLR単節綱文（3.3mm/1条・2mm/1節）で、縦回転充填施文している。

刺突文や綱文は粗面部分に施文されているが、それ以外の部分は器形・文様に沿ってミガキ仕上げがなされている。

内面 口縁部から胴中央のくびれ部までは横のミガキで平滑になっているが、その下は軽いミガキやナデで、器面に概形製作時の凹凸を残す部分もある。

また、くびれ部以下には広い範囲にわたって黒褐色～暗褐色の焦痕が吸着している（この部分の外面は橙褐色）。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は灰褐色～暗褐色であるが、胴下部は橙褐色をしている。

胎土は砂粒を含むが、比較的均質なシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片（半透明）などが目立つ。

関連事項

石巻公館（1964.10）「石巻周辺古代遺物展」「目で見る郷土史 シリーズ1」8頁-4に「南境貝塚」として写真が掲載されている。

須藤隆（1985.10）は「東北縄文集落の研究」で、実測図（第6図5）・写真（第7図3）を掲示し、大木9b式とし、さらに本文中で資料6と併に「大木9b 式古段階」として説明している。

資料10（第5図 図版2 追加土器箱①）

楠本記録 ラベル「P136 南境B-VII 懸垂土器」

形状と技術的特徴

現状 高さ22.6cm・最大径（胴部）12.0cmの吊手付き土器で、胴下部と背面1/4が破損し、復元補修してある。形状は上半部が円筒状で、中央下部が少し膨らんでいる。上半部の左右対称位置に、上下一对の吊手がある。吊手は粘土紐を半環状に貼り付け、外面を器体と併にミガキ仕上げたものである。

文様構成 口縁部は無文であるが、器面全体に隆起線や沈線によって渦巻文・口文・楕円文からなる文様が描かれ、それぞれに綱文が充填施文される。

文様構成は正面中央に縦位渦巻口文、その左右に縦に長い口文、上下の吊手間に縦位楕円文、その下に口文が配置される。背面は破損部が多いが、吊手部を境として同様な文様構成をとると推定される。

文様表現技術 粘土紐貼り付けによる隆起線が見られるのは渦巻文の一部に限られる。沈線の幅は5～6mm・深さ約2～3mmであるが、渦巻文の隆起線、左右に付けられた吊手と一体となって、少なからず立体感を醸し出している。

綱文はLR単節綱文（3.3mm/1条・2.5mm/1節）で、縦回転施文である。綱文の周縁には仕上げ沈線のミガキ・ナデによって磨り消されている部分も多いが、施文末端が下書き沈線へ及ぶものもある。

この他は最終的に、器形・文様に沿ってミガキ仕上げが加えられ、それは吊手外面まで及ぶ。

彩色 下部吊手の下面や渦巻沈線の一部に赤彩の痕跡を残している。

内面 口縁部内面は、斜めに削がれたように薄くなっている。また、全体的にミガキによって平滑になっているものの、口径が小さいためか（8.5cm）、概形製作時の凹凸を少し残している。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面は淡い褐色であるが、吊手付近と胴部に黒斑が認められる。

胎土は砂粒を少量含むが、均質なシルト質粘土で、石英の他に、僅かであるが黑色破碎石片（半透明）などが確認された。

資料11（第5図 図版2 土器箱⑩）

楠本記録 ラベル「P147 南境」筆記「B-VII」

台帳「南境 大木9(朱)」「矢本町史 先史」図版35「縄文中期 大木9式 朱で彩色 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ14.2cm・口径8.8cm・最大径(胴部)18.7cmの算盤玉状の短頸壺で、口縁部の外側に突起状の吊手(4個)がつく。背面側のはば1/4が破損し、復元補修してある。

頸部に粘土を貼り付け、隆起線とし4カ所に山形突起を作り、その中央下部に吊手孔を設けている。吊手孔は内部に筋状の段を持つやや歪んだ長方形(6×5mm)で、これは製作時の心材の形状を反映したものと思われる。

文様構成 文様は大きく2単位からなる。相対する2組の吊手下に縦に長い楕円文があり、その両側に横S字状に溝巻文が大きく描かれ、内部に変形楕円文(巴状・三叉状)が配されている。三叉状変形楕円文は上方に延びた一端が突起状吊手と連結する。縦位楕円文・変形楕円文は縄文で埋められる。

文様表現技術 文様構成を大きく分ける縦位楕円文は、吊手突起・頸部から続く隆起線(断面隅丸三角形・帯状凸帯)と、内側に沿う沈線によって形成される。隆起線とその外側はミガキ仕上げである。

横S字状溝巻文も断面が隅丸三角形の隆起線や帯状凸帯で、片側に沈線を伴う。沈線は隆起線に沿って変形楕円文を形成するが、その外側は緩やかにS字状凹部に移行し、ミガキ仕上げとなる。

縦位楕円文や変形楕円文には、その形状に沿って単節縄文(RL:2.5mm/1条・1.7mm/1節)が充填施文されている。

彩色 口唇部・胴下部外面において、縄文施文部(縦位楕円文・変形楕円文)を除き、ほぼ全面に赤彩がみられる。赤彩部分には丁寧なミガキが加えられている。

この他、底部内面にも薄く赤彩が残る。

内面 口縁部・胴部は横のミガキで、特に上半部は平滑に仕上げられている。底部内面はオサエ・ナデツケ・ナデ痕が残る。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。外面(縄文施文部)は淡い褐色で、一部に黒斑がある。

胎土は比較的均質なシルト質粘土で、少量の石英・長石・黒色破碎石片(不透明)を含む。

関連事項

山内清男編著(1964.3)『日本原始美術1』に原色図版IVとして掲載され、「丹塗壺 大木9式」「口縁部に四個の橋状把手があり懸垂し得るようになっていく。文様は大木9式土器に普遍的な文様である。貝塚の出土品でこのように塗料が全面に残っているものは極めて少ない」という解説がなされている(執筆者:江坂輝弥)。

資料12(第5図 図版2 土器箱④)

楠本記録 ラベル「P144 南境 B-VII」「矢本町史 先史」図版36「縄文中期 大木10式 南境貝塚」
形状と技術的特徴

現状 高さ25.3cm・最大径(口縁部)28.9cmの深鉢で、1/4ほど破損し、復元補修してある。

口縁部は内湾する波状口縁(4波)、胴中央部でくびれ、胴中央下部で膨らみ、その後底部に向かってすぼまる。底径は6.4cmと小さい(最大径の22%)。
文様構成 器面全体に沈線によるC字状・S字状・匂状の文様が描かれ、それらの文様内部には縄文が施文されている。これらの文様は、波状をなす口縁部の形と一体となって配置されている。

すなわち、波頭部にはC字状文と匂文、波間(底)部には縦に長いS字状文が交互に配置されているのである。したがって、文様構成は規則的な、4単位と見ることができる。

文様表現技術 沈線は幅4~5mmで、それらに縁取られるように描かれているのは、幅2~3cmのC字・匂・S字の形をした帯状の文様である。

これらの帶状文様内部には単節斜縄文(RL:4.5mm/1条・2.2mm/1節)が回転施文されている。縄文の施文方向は文様の屈曲に応じて変化している。文様外側の無文部は器形や文様に沿ってミガキ仕上げが加えられている。このミガキは沈線上まで及び、縄文帯の周縁を磨り消している部分も多く、一見すると縄文が沈線に切られているよう見える。しかし、この仕上げミガキが及ばない部分では縄文の施文末端が沈線に食い込んでいる。さらに、沈線と縄

文施文末端の空白部は粗面のままの状態が観察される。なお、沈線について付言すると、重なっている部分が何カ所か認められる。下書きや引き直しをしたとみられる。

以上を総合すると、基本的な施文工程は次のようになる。①概形製作後、粗面上に沈線で文様を素描→②文様内に繩文を充填施文する→③文様に沿って沈線とその外側を磨いて仕上げる。この時、繩文帶周縁も磨かれる。

内面 口唇部は滑らかなミガキであるが、口縁部から胴中央下部までは横の軽いミガキで、横・斜め方向の前状凹凸(ヘラナデ状)を多く残している(口縁部拓本参照)。

胴下部は継のミガキで、斜め方向のケズリ痕跡が観察される。底部には厚みを増すための粘土貼り付け・オサエ・ナデ等が見られるが、器面が荒れてしまつて、明確でない。

胴下半部に幅の広い帯状の焦痕(暗黒褐色)の吸着がみられる。これらに対応する外面はやや明るい褐色や灰白色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通であるが、指で彈くとややにぶいコンコンという音を発する。外面は灰白色から暗褐色をしている。口縁部とくびれ部は暗褐色が多い。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、風化砂礫粒・石英・長石・黒色破碎片(半透明)等が確認された。

関連事項

永峯光一編(1981.7)『繩文土器大成－中期』図版60に「大木10式」として写真が掲載されている。図版解説では「繩文帯はC字状・S字状・継の樋円状である。…これらの土器は、大木10式のなかでも、大木9式からの移行が直接とえられるものである。…この種の大木10式土器は、東北地方南部全体に分布するほか、北は秋田県南部・岩手県南部にもみられ、広い分布を示している。」としている(執筆者:丹羽茂)。

また、須藤隆(1985.10)は「繩文集落の研究」で実測図(第6図11)・写真(第10図)を示し、「大木10b式土器」としている。しかし、第9図「4」の細部写真では「大木10a式」としているので、詳細は明らかで

ない。

資料13(第6図 図版2 土器箱③)

楠本記録 ラベル「P143 南境 B-VII」「矢本町史 先史」図版37「繩文中期 大木10式 南境貝塚」
形状と技術的特徴

現状 高さ28.7cm・最大径(口縁部)21.8cmの深鉢で、胴下半の一部が破損しているが、復元補修してある。

口縁～胴上半部が緩やかに外反し、胴中央部で膨らみ、底部に向かってすぼまる。底径は7.3cmで、口径(最大径)のはば1/3である。

文様構成 上半部に沈線によるC字状・C状の文様が描かれ、その下が波状の沈線で画される。各種文様内部と波状沈線の下部に繩文が施文されている。

文様構成をみると、大形のC字状文が横並びで3個配置され、そのうちの2個に少し広い隙間が生じている。この隙間を埋めるように小形のC字状文が2個継ぎ並びに配置され、下部にC字状文が胴部中央より下に食み出した形になっている。胴中央部の波状沈線は、これらの文様に沿うように引かれている。したがって、C字状文が食み出た部分では、波状文の波間(底)は幅が狭く、深くなっている(展開図参照)。

文様表現技術 沈線は幅約5mmで、それらに縁取られるように描かれているのは、大形のC字状文(幅3～4cm)と小形のC字状文(幅2～3cm)の帯状文様である。

これらの帯状文様内部と、それらに沿う波状沈線の下部には単節斜繩文(LR:3.3mm/1条・2.2mm/1節)が回転施文されている。繩文の施文方向は帯状文様の場合、その屈曲した形状に応じて変化している。波状沈線下部では、継もしくは斜め方向の回転施文である。

繩文施文部周縁は仕上げ沈線によって切られている。文様外側の無文部は器形や文様に沿ってミガキ仕上げが加えられ、それは沈線上面まで及んでいる。また、波状沈線下の繩文施文部も下端が横・斜め方向のミガキによって磨り消されている。

このように、表面的には繩文が沈線に切られていよいに見える。しかし、資料12と同様、仕上げ沈線のミガキが及ばない部分では繩文の施文末端が沈

線に食い込んでいたり、沈線と繩文施文末端の空白部は粗面のままの状態が観察される(図・拓本参照)。また、帯状文様内部の繩文施文は、前述のように文様の形状に応じて回転方向を変えている。

以上を総合すると、①沈線で文様を描く→②文様内部・胴部波状文下部に繩文(充填)施文する→③文様を仕上げ沈線で縁取り、無文部をミガキ仕上げする。同時に、胴下端部もミガキ仕上げする。

内面 口縁部から胴下部まで横のミガキであるが、胴下部に、横・斜め方向のケズリ痕を残す。底面は軽いミガキと共にナデツケ痕を明瞭に残している。**焼成・胎土** 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面の大部分は橙褐色～灰褐色であるが、胴中央部付近(膨らみ)は暗褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明と不透明)等がみられる。

関連事項

林謙作(1965.7)『日本の考古学Ⅱ 東北』は図25に「松島湾の称名寺系土器」として実測図を示した。

須藤隆(1985.10)は「繩文集落の研究」で実測図(第6図8)・写真(第7図4)を示し、「大木10a式土器」としている。しかし、第9図「5」の細部写真では「大木10b式」としている。本文中では「大木10a式土器」の項で「B類型(同図7～9.7図4)が主体をしめる。」としているものの、「大木10b式」の項ではふれられていない。須藤隆による資料12・13の評価に関しては、不明確な点もあるが、大木10式土器の中で提えていているとみられる。

資料14(第6図 図版3 土器箱④)

橋本記録 筆記「B - V P.539」「矢本町史 先史」図版38「繩文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ12.0cm・最大径(口縁部)11.4cmの小形の深鉢で、口縁～胴部の1/3弱と、底部の大部分が残っている。その他の破損部は復元補修してある。

口縁部は軽く外反する波状口縁で、胴上部が膨らみ、底部に向かって緩やかにすぼまる。底部は平底であるが、中央が丸く窪んでいる。

文様とその表現技術 波状の口縁部は無文で、胴部に粘土紐を貼り付けた隆起線で波濤状文様を描いている。隆起線は断面が隅丸三角形で、稜状の部分もある。この波濤文は横に長く、隆起線が頂部から胴下部まで延び、複合形態となっている。この複合波濤文は横方向に連続する。破損部が多いが、器形の形状・大きさから3単位と推定される。

波状の口縁部と隆起線は、一連の工程でミガキ仕上げされている。波濤文の内外には複節斜繩文(RRL:3.7mm/1条・2.5mm/1節)が充填施文されている。繩文周縁は隆起線の仕上げミガキによって磨り消されているが、回転施文の方向は文様の形状に対応して変化している。施文された斜繩文帶の下縁も、胴下部のミガキ(横・斜め)によって磨り消されている。

内面 口縁部は丁寧な横のミガキ、胴～底部は軽い横のミガキ仕上げである。

胴上部には暗黒褐色の帯状焦痕がみられる。対応する外面には橙褐色の部分がある。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は橙褐色～にぶい灰暗褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片(半透明・幾分摩滅)等がみられる。

資料15(第6図 図版3 追加土器箱①)

橋本記録 筆記「B - VI P.533」「矢本町史 先史」図版47「繩文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ9.9cm・最大径(胴部)7.7cm(吊手を含む)の小型吊手付き土器で、口縁～胴部の1/3が残っている。その他の破損部は復元補修してある。

全体の器形は胴部が算盤玉状に張り出す壺状と推定される。胴部から口縁部へ僅かに内反しながらすぼまるように立ち上がる。口唇部は丸みを持つ。口縁下部と胴部中央に隆起線を巡らし、左右の相対する位置に上下一对の吊手を付けている(残存するのは左側)。この吊手は側面に粘土紐を上・下端幅が少し広い縱長楕円状に貼り付け、その上・下端部に直径2.5mmの孔を縦に設けたものである。孔の内面

には差し込んだ棒の筋状痕跡を残す。吊手の外面はミガキ仕上げである。

文様とその表現技術 口縁下部と胴中央部の隆起線、左右一対の吊手に囲まれた部分は台形状の空間となっている。その中央部に幅2~3mmの沈線で、隅丸台形とみられる文様を描き、内部に複節斜縄文(RLR)を継回転施文している。沈線とその周囲(隆起線も含む)は丁寧に磨いて仕上げている。ただし、胴下部は軽いミガキとなっている。

内面 口縁~胴部はナデ状の軽いミガキで、概形製作時の凹凸や粘土紐積み上げ痕を残す。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は灰白色で、僅かに褐色味を帯びている。

胎土は砂粒を少量含む均質なシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片(半透明)等がみられる。

彩色 吊手の両脇に赤彩痕を残している。

資料16(第6図 追加土器箱①)

楠本記録 筆記「南境 B-VII」スタンプ「P130」
現状 高さ8.3cm・最大径(胴部)6.9cmの小型壺で、口縁部と胴部2/5弱が破損し、頸~胴部は補修してある。

器形と文様 胴上部が算盤玉状で、頸部が強くすぼまる。底部へは緩やかに外傾し、細くなる。

胴部外面には撚糸文(RI)を継回転施文する。その後、頸部に幅約1mmの沈線を巡らしている。

内面 軽いミガキが加えられているが、粘土紐積み上げ痕を残す。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は橙褐色~にぶい灰褐色をしている。内面も同様である。なお、外面胴部中央には黒斑がある。

胎土は砂粒を少量含むシルト質粘土で、僅かに黒色破碎石片(半透明)等が確認される。

資料17(第7図 図版3 土器箱⑤)

楠本記録 ラベル「P145 南境 B-VI」「矢本町史 先史」図版45「縄文中期 大木10式 南境貝塚」
形状と技術的特徴

現状 高さ44.3cm・最大径(口縁部)30.0cmの深鉢で、胴中央部付近の一部、底部が破損しているが、復元補修してある。

器形 口縁部に外面から内面に延びる橋(環)状の突起をほぼ等間隔に3個貼り付け、これらの突起間に小突起を1個ずつ配置している。器形は口縁~胴上部が緩やかに外反し、胴中央部で膨らみ、底部に向かって緩やかにすぼまる。底径の推定値は11cmで、口径(最大径)との比がほぼ37%である。

文様構成 口縁部の橋状突起頂部から頸部にはS字状に、小突起ではC字状の隆起線があり、頸部を巡る隆起線と繋がっている。隆起線に沿って一列の連續刺突文が加えられている。

胴上部の文様は、撚糸文施文の楕円文・方形文部と、それらを取り巻く無文部から成っている。無文部の形状は、楕円文・方形文を囲み、横長に大きく展開するC字状文である。このC字状文(無文部)は器形・突起と密接に対応し、3単位の文様構成を形作っている。

すなわち、橋状突起の下に沈線による横楕円文、小突起下には弧状沈線による方形文が描かれ、これらの内部には撚糸文が施文されている。この楕円文と方形文は片側が弧状隆起線で繋がれる。方形文の左側からノ字状に降りた隆起線は胴中央部を緩やかに巡る波状隆起線に続く。これらの隆起線には一列の刺突文が加えられ、胴中央部の波状隆起線では、下辺に沿って一条の沈線が引かれている。

胴下半部には撚糸文が施文される。

文様表現技術 橋状突起は直径5~6cmで、内部に直径約3cmの透かし孔がある。口縁部から内面頸部へ斜めに、幅約2cm・厚さ約1cmで粘土を貼り付けた形になっている。この橋状突起を両側から包むように、小さな突起が一対付いている。左側の小さな突起は橋状突起と一体になって透かし孔の入り口を形成している。

橋状突起頂部から頸部に向かってCもしくはS字状に貼り付けた隆起線は頸部の左・右を1/6ほど巡り、橋状突起間の小突起に至る。この隆起線の貼り付け上辺縁に1列の楕円形刺突文が加えられている。この楕円形刺突文は先端の丸い棒を横から斜めに押し成している。

て突き刺したものである。その後、橋状突起・隆起線・楕円形刺突の上面を磨いて仕上げている。その結果、隆起線文の断面は三角形状で、稜を形成する。

橋状突起の内面側もほぼ同様で、鱗状に貼り付けた隆起線で透かし孔を縁取り、頸部を左右に1/6巡らせた所で小突起に至る。外面同様ミガキ仕上げし、断面三角形の隆起線文となる。この隆起線文が小突起頂部に及んだ形は鱗状をなす（以上は、図・拓本・写真参照）。

胴部上半の楕円文・方形文は幅約5mmの沈線で描かれ、両者は頸部に一列の刺突を加えた隆起線で繋がれる。これらは最後にミガキが加えられるため、前後関係の判定は難しいが、沈線が隆起線下に延びる部分が何カ所か確認されることから、工程は①沈線→②隆起線→③連続刺突→④ミガキ仕上げの可能性が高い。

楕円文・方形文内部には単節撚糸文（LR）が継位施文されている。これらの撚糸文周縁部が沈線のミガキ仕上げに切られているものの、施文末端や空白部（粗面）、頸部隆起線上に及ぶ部分が確認されるところから、充填施文されたと見ることができる。

胴中央部の粘土紐貼り付けによる緩やかな波状隆起線および、その上辺に加えられた連続刺突文、下辺の沈線文はミガキ仕上げされている。なお、刺突文の形状は頸部のものと共通するが、刺突方向は左右逆である。

方形文左下隅と胴部波状隆起線文の波頂部を繋ぐノ字状の隆起線、楕円文と方形文右下隅を弧状に繋ぐ隆起線文は頸部に列状刺突を加え、その後上面を磨いている。

頸部隆起線文と胴中央部隆起線文間の胴上半部文様帶無文部は横長の（玉抱き）帶状C字文で、文様の形状に沿って、沈線・隆起線と併に一連のミガキ仕上げが加えられ、平滑にされている。

胴部下半には単節撚糸文（LR）が継位（やや斜めも含む）施文される。撚糸文上縁はミガキ沈線に切られ、下縁は胴下端部のミガキに磨り消されている。
内面 口縁部から頸部隆起線文は、横および突起の形状に沿った丁寧なミガキが加えられている。胴中央部までは横、胴下半部は綿の軽いミガキで、平滑

になっている。

胴下半部には全体的にくすんだ暗黒褐色の焦吸着痕がみられる。これに対応する外面はにぶい橙褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片（半透明・不透明）などがみられる。

関連事項

山内清男編著（1964.3）『日本原始美術1』図版88に掲載され、「大木10式は中期末あるいは後期初頭と見ててもよい時期の資料で復元された資料はあまり多くない。文様は地文に撚糸文または撚糸文が施文され、胴上半部は横に長い楕円形の区画を沈線で囲み、その外側の縄文ないしは撚糸文を磨消する手法がとられている。大木9式が口縁と直角に不整楕円形に縄文部を残すとの対照的である。」との解説がある（執筆者：江坂輝弥）。

永峯光一編（1981.7）『縄文土器大成－中期－』では参考図版44に「深鉢 大木10式 宮城県南境貝塚 高44.0cm」とだけある。

須藤隆（1985.10）は「縄文集落の研究」で実測図（第6図13）・細部写真（第9図6）を示し、大木10b式とする。

資料18（第8図 図版3 土器箱⑥）

楠本記録 ラベル「南境 B - VI」

形状と技術的特徴

現状 高さ29.3cm・最大径（口縁部大突起含む）20.9cmの深鉢で、口縁・胴上部はほぼ全体、胴中央部付近は1/2弱、胴下半は1/4程度が残る。底部の破片はこれらと離れているので同一個体か否か明らかでない。その他の欠損部は復元補修してある。後述するように、規則的な文様構成であることから、底部の位置を除き（高さと底径）、復元は大筋で妥当なものと思われる。

器形 口縁部に大突起1、小突起7があり、突起数は8となる。大突起には中央に横楕円形の透かし孔（2.5×1cm）があって、内面に頂部から透かし孔に延びる鱗状の貼り付けがある（展開図・拓本参照）。

突起を含め、器形は口縁～胴上半部が外反し、緩やかにくびれた後、胴中央下部が膨らむ。その下は底部に向かってすぼまる。

文様構成 胴中央下部に連鎖状の隆起線がほぼ直線的に巡る。胴上半部には内部に縄文が施文された変形方形文(右下隅が弧状)が沈線で描かれ、無文帶を介して横に4個並ぶ。変形方形文の左下隅と胴中央下部の連鎖状隆起線は、同様な連鎖状隆起線によつて斜めに繋がれる。この繋ぎ目は口縁突起(ひとつおき)のほぼ下に位置する。胴下半部は斜縄文が施文される。

このように、沈線・連鎖状隆起線による文様は4単位となる。見方を変えると、「ノ」字状の幅の広い無文帶が4単位となる。その上部には多少のずれは見られるものの、口縁部突起が位置している(展開図参照)。

文様表現技術 変形方形文を描く沈線は幅4mm前後で、底は丸く滑らかである。引き直し部分もあるが、仕上げ沈線の重なりを見ると、左側縦線→上辺の横線・右上端から左下端への弧状線となる。

文様内部には無節縄文(Lr:5mm/1条)が縱回転施文されている。縄文周縁は仕上げ沈線および縁ミガキなどによって切られているが、沈線重複部では、縄文が旧沈線の上に被さっている。したがって、充填縄文と見て良いであろう。

連鎖状隆起線は、粘土紐貼り付けによる隆起線頂部に、連続する楕円形刺突を加えたものである。この刺突文は端部に丸みをもつヘラ状(厚手)のものを当てるよう突き刺したもので、底面は中央部が僅かに深い(資料17のように片側が斜めに深くなるものとは異なる)。胴部下半の無節斜縄文(Lr:5mm/1条)は縦回転施文で、その施文上端は胴部隆起線に載っている部分が確認できる。さらに、施文端部が刺突文の粘土まぐれに覆われている部分もある。

これらのことは、①粘土紐貼り付けによる隆起線→②縄文施文→③楕円形刺突文を加え、連鎖状隆起線にする、とういう工程を示すものと考えられる。胴下部縄文施文下端は斜めのミガキによって磨り消されている。

ノ字状無文部は器形・文様に沿って最終的にミガ

キ仕上げされ、沈線の縁・連鎖状隆起線の裾に及ぶ。

内面 口縁部は横、胴部は斜めのミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面は胴中央部がぶい暗黒褐色、口縁・胴下部が灰褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英や黒色破碎石片(半透明)がみられる。

資料19(第8図 図版3 土器箱⑤)

楠本記録 ラベル「P142 南境」『矢本町史 先史』図版42「縄文中期 大木10式 補修底のついたまま出土した例 南境貝塚』『縄文生活の再現』168頁下段写真「縦ぎ底の土器(南境貝塚出土、縄文中期末)」

形状と技術的特徴

現状 高さ30.4cm・最大径(口縁部)21.5cmの深鉢で、底部を欠く。胴部下端は別個体の胴部下端～底部に差し込まれている。

器形 円筒状深鉢で、最大径は口縁部にある。口縁部から胴下部が外傾し、胴中央部が僅かに膨らむ。

文様構成 胴上半部には、上下に2個一対の刻みに入った縦の隆起線文があり、胴中央部にはこれと交差する横位の隆起線文が巡る。その結果、5単位の方形区画(上辺は口縁部)が生じる。隆起線交差部には2種類の形状がある。①は縦位隆起線が隅丸状に左へ延び、その右隅で交差するもの(2カ所)、②は上状に交差するもの(3カ所)である。この方形区画の内側に沿って沈線による方形文(三隅丸)が描かかれている。

方形文内部、胴下半部には単節縄文が施文され、隆起線下・沈線間にも縄文施文痕跡が残る(正面・展開図参照)。

文様表現技術 隆起線文は断面三角形で、貼り付け後両側面にナデを加えたもので、部分的に貼り付け痕が残る。縦位隆起線は上・下端に2個一対の刻みが加えられる。刻みの方向は隆起線に対し斜め横で、端部が丸みをもつヘラ状(厚手)のものを当てるよう突き刺したもので、形状は楕円形をしている(ヘラの形状は資料18に類似)。なお、隆起線の交差部

①では、縦位隆起線間に胴部隆起線が載っているよう見え、②の場合は、ナデ等によって不明である。

沈線は幅3~4mmで、断面が丸く筋状の痕跡がある。沈線には引き直し部分も見られ、最終的に上辺右角で縦位沈線が横位沈線を切っている。沈線の両側(特に無文部)に粘土捲れによる盛り上がりの見られる部分が多いが、その後の軽いミガキによって潰されている所もある。

単節繩文(LR:5mm/1条・3mm/1節)は僅かに斜行し、比較的密接して斜め回転施文されている。隆起線と沈線の間はナデおよび軽いミガキによって磨り消されているが、消し残し部分もみられる。

隆起線・沈線・繩文三者の関係をみると、繩文は沈線に切られると伴に、隆起線下にも観察できる。隆起線の両側はナデ調整されており、このナデは沈線付近まで及ぶ。沈線の側縁には、このナデられた部分に捲れを残す所がある。最終的に口縁部・隆起線を挟む沈線間・胴部隆起線と沈線間に軽い仕上げミガキが加えられている。

以上を総合すると、①繩文施文→②隆起線貼り付けとナデ(繩文磨消)→③沈線による隅丸方形文(右上は隅角)→④隆起線・磨消繩文部の軽いミガキ仕上げとなる。ただし、縦位隆起線への斜め刻みは、②以降であるが、③との関係は明確でない。また、縦位隆起線と胴部隆起線の交差部①は連続的と見られるもの、交差部②の工程は定かでない。

内面 口縁部は横の丁寧なミガキ、胴部は縦のやや粗いミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面はにぶい暗橙褐色をしている。内面は暗黒褐色の部分が多い。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明と不透明)がみられる。

別個体底部 底径10.5cm、高さ5.0cmで、底面には木葉痕(広葉樹葉脈)がある(拓本参照)。胴部外面下部は斜めの粗いミガキ、底部内面はオサエとナデツケ痕がみられる。

焼成は普通で、外面が暗橙褐色、内面は灰褐色である。胎土は砂粒を多く含む粗いシルト質粘土で、黒色破碎石片(不透明)がみられる。

関連事項

須藤隆(1985.10)は「繩文集落の研究」で写真(第10図2)を示し、大木10式土器とする。

資料20(第9図 図版3 土器箱⑥)

楠本記録 ラベル「P138 南境」『矢本町史 先史』図版43「繩文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ26.0cm・最大径(口縁部)19.6cmの深鉢で、底部を欠く。突起および胴部などの部分の破損は補修してある。

器形 口縁部に等間隔で有孔の突起(4個)が、ほぼ等間隔に配置されている。口縁部から突起までは、ほぼ直立し、頸部～胴部上端が少し膨らむ。胴部から下は外傾し、底部に向かってすばましていく。

突起 4個の突起は頂部の丸い山形で中央下部に円い穿孔がある。この円孔は外周約8mm・内面約6mm、孔周縁に薄く粘土を貼り付けたように小輪状の厚みが形成されている。これは、外面にやや顯著にみられるが、内面にも認められる。しかし、その幅や厚さは不規則で意図的に粘土紐を貼り付けたか否かは明らかでない。穿孔時に生じた粘土の捲れをオサエ、整えた可能性もある。

なお、口縁部には横方向のナデおよび粗いミガキが加えられている。

文様構成 脇上部に隆起線による扇状文様(扇を横に構え、下に2/3ほど開いた形)を横に8個並べ、下部を隆起線で繋いだ形にしている。扇状文様の隙、下部繁ぎ目には小輪が配され、扇弧状線上部には2個一対の斜めの刻み刺突が加えられている。

扇状文様内と脇下半部(下部隆起線以下)には單節斜繩文、それらに挟まれた隆起線間はノ字状無文帯となっている。これらの貼り付けられた隆起線の下やノ字状無文帯にも繩文の痕跡が残っている。

なお、脇上部の文様は規則的で、器形や口縁部山形突起と対応関係にある。すなわち、扇状文様の上辺隆起線は頸部～胴部上端の膨らむラインと一致し、ノ字状無文帯は口縁部山形突起下、山形突起間中央下から始まる。このように、文様構成は器形との関係から大きく見ると横方向に連なる4単位、個々

の文様の繰り返しから見ると8単位となる。

文様表現技術 扇状文様とそれを下部で繋ぐ隆起線は、両側面にナデが加えられ、断面が三角形状をしている。このナデはノ字状無文帯に及ぶと共に、扇状区画の隆起線内側では沈線状になる部分もある。

扇状文様隅や下部繫ぎ目に配された小輪は、粘土(玉か糸)を貼り足して中央に刺突を加えたものである。上面は軽く押し潰されているが、側面は丸みを持っている(隆起線→刺突小輪)。小輪は基本的に1個であるが、下部隆起線繫ぎ目の場合、2個を連接したものが2カ所に認められる(展開図参照)。

2個一対の刻み目は、隆起線の方向に対して斜めの位置に加えられている。平面形は梢円~隅丸長方形で、資料19に類似するものである。なお、この刻み目は小輪と同様に隆起線両側面のナデの上に被る形になっている(隆起線→刻み)。

単節斜縄文(LR:4mm/1条・2.5mm/1節)は口縁部無文帯・ノ字状無文帯を除き、胴部全体に縱回転施文されている。さらに、この斜縄文は隆起線を貼り付けた隙間や、ノ字状無文帯のナデに覆われながら施文痕跡を残す部分がある(縄文→隆起線)。なお、ノ字状無文帯の部分は、縄文施文部に較べ、器壁が少し薄くなっている(断面図参照)。

以上、文様表現技法を工程的に整理すると、次のようになる。①LR 縄文施文→②隆起線文による扇状文様→隆起線両側とノ字状部の縄文磨り消し→③隆起線に小輪・刻みを入れる。

内面 口縁~胴上部は横方向のミガキ、胴下半部は縱の軽いミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面は橙褐色~にぶい暗褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、石英・長石の他、黒色破碎石片(半透明・不透明)を含む。

関連事項

石巻市公民館(1964.10)「石巻周辺古代遺物展」図録P8-5に「南境貝塚」として写真が紹介された。

馬目順一(1968.5)「縄取貝塚第四地点発見の堀之内I式期土器の考察」「小名浜」は第13図-4に、その写真起こしかと見られる図を掲載し、「大木10式

と、門前式との中間的要素を持つ?」と述べている。

野口義廣編(1981.10)『縄文土器大成後期』「参考図版119」の写真に添えられた注記では「堀之内I式併行」としている。

資料21(第9図 図版4 土器箱⑨)

楠本記録 ラベル「P141 南境 C-I」『矢本町史 先史』図版49「縄文中期 大木10式? 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ33.5cm・最大径(口縁部)20.5cm・底径10.5cmの深鉢で、底部を1/2強欠く。その他は比較的保存が良い。ただ、貼り付けられた小輪15個の内残存するのは5個で、その他は剥がれ落ちて失われている。破損部は復元補修してある。

器形 口縁部が平坦な、円筒状の深鉢である。口縁~胴上部は僅かに外傾するものの、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。胴中央部で僅かに膨らみ、底部に向かって緩やかにすぼまる。それでも、底径は口径の約1/2の大きさを占めている。器形的に類似するのは資料19・22である。

文様構成 口縁部から胴下部まで2種類の縄文を全体に施し、口唇部と胴下端部を磨いている。

縄文を地文として、器面上半部に2条からなる並行状況線で、横に連続して無いだ菱形文様を5個描いている。この並行状線は幅約1cmの細帯状で、沈線間(幅5~6mm)に一列の連続する刺突を加えている(列状刺突)。さらに、菱形文様の交点15カ所には小輪を貼り付けている(残存は5個)。

したがって、この文様はX状文の連続横繫ぎとも菱形の横繫ぎとも見えるのだが、最終的に5単位で完結するという規則性を持っている。

文様表現技術 斜縄文は無節(LR:5mm/1条)と単節(LR:5mm/1条・3mm/1節)の2種類である(図・拓本参照)。これらの縄文を、器面全体に密接させて、縱(やや斜め)回転施文している。

口唇部は縄文施文が及ばず、丸みを持っている。粘土紐積み上げ痕・オサエ痕を残し、横方向のミガキが加えられている。胴下端部は斜めのミガキが加えられ、縄文施文の下端が磨り消されている。

菱形文様を形作る2条の並行状沈線は、各々幅約2mmの丸底で、地文（縄文）上に引かれる。沈線間に一列の刺突が加えられている（長い隅丸逆三角形状で、上辺に向かって斜めに深くなる）。この刺突によって周縁に粘土の盛り上がりを生じている部分もある。

また、並行状沈線間にナデ状ミガキが加えられ、それが沈線の外側にはみだしている部分もある。その部分は縄文が磨り消されている。

小輪は粘土（玉・紐）を不整円形に押し潰し、中央に刺突を加えたもので、潰れたドーナツ状をしている。

これらの文様表現技法を工程的に整理すると次のようになる。①縄文（無節・単節）施文→②並行状沈線で横繋ぎ菱形文を描く→③並行状沈線間に連続刺突文（一列）を入れ、軽く磨く。→④菱形文の交点に粘土を貼り付け、小輪状にする。

内面 口縁部は横、胴部上半は横と斜め、胴下半部は縱と斜め、胴下端部は横のミガキが加えられ、器面は全体的に平滑である。底面は周縁に沿う軽いミガキである。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面はにぶい暗褐色～橙褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石の他、風化殻や僅かに黒色破砕石片が観察される。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他（1981.10）『宮城県史考古資料』図版70～4に、「後期南境式 南境貝塚」として写真が掲載されている。

資料22（第10図 図版4 土器箱②）

橋本記録 ラベル「P140 南境」「矢本町史 先史」図版48「縄文中期 大木10式？ 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ25.9cm・最大径（口縁部）19.2cmの深鉢で、底部全体と胴部・口縁部の一部を欠いている。破損部は復元補修してある。

器形 口縁部は平坦であるが、ほほ等間隔で山形の小突起が4個ある。器形は口縁部～胴上部が外反し、

胴中央部で膨らみ、底部に向かって緩やかにすぼまる。底部を欠いているが、残存部の状況から口径約1/2と推定される。

文様構成 口縁部から胴下部まで斜縄文を施し、細部に相違がみられるものの、帯状の並行状沈線（幅10～13mm）で横並びの方形状区画文を4個描いている。この方形区画内部には斜め方向の帯状並行状沈線を配している。これらの帯状並行状沈線には、資料21と同様に一列の連続する刺突が加えられている。

方形区画文を詳しく見ると、いずれも端部を丸い形に結んだ並行状沈線が突起下から降りる形になつており、胴中央部でL字状に折れ曲がるもの2個、幅広のU字状になるもの1個と、両者間の下辺を横向方向の並行状沈線で連接するもの1個からなる。これらの連接部の下には沈線による曲玉状文が配置されている。

文様表現技術 口縁部はオサエで整形し、粘土を貼り付けて肥厚させ、山形の突起とし、磨いて仕上げている。

器面には無節斜縄文（Lr:5mm/1条）を継回転施文しているが、口縁部と底部付近の一部は横回転施文となっている。

方形区画文を描く並行状沈線は幅が細くて（約2mm）、深い（2～3mm）。沈線間は7～10mmで、並行状沈線間に連続する刺突が加えられる。この刺突は、楔状（長い隅丸三角形）で深い。

また、並行状沈線間にミガキが加えられ、それが沈線の外側にはみ出している部分もある。このミガキは沈線による粘土の盛り上がりをオサエるとともに、沈線間の縄文も磨り消している。

方形区画文の連接下部に配された沈線による曲玉状文も並行沈線と同様にミガキが加えられ、縄文が磨り消されている。

これらの工程を整理すると、次のようになる。①無節斜縄文施文→②並行状沈線で横繋ぎの方形区画文を描く→③並行状沈線間に連続刺突文（一列）を入れ、軽いミガキ（縄文磨り消し）を加える。

内面 上半部はオサエ・ナデの痕跡を残す軽いミガキ、下半部は縱の軽いミガキが加えられている。

胴中央の膨らみ部に帯状（幅約5cm）の暗黒褐色を

した焦吸着痕がある。この部分の外面は橙色を帯びた灰褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗褐色～灰褐色で、上半部に黒斑がある。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史考古資料』図版70-2に、「後期南境式 南境貝塚」として写真が掲載されている。

野口義麿編(1981.10)『縄文土器大成後期』図版62に「南境式」として写真が掲載されている。解説には「口縁上の4個所に小さな突起があり、体部文様はこれを基点として、4単位施されている。沈線枠には刺突の列点があるが、中期末の大木10式の手法が遺存したものであろう。この深鉢の器形や縦位の縄文施文もまた、中期末の特徴を残すといえよう。なお、この刺突列点の施文は、関東の称名寺式にも見られ、南境式でも早い段階に位置づけられようし、袖窓式や岩手県の門前式にも併行するであろう。これは大木10式からの変化であろうが、その一方で福島県南の綱取1式と関連する文様要素が認められない。」とある(執筆者:後藤勝彦)。

資料23(第10図 図版4 土器箱⑦)

楠本記録 ラベル「P139 南境」「矢本町史 先史」図版46「縄文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ24.1cm・最大径(口縁部)21.6cmの深鉢で、口縁突起の一部と胴下端部～底部を欠いている。破損部は復元補修である。

器形 口縁部に7個の山形小突起がある。口縁部は外傾し、頸部で縮まる。胴部上端は屈曲を持って膨らみ、底部に向かって緩やかにすぼまる。

文様構成 口縁部は無文で、突起部が僅かに肥厚する。胴部には単節斜縄文が全面に密接施文されている。胴部には帯状の並行状沈線で、蛇行状曲線文・下向きの縦位渦巻文などが描かかれている。並行状沈線の幅は約1.5cmであるが、屈曲する場所によって、

1.5～2.5cmの開きがある。この並行状沈線は端部を丸く結ぶものと、そのままのものがある。

文様表現技術 口縁部には粘土紐積み上げ痕、突起部貼り付け痕を残し、横のナデ・軽いミガキが加えられている。

肩～胴部全体に単節斜縄文(RL:3mm/1条・1.7mm/1節)が、密接して施文されている。胴部は継回転施文であるが、器形が変化する肩部付近では横・斜め回転施文もみられる。

蛇行状曲線文・下向き渦巻文を描く並行状沈線は、幅2～3mm・深さ2mm前後で底は丸みを持つ。沈線によって切られた縄文施文部に粘土の捲れ上がりが所々にみられる。その後、並行状沈線間はミガキが加えられ、一部沈線の外側縁にも及び。その結果、縄文は帯状に磨り消されるが、消し残された縄文痕跡が所々に認められる(図・拓本参照)。

これらの工程を整理すると、①単節縄文施文→②並行状沈線による文様描画→③並行状沈線間を磨く(磨消縄文)となる。

内面 口縁部下端に外面屈曲による稜が巡り、横向のナデで整えられるが、器面はやや粗雑である。それに対し胴上部は横、胴下部は縦のミガキで平滑に仕上げられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗褐色から灰褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、長石・黒色破碎石片(半透明)などがみられる。

関連事項

野口義麿編(1981.10)『縄文土器大成後期』図版66に「南境式」として写真が掲載されている。解説には「口縁部がやや外反し、研磨無文帶となる深鉢は中期末から後期初頭の特徴である。沈線区画の磨消手法による不規則な文様施文は、やや後出の特徴と思われ、時期は多少下るかもしれない。」とある(執筆者:後藤勝彦)。

資料24(第11図 図版4 土器箱⑧)

楠本記録 ラベル「C-II」

形状と技術的特徴

現状 高さ23.4cm・最大径(口縁部)15.6cmの深鉢で、

口縁部の多くと胴・底部の一部を欠いている。また、器面には剥落の著しい部分もある。

口縁部は4個の大波状に、その他の破損部は復元補修してある。

器形 細身の深鉢で、上半部が外反気味に外傾し、胴中央部が膨らむ。胴下部は底部に向かって緩やかにすぼまるが、胴部下端は内反気味に直立する。底部には網代圧痕が認められる（拓本参照）。

なお、口縁部の残存は少ないが、以下に述べる文様構成との関連から、口縁部の4波状復元はほぼ妥当なものと考えられる。

文様構成 口縁部は無文で、頸部から胴中央部に並行状沈線による文様が、変則部分を含みながら4単位で横に繋がれた形になっている。文様連結部には貼り付けられた小輪（胴部2個）や、その貼り付け痕（胴部2個・頸部1個）が認められる。破損している

頸部にも胴部と対応する位置に小輪が存在していたと推定される。そのように見ると、頸部小輪は並行状沈線が下垂する部分に位置することになり、その上が口縁部の波状突起となる（図・拓本参照）。

頸部から下垂する並行状沈線はJ字状・下部半溝巻状・L字状となり、直接もしくは並行状沈線によって連結されている。また、頸部沈線は左・右に延び、隣の並行状沈線に連結され、全体として4単位構成の文様となる。

地文は斜縄文であるが、各種並行状沈線文は磨かれて無地となっている。

文様表現技術 口縁部の残存は少ないが、頸部沈線後に横のミガキが加えられている。

頸部沈線から下垂する各種並行状沈線文は、幅1.0～1.3cmで、曲面部で広狭の違いを生じている。沈線の幅は2～3mmで底が丸く、重ね引きもある。これらの各種並行状沈線文は仕上げ段階で強いミガキが加えられ、それは沈線の外側縁にも及んでいる。

小輪は粘土（玉・紐）を貼り付け、中央に回転状刺突を加えたものであるが、胴中央部の文様連結部に配された2個を見ると、縄文と並行状沈線の上にまたがって貼り付けられている。強いミガキは小輪上面に及んでいるが裾周りはナデ状のミガキである。少なくとも、小輪貼り付けは縄文と並行状沈線より

新しいが、縄文と沈線の前後関係は明確でない（沈線に重ね引きがあるため）。

縄文は单筋斜縄文（LR:4mm / 1条・3mm / 1筋）で、器形に沿うように縦・斜め回転施文している。この点では、縄文施文→並行沈線文→小輪貼り付け→仕上げミガキと見ることもできるが、器形の屈曲が強いため、施文方向と文様の関係が明確でない。

また、各種並行沈線文に加えられたミガキが強いため、消し残された縄文の確認が難しい。磨消縄文か否かは課題として残しておきたい。

なお、縄文は胴下部まで及ぶ所もあるが、ナデのままや剥落している部分も多い。胴部下端は縦や斜めのミガキが加えられている。

内面 口縁～胴上半の屈曲部は斜め、胴中央は横のミガキで平滑になっている。胴下部は軽いミガキで、底部はオサエ・ナデツケが見られる。

胴下部には帯状（幅約4cm）の暗黒褐色をした焦吸着痕がある。この部分の外面は橙色味を含む灰褐色をしており、器面の剥落もみられる。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗褐色～灰褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・風化砂礫粒・黒色破碎石片（半透明）などが観察される。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他（1981.10）『宮城県史考古資料』図版70-3に、「後期南境式 南境貝塚」として写真が掲載されている。

資料25(第11図 土器箱⑩)

標本記録 ラベル「P127 南境 B-VII 堀I」
台帳「南境 堀之内I」

形状と技術的特徴

現状 高さ12.2cm・最大径（胴下半部）7.7cm・底径6.4cmの深鉢で、口縁～胴中央部を欠いている。概形製作時の粘土紐繋ぎ目で、上部が破損している。

器形 細身の深鉢で、胴下部は僅かに外傾する。胴部下端（底部外周）は丸みをもって僅かに張り出している。

外面 残存部外面は全体的に摩滅しているが、単節斜縄文(LR:4.5mm/1条・2.7mm/1節)が間隔をおきながら施文されている。施文方向はやや斜めの縱方向である。

胴部破損上端には小輪貼り付け(下半部3個)と小輪間に下向きの弧状沈線(幅・深さ1~2mm)が1条確認される。弧状沈線の上面と僅かに残るその上部はミガキが加えられている。これらの残存部の状況(弧状沈線と小輪の配置)から、基本的には4単位構成であったと推定される。

胴部下端には斜めの荒いケズりがある。底部には広葉樹の木葉圧痕がある。

内面 脇部は滑らかな縱のミガキが加えられている。脇下部はナデで、粘土紐の凹凸・繋ぎ目痕を残す。底部はオサエ・ナデツケである。

焼成・胎土 焼成は普通で指で、彈くとにぶいコンコンという音を発する。外面は灰黒褐色~灰褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

資料26(第11図 土器箱⑪)

楠本記録 スタンプ「P135」筆記「B~VII」

台帳「P135 南境 袖珍土器 後、初頭」

形状と技術的特徴

現状 脇下~底部が残る深鉢で、高さ4.7cm・最大径(脇下部)5.9cm・底径2.6cmである。粘土紐繋ぎ目で壊れている。

器形 小型の深鉢で、脇下部は大きく外傾し、底部が小さい。内面側は尖底状丸底をしている。

外面 オサエ・ナデ状の器面に細沈線(幅・深さ1mm前後)で、下向き弧状文を描いている。この弧状文は2条1組(幅1cm前後)で、入り組み状になる部分もある。その後、縱の面取り状ミガキを加え、沈線が消えている部分もある。この他、一部に単節斜縄文(LR:2mm/1条・1mm/1節)がミガキに消されずに残っている。縱回転施文である。

底部にはオサエの様な凹凸のある痕跡が残る。

内面 内面は横のミガキが加えられ、平滑になっている。斜めのヘラ当たり状痕跡が残る。丸底状底面

は軽いミガキである。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は灰褐色をしている。

胎土は均質なシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)を含む。

資料27(第11図 図版4 土器箱④)

楠本記録 ラベル「P149 南境」

形状と技術的特徴

現状 高さ18.4cm・最大径(口縁部)17.0cmの深鉢で、底部と口縁・脇部の一部を欠く。破損部分は復元補修してある。

器形 逆台形状の深鉢で、脇部は直線的に外傾する。口縁部内面は僅かに肥厚し、屈曲部が棱を形成する形になっている。

文様構成 口縁部は無文で、脇部全体に地文として単節斜縄文が施文されている。

また、口縁部から脇下部には2条の沈線からなる縦位並行線(幅約2cm)が、ほぼ等間隔に4列配置され、その中に短沈線を連続充填している。ただし、頂部だけは円形刺突が小輪状となっている。

したがって、文様構成としては帯状の縦位並行状沈線帯(短沈線充填)と斜縄文施文帯が交互に4組配置された形となる。

文様表現技術 口縁部は横のナデで、粘土紐積み上げの凹凸を残している。縦位並行線の沈線は幅約3mmで底が丸い。並行状沈線間に一列充填の短沈線は、長さ1.5~2.0cmであるが、沈線としての形状はほぼ共通している。それに対し、頂部の円形刺突は回転させながら刺突を加えているため、やや深く、周りに粘土の盛り上がりを生じさせ、沈線を一部覆うものもある。小輪状のものは、粘土を貼り付けて刺突を加えたものか、粘土の盛り上がりを押し潰したのかは明らかでない。

その後、並行状沈線間にナデ状ミガキが加えられ、それは沈線外側縁に及ぶことが多い。

単節斜縄文(RL:5mm/1条・2.5mm/1節)は縦回転施文で、並行沈線のナデ状ミガキに切られている。並行状沈線間に明瞭な消し残しはみられないが、脇下部の並行沈線が及ばない部分にも縄文は施文さ

れ、部分的ながら沈線に切られている（正面図・拓本参照）。また、縄文施文単位の幅からみると、並行状沈線間に及んでいた可能性がある。その場合、断定は控えるが、並行沈線間は磨削縄文ということになる。

内面 口縁部が肥厚し、屈曲部が稜をなす部分は、外面において円形刺突が加えられる位置とほぼ一致する。この部分は丁寧な横のミガキが加えられている。胴上部は斜めのミガキ、その下は縱のナデ状ミガキ、胴下部は横のナデ状ミガキとなっている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。外面は上半部が淡い褐色、下半部が暗灰褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・風化砂礫粒・黒色破碎石片（半透明・不透明）などがみられる。

資料28（第12図 図版4 土器箱⑩）

楠本記録 ラベル「P148 南境 B - IV」

形状と技術的特徴

現状 高さ13.9cm・最大径（頸部）23.0cm・底径6.0cmの浅鉢で、口縁・底部の一部を欠く。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁部は内湾し、胴部が外傾する。浅鉢としだが、高さ／最大径の比が3/5で、鉢に近い。

文様構成 口縁部は肥厚する無文隆帯（幅12～15mm）が巡る。その下に器面を5分割するように縦の無文隆帯（幅約2cm）が配置され、それらに区画された逆台形状部分に縄文が施文されている。

文様表現技術 口縁部の横位隆帯・胴部の縦位隆帶には丁寧なミガキが加えられている。また、縦位隆帶の両側面には沈線状のミガキがある。逆台形状部分の斜縄文は無節（Lr:5mm / 1条）の縱回転施文である。

これらをもう少し詳しく観察すると、縦位隆帶の粘土は、口縁部隆帶の下半部に貼り付けられている。また、縦位隆帶の沈線状ミガキは、多くの場合、縄文の端部を磨り消している。しかし、このミガキが及ばない部分では縄文が隆带側縁に載るように施文されている（図・拓本参照）。

したがって、これらの工程を整理すると①口縁部隆帶貼り付け→②縦の隆帶貼り付け→③逆台形状部分に縄文を充填施文→④隆帶のミガキ仕上げとなる。

内面 ほぼ全体に横のミガキが加えられているが、胴下端部は斜めである。底部は剥落が著しい。

胴下半部は暗黒褐色の焦痕状で、対応する外面は淡い褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとややにぶい、コンコンという音を発する。外面は暗褐色～淡い褐色である。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片（半透明）などがみられる。

資料29（第12図 土器箱⑪）

楠本記録 ラベル「P166 南境 B - V 9 土製蓋」
台帳「南境 土器フタ 大木9」

形状と技術的特徴

現状 高さ2.3cm・口径（9.0cm）の蓋で、摘み上部と蓋身～摘み部3/5を欠く。

器形と概要 周縁部は裾広がりの円盤状で、その中央部から細口状の摘みが立ち上がる。

外面は横のミガキ仕上げで、光沢のある暗黒褐色をしている。内面は摘み部が斜めのナデツケ、裾部がナデで、にぶい暗灰褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。

胎土はシルト質粘土で、長石・黒色破碎石片・風化砂礫粒などを含む。

資料30（第12図 図版5 土器箱⑫）

楠本記録 ラベル「P167 南境 B - VII 10」
台帳「南境 土製フタ 大木10」「矢本町史 先史」
図版40「土製蓋 縄文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ6.3cm・口径11.7cmの蓋で、全体的に残りが良い（取手・口縁の一部を欠く）。破損部分は復元補修してある。

器形 裁頭円錐形をした蓋部中央に細口状の摘みがあり、さらに左右一対の取手が付く。

概要 蓋部外面には2段の隆線が巡る。中央上部には壺口縁(細口)状の摘みが外反しながら立ち上がる。左右の摘み頂部から下段隆線に繋がる橋状の取手は「8」字状をしており、上下に紡錘形・隅丸三角形の透かしがある。「8」字状橋状取手はS字状の粘土帯を左右対称に反転して重ねた形状をしている(図・拓本・写真参照)。

表現技術 隆線及び橋状取手は粘土紐・帯を貼り付けたもので、外面は基本的にミガキ仕上げである。ただ、橋状取手内面と、蓋部のそれに向き合う部分はナデツケやナデで、粗面状態となっている。

内面 蓋部は周縁に沿ったミガキが加えられているが、壺口縁(細口)状の摘みは軽いミガキである。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとぶいコンコンという音を発する。外面とも灰褐色で、一部に黒斑がある

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、長石・風化砂礫・黒色破碎石片(不透明)などがみられる。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史考古資料』図版68-4に、「中期 大木10式」として写真が掲載されている(注:「沼津貝塚」とあるのは誤植と思われる)。

資料31(第12図 図版5 土器箱①)

楠本記録 ラベル「P168 南境 C-II 10 土製蓋」台帳「南境 土製フタ 大木10」「矢本町史 先史」図版39「土製蓋 繩文中期 大木10式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ6.8cm・口径17.8cmの蓋で、口縁の一部を欠く。破損部分は復元補修してある。

器形 蓋部は皿を伏せた形で、中央に橋状の摘みを付けている。蓋口縁部は縁帶状で、端部が丸く引き出されたようになっている部分もある。橋状摘みはアーチ状(幅2.5~3.0cm)で、両端が隆線となっている(双隆線)。

概要 蓋上面は橋状摘みから口縁部に延びる幅3~4cmの帯状無文帯(双隆線)と、摘みの付け根で十文字に立体交差する幅約5cmの帯状無文帯(双隆線)に

よって4区画に分割される。各区画は隆線(断面隅丸三角形)とその内側に沿う沈線によって、隅丸扇状に縁取られ、内部は卵形(斜めに深くなる)の刺突文で埋められている。

表現技術 隆線及び橋状摘みは粘土紐・帯を貼り付けたもので、外面は基本的にミガキ仕上げである。

刺突文は扇状のナデ整形面に加えられ、沈線によって切られている。隆線のミガキが及んでいない部分では、隆線(ナデ面)上に加えられている。

沈線は隆線の内側に沿って隅丸扇状に縁取るが、必ずしも全周しない。さらに、沈線外縁には最終的に隆線のミガキが及ぶ。

これらの工程を整理すると、①橋状摘みと双隆線貼り付け→②ナデ整形→③扇状部分に卵形刺突文充填→④沈線による補足縁取り→⑤橋状摘み・帯状無文帯(双隆線)のミガキ仕上げとなる。

内面 内面は軽いミガキが加えられているが、概形製作時のオサエ痕が凹凸として残っている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとやわらかいコンコンという音を発する。内外面とも淡い黄褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石の他、黒色破碎石片(半透明)などがみられる。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史考古資料』図版68-5に、「中期 大木10式 石巻市・河北町南境貝塚」として写真が掲載されている。

資料32(第13図 図版5 土器箱⑧)

楠本記録 ラベル「P126 南境 B-VI 大木10」台帳「南境 大木10」「矢本町史 先史」図版34「繩文中期 大木9式 南境貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ26.1cm・最大径(口縁部)23.7cm・底径8.5cmの深鉢で、口縁~胴部の一部を欠くが、残りは良い。破損部分は補修してある。

器形 この深鉢は口縁部が緩やかに外反し、胴上部が僅かにくびれる。胴中央部が少し膨らみ、底部に向かってすぼまる。

外観 口縁部が無文で、胴部全体に縦位弧状の単節

縄文 (RL:4mm / 1条・2.5mm / 1節) を斜め回転施文している。この単節縄文は、筋の傾きは小さいが繊維の走行は左下がりである（さつく撚った原体）。

縄文施文後、口縁部に丁寧な横のミガキ、胴下端部に荒い横・斜めのミガキを加え、縄文施文末端を磨り消している。

底部は丁寧に磨かれているが、網代圧痕とみられるものが周端部に1列残っている。

内面 上半部は横、下半部は斜めのミガキが加えられている。底部はナデツケ状のミガキである。

胴下部に暗黒褐色の焦吸着痕がみられる。これに対応する外表面は橙褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面上部は黒褐色～暗褐色で煤状の吸（付）着がある。

胎土は砂粒を多く含むシルト質粘土で、石英・長石・風化砂礫粒・黑色破碎片（半透明・不透明）などがみられる。

資料33(第13図 図版5 土器箱⑧)

楠本記録 ラベル「P154 南境 B - Ⅴ 大木9式
並行」

現状 高さ10.2cm・最大径（口縁部）10.1cm・底径5.5cmの小形深鉢で、口縁～胴上部の1/2を欠いている。破損部分は補修してある。

器形 口縁部～胴下部まで直線的に外傾するコップ状の小形深鉢である。口縁部は丸く収まる。

外面 胴部全体に単節斜縄文 (LR:7.5mm / 1条・3.3mm / 1節) を縱回転施文している。口縁部は横（一部粗面のまま）、胴部下端は斜めのミガキが加えられ、縄文の施文末端を磨り消している。

内面 口縁部は横、胴部は継のミガキで平滑になっている。胴部下端は横のナデツケ状ミガキ、底部は軽いミガキとなっている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くとコンコンという音を発する。外表面は橙褐色～暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英・長石・風化砂礫粒・黑色破碎片（半透明・不透明）を含む。

資料34(第13図 追加土器箱⑨)

楠本記録 鉛筆書き「南境一括」

現状 壊れてバラバラの破片を接合・復元したものである。高さ47cm・最大径（口縁部）27cm・底径16cmの円筒状深鉢で、口縁～胴上部1/2と胴部の一部を欠く。破損部分は補修した。なお、底部中央は大きく剥落しているが、現状のままとした。

器形 この円筒状深鉢は胴部が僅かに外傾し、口縁部はそのまま僅かに外反する。胴部下端は歪んで膨らむ部分がある。

外面 口縁部～胴下部まで単節斜縄文 (LR:5mm / 1条・3.3mm / 1節) が施文されている。大部分は縱回転施文であるが、口縁部付近は斜め回転施文となっている。

縄文施文後、口唇部に丁寧な横のミガキ、胴部下端に荒いミガキを加え、施文末端を磨り消している。

内面 口縁部は横、胴部は継のミガキで平滑になっているが、ケズリの痕跡を残す部分もある。底部は周縁に沿うナデツケ状のミガキである。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くとコンコンという音を発する。外表面は淡い橙褐色～暗黒褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・黒色破碎片を含む。

資料35(第14図 図版5 土器箱⑨)

楠本記録 ラベル「P158 南境」

筆記「C - I (9併行)」

現状 高さ41.8cm・最大径（頸部）27.6cm・底径11.5cmの深鉢で、口縁～胴部の一部を欠いている。破損部は補修してある。

器形 口縁部が直立気味に内湾し、胴部は外傾する。胴部下端は直立気味である。

外面 口縁～胴下部まで単節斜縄文 (LR:4mm / 1条・2.5mm / 1節) が施文されている。大部分は縱回転施文であるが、口縁部付近は横走する斜め回転施文となっている。

縄文施文後、口唇部は横のミガキで施文末端が磨り消されている部分がある。胴部下端はオサエ・ナデ・荒いミガキとなっている。

底部には網代圧痕が明瞭に残る（拓本参照）。

内面 口縁部は横・斜め、胴部は継のミガキが加え

られ、平滑になっている。底部はナデ状のミガキである。

胴下半部に暗黒褐色の焦吸着痕がある。それに対応する外面は橙褐色～灰褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面上半部は暗褐色で、口縁部付近に黒斑状の部分がある(写真参照)。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片などがみられる。

資料36(第14図 土器箱⑨)

楠本記録 ラベル「P156 南境」

現状 高さ19.5cm・最大径(頸部)13.9cm・底径9.9cmの深鉢で、胴下半の一部を欠いている。破損部は補修してある。

器形 口縁～胴上部は内湾気味に直立し、胴下半部は外傾する。内面は滑らかであるが、外面には凹凸がみられる(粘土紐積み上げの器形的痕跡か)。

外面 口縁～胴下部には無節斜縄文(Lr:5mm/1条)が少し間隔を開けながら施文されている。胴部は継回転施文であるが、口縁部付近はやや斜め回転施文になっている。

口唇部は横の軽いミガキ、胴部下端は横・斜めのミガキやケズリとなっている。

底部には平行な筋状圧痕がほぼ全面に認められる(祇目材圧痕かもしれない)。

内面 口縁部には横・斜めのミガキ・ナデ状痕跡がある。胴部は継の軽いミガキ、底面はオサエで周縁にナデツケがみられる。

焼成・胎土 焼成はやや不良で、指で彈くとにぶいコンコンという音を発する。外面は暗赤褐色～暗褐色をしている。

資料37(第14図 図版5 土器箱⑧)

楠本記録 ラベル「P125 南境」 筆記「B-VI 10

併行」 台帳「南境 大木10」「矢本町史 先史」

図版44「縄文中期 大木10式 南境貝塚」

現状 高さ28.5cm・最大径(口縁部)26.0cmの深鉢で、突起2個の上部と胴下～底部を欠いている。破損部分は復元してある。

器形 口縁部は内湾気味に外傾し、4個の山形突起(隅丸三角形)がほぼ等間隔に配置されている。胴部は外傾する。突起部の器厚は口縁部と変わらない。全体として、上部が大きく聞く深鉢である。

外面 口縁・突起部から胴下部まで無節斜縄文(Lr:4mm/1条)が施文されている。胴部は継回転施文であるが、上部はやや斜め回転施文となっている。

口唇部は丁寧な横のミガキで、縄文の施文末端を磨り消している部分もある。

内面 口縁・突起部～胴下部(残存部)は丁寧な横のミガキで平滑になっている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面はにぶい褐色～橙褐色で、上半部に黒斑状の部分がある(写真参照)。

資料38(第15図 追加土器箱②)

楠本記録 ラベル「P124 南境 B-V 大木10式」

現状 高さ30.0cm・最大径(頸部)32.0cmの深鉢で、胴下部を欠いている。破片を接合し、細部破損を補修した。

器形 口縁部が軽く内湾し、胴部は内湾気味に外傾する。

外面 口縁部はオサエ・ナデの粗面で、口唇部がやや肥厚しミガキが加えられている。口縁部から胴部全体に網目状燃系文が施文されている。この網目状燃系文はR燃系文を、交差(重複)させて回転施文したものである。この他、胴下部に無節斜縄文(Lr:4mm/1条)継回転施文が部分的に確認される。

内面 口縁～頸部は横、胴部は継のミガキが加えられ、器面は平滑になっている。

胴部には暗黒褐色の斑状に垂れ下がる大きな焦痕跡が吸着している。顯著なのは対面する2カ所で、その間は薄い。対応する外面は褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗褐色～褐色をしている。

胎土は砂粒を含む均質なシルト質粘土で、漆黒の破碎石片や少量の金色雲母細片がみられる。

資料39(第15図 図版5 土器箱⑥)

楠本記録 ラベル「P157 南境 C - II (称)併行」
現状 高さ29.0cm・最大径(口縁部)19.7cm・底径10.5cmの深鉢で、口縁～胴部の1/3を欠いている。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁部が軽く外反し、胴部は外傾する。胴部下端が縮まり、底部が張り出す。

外面 口唇部はオサエ・ナデ・軽いミガキで、口縁部が丸く収まる。口縁～胴部には無節斜縄文(Lr:6～7mm/1条)が間隔を開けながら、縦・斜め回転施文されている。胴下部はナデ・斜めのナデツケで、底部側面には荒いミガキが加えられている。

底部には網代圧痕・ケズリ状ナデが見られるが、一部剥落している(拓本参照)。

内面 口縁～頸部は横のナデ・軽いミガキ、胴部は縦の粗いミガキで斜めのケズリ痕跡を残す。胴部下端は斜め、底部は横のミガキである。

焼成・胎土 焼成は普通で指で弾くとコンコンという音を発する。外面は上半部が暗褐色、下部が褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、長石の他黒色破碎石片(半透明)・金色雲母片などを含む。

資料40(第15図 図版5 土器箱⑥)

楠本記録 ラベル「P155 南境 B - VII 南境式並行」

現状 高さ15.0cm・最大径(口縁部)12.8cm・底径7.1cmの深鉢で、口縁～胴上部の1/4を欠く。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁～胴部下端までほぼ直線的に外傾するコップ形の小形深鉢である。

外面 口唇部は丁寧な横のミガキで、丸く収めてある。口縁～胴部は無節斜縄文(Lr:2mm/1条)が密接して縦・斜め回転施文されている。胴下部は幅広のミガキ(斜め・横)が加えられ、縄文施文末端が磨り消されている。底部は軽いミガキで、平滑になっている。

内面 口縁部は横、胴部は縦のミガキで平滑になっている。胴部下端は軽い横のミガキ、底部は軽いミガキでオサエ・ナデツケ痕を残す。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコ

ンという音を発する。外面は暗褐色～灰褐色で、一部橙褐色の部分もある。胎土はシルト質粘土で、少量の黒色破碎石片を含む。

資料41(第15図 図版5 土器箱⑩)

楠本記録 ラベル「P129 南境 B - VII 堀併行」
台帳「P129 沼津 堀之内I併行」

現状 高さ10.2cm・最大径(頸部)7.9cm・底径5.7cmの深鉢で、ほぼ完形である。部分的な破損は補強補修してある。全体に端正な作りである。

器形 口縁～胴上部は内湾気味に直立し、胴下半部は外傾する。胴部下端ですばり、底部が脱く張り出すコップ形の小形深鉢である。口縁部が隅丸方形で大きさの割に厚手(器厚約5mm)である。底部外面は上げ底、内面は丸底になっている。

外面 この小形コップ状深鉢は全面ミガキ仕上げである。外面は口縁部が横、胴部が整った縦、底部は軽い横のミガキである。内面は口縁部が横、胴～底部が斜めのミガキで、胴部下端には斜めのヘラ当たり痕がある。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも淡い白黄褐色で、口縁部・胴部下端に黒斑がみられる。

胎土は均質なシルト質粘土で、石英・長石・漆黒色破碎石片などを含む。

資料42(第15図 追加土器箱①)

楠本記録 スタンプ「P159」筆記「C - II 10」

現状 高さ6.1cm・最大径(破損部)8.0cm・底径4.9cmの小形深鉢胴下～底部である。

器形 脇下部はやや膨らみをもって外傾する。

外面 外面は胴下部が縦のミガキ、胴部下端が横のミガキとなっている。底部には3条の筋を持つ圧痕(木葉の一部か?)がみられる。

内面は胴部が縦のミガキ、底部がナデツケ状の粗面となっている。

焼成・胎土 焼成は良好で指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗褐色をしている。

胎土はやや均質なシルト質粘土で、石英・漆黒色破碎石片などを含む。

資料43(第15図 追加土器箱②)

楠本記録 紙片(鉛筆書き)「南境」

現状 高さ52cm・底径12.6cmの深鉢と推定される胴下～底部である。

器形 脇下部は外傾する。

器面 外面は脇下部が軽いミガキ、底部が網代圧痕(周縁の一部にナデ・ミガキ:拓本参照)である。

内面は脇下部が横のミガキ、底部がオサエ・ナデとなっている。なお、脇部下端(底部周縁)にヘラ当たり痕が顕著にみられる。内面の破損線に沿って暗黒褐色の焦状吸着痕がみられる。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面ともくすんだ橙褐色をしている。

資料44(第16図 追加土器箱①)

楠本記録 筆記「南境」「矢本町史 先史」図版50「縄文後期 南境式 南境貝塚」

現状 高さ9.4cm・最大径(口縁部)17.0cm・底径7.8cmの鉢で、器壁薄く、歪みが著しい。口縁部の小さな破損は補修した。

器形 口縁～脇部が内湾気味に外傾する。口唇部は隅丸方形状をしている。底部は外面がほぼ平坦であるが、内面は中央部が高くなっている。

器面 口唇部は丁寧に磨いている。外面は口縁・脇部に斜めや横のナデ(一部軽いミガキ)がみられるものの、オサエや粘土紐積み上げ痕の凹凸を顕著に残している。底部は円凸の残る粗面となっている。

内面は口縁・脇部に軽いミガキやナデがが加えられ、外面に較べれば平滑ではあるが、概形製作時の凹凸を帶状に残している。底部はナデの下にオサエ痕を残す。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも橙褐色をしているが、にぶい褐色の部分もある。

資料45(第16図 土器箱①)

楠本記録 ラベル「P21 南境」筆記「南境 昭33-7」「矢本町史 先史」図版51「縄文後期 南境式 南境貝塚」

現状 高さ8.5cm・口径14.6cm・台径9.1cmの台付き塚で、全体的にやや歪んでいる。口縁部の一部を破損しているが、補修してある。

器形 丸底の塚に高さ3.3～3.7cmの台を付けたものである。台は内湾気味に外傾する。

器面 塚部は内外面ともナデ仕上げであるが、底部外縁にはオサエ痕が残る(ラベルのため不明部分あり)。台部は外面に規則的なオサエ痕があり、それは塚接合部のオサエと一連のものである。内面はナデである。台部下端は内側に捲れている部分もある。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも淡褐色～にぶい暗黒褐色をしている。

胎土は砂粒を含む粘土質シルトで、石英・長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

関連事項

資料45の台部外面には「南境 昭33-7」と墨で筆記してある。このような名記方法は昭和31年3月3日に沼津貝塚で資料の採集を始めた時からのものとみられる。楠本政助(1976.2)『縄文人の知恵にいたどり』85頁で「墨で「沼津S31・3」と、ひとつひとつ書き込む。そうしておかないと、いつ、どこで採集したのかわからなくなる恐れがあるからだ。」と述べている。

資料46(第16図 土器箱①)

楠本記録 筆記「南境 昭33-7 P20」
ラベル「P20 南境」

現状 高さ7.3cm・口径10.2cm・台径6.1cmの台付き塚で、全体的に歪んでいる。口縁部の1/4を欠くが、補修してある。

器形 平底の塚に高さ3.0～3.3cmの台を付けたものである。台は内湾気味に直立する。

器面 塚部外面は粗いミガキ・斜めのケズリ状ナデ・オサエ痕、内面は軽いミガキ・オサエ・粘土紐積み上げ痕などがみられる。底面は比較的滑らかである。

台部外面はオサエ・縦の粗いミガキ、内面はオサエと粘土紐積み上げ痕がある。

全体として粗い仕上げとなっている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンと

いう音を発する。内外面とも淡褐色をしており、台部に黒斑がみられる。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

資料47(第16図 図版5 追加土器箱④)

橋本記録 ラベル「P19」「矢本町史 先史」図版65
「縄文後期 金剛寺式 南境貝塚」

現状 高さ9.2cm・口径(推定7.4cm)・最大径(胴部)9.2cm・底径1.6cmの小型注口土器で、口縁～頸部は一部(1/6)を残すのみであるが、復元補修してある。この他、注口部の口が欠けているが、全体の保存は良好である。

器形 頸部から口縁部が外反し、口縁部に山形突起が付く。この突起は頂部に刻みが入る。突起数は胴部の注口・文様配置との対応から6個か8個と推定される。胴部は球形状で、下半部が小さくすぼまる。底部は上げ底である。胴部中央に注口部がある。

口縁・頸部文様 頸部に2条の横位並行状沈線を引き、その後突起下部から斜めに沈線を引いている。突起間の口縁部に引いたとみられる同様な斜線が左右にあるので、これらは並行状に繰り返すものと推定される(並行斜線 復元図参照)。

注口部と胴部文様 胴中央に上向きの注口部があり、下部付け根に半円形の袋状のものが付加されている。この注口部は胴部中央を丸く穿孔して、外側に貼り付けたものである。内面側は穿孔時に捲れてはみ出した粘土をオサエで整えている。

胴部中央にはこの注口部を中心にして、横に連ねた弧状縄文帯4組と貼瘤3個が配置されている。

貼瘤は粘土玉を貼り付け、頂部に縫の刻みを入れたものである。注口部と貼瘤は等間隔で配置され、その間は4単位となる。

弧状縄文帯は注口部と貼瘤を繋ぐように上向きと下向きの並行状沈線が引かれ、その沈線間に単節縄文が充填施文されたものである。単節縄文(LR:2mm/1条・1.5mm/1節)の施文方向は、弧状の沈線文様に沿って変化させている。

胴下部には弧状縄文帯と間を開けて、横位の沈線を引き、単節縄文を器形の変化に対応させながら充

填施文している。

最後に、縄文の施文されない無文部を丁寧に磨いて仕上げている。このミガキは沈縁上面に及んでいる部分もある。底部周縁および上げ底の窪んだ部分も磨かれている。

内面 口縁部から頸部は磨かれているが、胴～底部はオサエやナデのままである。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いカンカンという音を発する。外面の突起・注口・瘤・無文部と内面口縁～頸部は光沢のある暗褐色～灰黃褐色をしているが、内面の多くはにぶい灰褐色で対照的である。

胎土は均質なシルト質粘土で、黒色破碎石片や金色の雲母細片などがみられる。

資料48(第16図 土器箱⑪)

橋本記録 ラベル「P18 南境」

筆記「南境 33-7 朱書「C1」

現状 高さ3.6cm・最大径(口縁部)12.0cmの小形皿で、口縁部大突起(A突起)が欠けている。この他、口縁部1/4～底部を破損している。大突起を除き、破損部は復元補修してある。

器形と文様 口縁・胴部は内湾気味に外傾する。口唇部が幅広く(8～10mm)、内側が小波状の隆線で縁取られ、外側には2個一対の玉状突起(B突起)が巡る。上から見ると丸みを持った立体的な「Y」字状をしており、ミガキが加えられて光沢がある(玉Y字文 拓本参照)。

外面には単節斜縄文(LR:4mm/1条・2.5mm/1節)が横回転施文される。口縁部の突起に及ぶが、仕上げミガキによって磨り消されている。単節斜縄文は2段に亘っていることまでは確認できるが、胴下部以下の詳細な器形的特徴は明らかにし得ない。

内面 口唇部内側の小波状部分も玉状をしている。胴上部内面は周縁に沿った細かなミガキが加えられている。胴中央下部ではミガキの単位がやや幅広い。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面はにぶい橙褐色、内面はにぶい暗褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・

不透明)が含まれる。

資料49(第16図 追加工器箱①)

楠本記録 筆記「MINAMIZAKAI」『矢本町史先史』図版82「縄文晚期 大洞C2式 南境貝塚 保管場所 石巻市教委』

現状 高さ7.4cm・口径7.1cm・最大径(胴部)12.8cm・底径4.0cmの注口土器で、口縁の一部(約1/4)を欠いていたので、補修した(図面は補修前)。

器形 頸部から口縁部が外反し、胴部は算盤玉状である。口縁部は内面に沈線が1条巡り、受け口状をしている。胴中央部は鈎状に張り出しが、注口部には及ばず、両肩の間に上向きの注口が付いた形となっている。底部は小さく、僅かに丸みを持っている。

注口部と外面 胸部中央に穿孔し、注口部を外面に貼り付けたものである。注口部とそれに面する鈎の肩はミガキ仕上げである。

頸部から胴部の鈎状線上端、その下端から胴下部に、それぞれ単節斜縄文(LR:3.3mm/1条・2.5mm/1節)が、器面の屈曲に沿って施文されている。

頸部と鈎上面裾のそれぞれに2条の並行状沈線が巡り、施文された縄文を切っている。口縁部にはミガキが加えられ、それは上位の沈線まで及んでいる。

胴部の鈎状線にも沈線が1条巡り、その上面にはミガキが加えられている。

底部には軽いミガキが加えられている。

内面 口縁部から胴上半部には横のミガキが加えられている。しかし、胴中央部から底部はナデ状の粗雑なミガキとなっている。なお、鈎状をなす胴部中央内面には粘土の合わせ目が部分的に残っている。

焼成・胎土 焼成は良好で指で弾くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも淡い褐色で、外面胴部中央付近に黒斑がみられる。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・風化砂礫・漆黒破碎石片・金色雲母細片などがみられる。

資料50(第16図 土器箱①)

楠本記録 スタンプ「P134」筆記「B-VI 10」
台帳「P134 南境 袖珍土器 大木10」

現状 高さ6.0cm・口径4.9cm・底径(推定3.3cm)の小型深鉢で、残存するのは口縁～胴部1/3と底部の一部である。全体を復元補修してある。

概要 口縁部が外反し、胴部は僅かに外傾する。

外面は口縁部がオサエ・ナデ、胴部が単節斜縄文(LR:4mm/1条・2mm/1条)が継回転施文されている。内面はオサエ・ナデである。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。外面とも淡い暗褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片などがみられる。

資料51(第16図 追加工器箱①)

楠本記録 スタンプ「P132」筆記「C-I (称名寺)」

現状 高さ2.6cm・口径3.5cm・底径2.9cmの小型鉢で口縁～胴上半部の1/4を欠いている。破損部分は補修してある。

概要 円筒状で、底部外縁が丸く張り出している。

外面には単節斜縄文(LR:3.3mm/1条・2.5mm/1節)を縱・斜め回転施文している。その他の内外面はオサエ・ナデのままである。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、漆黒色破碎石片・金色雲母細片を含む。

資料52(第16図 追加工器箱①)

楠本記録 スタンプ「P97」筆記(白)「南境 33-4」(墨)「宝ヶ峯」

台帳「P97 南境 袖珍土器 表採(昭33.4)」(注:P97は資料61と重複登録。)

現状 高さ4.8cm・口径2.4cm・胴径5.0cmの小型壺で口縁部に破損や摩滅がみられる。

概要 細頸で、胴部が偏球形をしている。頸部には相対する位置に孔(径2~3mm)がある。1孔は穿孔され、もう1孔は凹み状である。

外面はミガキ、内面は頸部がナデ状ミガキ、胴部がオサエである。

焼成・胎土 焼成は普通で、コンコンという音を発する。外面は淡白褐色で、赤味を帯びる部分がある。

胎土はシルト質粘土で黒色破碎石片を含む。

石巻市仁斗田貝塚（挿図1参照）

遺跡の位置 石巻市田代字仁斗田内山

田代島仁斗田集落の北部、太平洋に面する標高20～30mの台地に立地し、東側に牡鹿半島を望むことができる。貝層は台地の北・南斜面に分布する。昭和50年4月30日宮城県指定史跡となった（藤沼・小井川他：1989.3 宮城県教育委員会：1978.3）。
発掘調査について 遠藤源七の小規模発掘（昭和2年）後、昭和34年、内山地番150における電柱設置に伴い、それまで知られていなかった貝層の存在が確認された。昭和39年に楠本政助は金子浩昌と共に、電柱に隣接した地点の試掘（幅40cm・長さ約1m）を行った。楠本は「層位等については上部が大木9・10式、下部に大木8b式、最下部に近いところから大木7式期の土器片が認められる」と『石巻市田代島仁斗田貝塚』『石巻地方の歴史と民俗』に記している（楠本政助：1973.8）。

この中で「Ⅱ 人工遺物 一、土器 二、土・石製品 三、骨角器 Ⅲ 自然遺物 一、人骨 二、動物遺骸」の順で遺物の説明と考察を行っている。土器は写真、土・石製品は実測図、骨角器は実測図・写真を併用し、釣針・鉛などの骨角製漁具に重点を置いた調査報告となっている。

そして、「結語」において、保存の良い岩礁性貝塚として仁斗田貝塚の史跡指定・保護を訴えた。

なお、この報告に収録されていない繩文土器が1点、楠本政助（1973.5）『矢本町史 先史』に掲載されている。

以下、当館に寄贈された資料について述べる。

資料53（第16図 図版6 土器箱12）

楠本記録 ラベル「P536 仁斗田(貝)」 台帳「P536

仁斗田 大木8B」「矢本町史 先史」図版27「繩文中期 大木8b 式 仁斗田貝塚」「田代島仁斗田貝塚」「Fig5 繩文中期大木8b 式の土器」

解説に「Fig5は大木8b式の土器で口径13センチ、推定高17センチのツボである。口縁には巨大な渦巻文把手がついているが類例は当地方に比較的多

く、関東から北陸にかけて盛行した装飾把手の影響を受けて発達したものであろう。胴部は縦に走る二条の平行線で正確に四等分され、各区画は沈線による渦巻文が組み合わされて華麗な文様をつくっている。器壁の厚さは0.4～0.5センチで薄いが胎土・焼成とも良い（実存部約3分の2）。」とある。

形状と技術的特徴

現状 高さ（突起を含む）22.3cm・口径13.4cm・最大径（口縁部）15.0cmの深鉢で、底部を欠く。口縁部は突起を中心に2/5が残る。胴部の破損は部分的で、大部分が残っている（展開図参照）。

破損部は丁寧な復元補修がなされている。

器形 口縁部が内溝し、頸部で締まる。胴部はキャリバー形をしている。口縁部に立体的な渦巻突起が付き、全体的に整った形をしている。

文様構成 突起・口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部文様帯からなる（図・写真参照）。

突起 口縁部が緩やかに高くなり、その左右から2条の並行隆線による渦巻文が頂部に向かって延びる。そして、頂部にも小さな渦巻文を形成する。正面頂部から口縁部に曲流しながら降りる粘土紐は叉状になって左側の渦巻文に繋がる。三叉部には円形の凹みが配される（突起正面・側面図参照）。

この渦巻文突起の内部は空洞で、渦巻文を形作る隆線や粘土紐は、仕上げ段階で上面が平坦に磨かれている。側面はその前段階の軽いミガキやナデ、空洞状の内面はナデ・オサエなどである。

口縁部文様帯 口縁部の残存は上記のように約2/5に過ぎない。しかし、残存部によって文様の大筋は把握し得ると思われる。

突起下部内側：口縁上部には1条の隆線とそれに沿う2条の沈線が巡る。口縁部上端は突起下部内側で波状に少し高くなる。隆線は渦巻文突起へ繋がる。両者の間に平坦面が生じ、その左右に一個ずつ外面に通する斜めの穿孔がみられる（背面図参照）。

突起左側の文様：口縁下部には1条の隆線とそれに沿う沈線が巡る。その残存部左端は小輪状になっている。この小輪と口縁上部の間に、沈線に縁取られた渦巻状の粘土紐がれ目があり、その右側に長い嘴状の沈線（上下2条・間に1条）が延びている。

嘴状沈線も粘土紐洞がれ目とみられる。粘土紐洞がれ目とそれに沿う沈線は有棘渦巻文(劍先渦巻文)を形作る(左側拓本参照)。

突起下部から右側の文様：正面突起下部には、右側に曲流して延びる隆沈線があり、上端で突起の隆線と繋がる。隆線は断面凸状(丸みを持つ部分もある)で、隆線間および両側を沈線でなぞり(3条沈線)、上面に仕上げミガキを加えている(2条隆線)。この隆沈線は、途中で隆線が割かれている部分もあるが、それに沿う沈線によって右端が渦巻文となることがわかる。この渦巻文には嘴状沈線が伴わず、そのまま完結すると思われる(右側拓本参照)。

口縁部上端を巡る隆沈線は残存部右端付近で又状になり、右下に隆沈線が延びることが確認できる。又状部分には粘土が貼り付けられ、歪んだ小輪状になっている。この位置は口縁部において突起からはば1/4の所にある(拓本・展開図参照)。

口縁部文様の復元：残存部の状況から推定される口縁部の文様は、突起部を中心4分割した口縁上部隆沈線に又状分岐点を設け、右側に延びる曲流渦巻文を4個配置し、この又状分岐点と渦巻文下部の隆沈線に小輪を付加したものと考えられる。

また、渦巻文に練もしくは劍先状のものが追加されるものが認められる。右端が渦巻文で完結するものと規則的配置を示すとすれば、交互配置ということになる(展開図参照)。

頸部無文帯 頸部上半は横のミガキが加えられた無文帯である。頸部下半から胴部上端には5条の横位沈線が巡る。

胴部文様帯 胴部文様帯は頸部との境を巡る沈線で画され、規則性をもった文様が展開する。

文様帯の分割：胴部文様帯は口縁突起下部と、その対側で下垂する3条沈線の組み合わせ(「II」状)によって大きく2分割される。内側沈線による「II」状文は両隅に丸みを帯びている。

この大区画には頸部沈線から右に延びる曲流渦巻文が胴上半部に3条1組の沈線で描かれる。その中央部に、再び2-3条の沈線が「II」状に垂下し、文様帯を2細分する。

文様原則：2大別・2細分された胴部文様帯には、細

かな相違はみられるが、基本的に共通した文様が描かれている。すなわち、二つの大きな右向き横位曲流渦巻文は右小区画において、渦巻や「II」状文との連絡線から小振りの劍先状渦巻文を下垂させる。また、2大区画の上部両隅付近には劍先状渦巻文の簡略・変形化した文様が配置されている。

二つの左側小区画には左向きの渦巻文、弧状劍先文やその簡略化された文様が配置されている。

曲流渦巻文・劍先状文は、3条1組の沈線を用いるのが原則で、2条1組のものはその省略されたものとみられる。

また、注意を要するのは、右向き曲流渦巻文と「II」状文を弧状に繋いだ部分は、結果的に横位渦巻精円文を形成していることである。

繩文と文様施文工程 口縁部と胴部には地文として単節斜繩文が密接して施文されている。口縁部はRL(3mm/1条・1.5mm/1条)、胴部はLR(2.5mm/1条・1.5mm/1節)繩文で、両者とも縱回転施文である。

口縁部文様帯は繩文施文後に2本1組の粘土紐貼り付け→粘土紐に沿う3条のミガキ状沈線→隆線上の仕上げミガキという工程となっている。したがって、隆線は断面凸状で、両端が下がり幾分丸みを帯びる部分もある。

胴部文様帯は繩文施文後に沈線で文様を描いている。沈線の新旧関係が判明する部分でみると、頸部沈線→2大区画下垂線・曲流渦巻沈線文→2細分区画線→連絡線・下垂劍先渦巻文となっている。沈線は3条1組が原則で、部分的に2条1組がある。

また、沈線間・上面には軽いミガキが加えられ、沈線による粘土の捲れをオサエしている。部分的に繩文を磨り消している場合もある(拓本参照)。

内面 口縁部～頸部は丁寧な横ミガキ、胴部は綱のミガキで、器面は平滑である。

胴中央部から胴上部に幅約2cmの帯状に続く大波状の暗黒褐色焦吸着痕がある。これに対応する外面はにぶい橙褐色～灰褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面は暗褐色～褐色をしている。

胎土は細かな砂粒を含むシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)が目立つ。石英・長石など

もみられる。

関連事項

林謙作(1965.7)『日本の考古学Ⅱ 東北』図24-2に「田代島」・「大木8b式」として実測図が掲載されている。解説には「大木8b式(図24=2)には、典型的なキャリパー形の土器が出現する。……文様で大木8b式を特徴づけるのは渦巻きのそばにフ字状の棘がつけられることである。」とある。

資料54(第17図 図版6 追加土器箱①)

橋本記録 ラベル「P.535 仁斗田(貝)」「矢本町史 先史」図版29「純文中期 大木9式 仁斗田貝塚」「田代島仁斗田貝塚」「Fig7 純文中期大木9式の土器」

解説に「Fig7は口径12センチ、推定高11.5cmで、大木9式期の小形ツボである。体部に縱走する擦り消しの文様はFig6と共に通しているが、曲線の退化したものがあると口縁に6個の花弁状突起の配列があるなどや手の込んだ土器である(実存部約2分の1)。」とある。

現状 高さ11.4cm・最大径(口縁部)12cmの深鉢で、底部を欠いている。口縁部突起が残るのは1カ所で、大部分が破損している。口縁部は4カ所で確認でき、胴部は多くが残る。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁部には渦巻文による突起がある。口縁部から胴部は内湾気味に外傾する。

文様構成 縱位渦巻□文と△文が交互に配置され、渦巻上部は突起状になっている。口縁～胴部における文様配置によって、6単位の文様構成であることがわかる。渦巻文の回転方向は、時計回りと反時計回りがそれぞれ3個ずつである。△文内には単節繩文が施されている(展開図参照)。

文様表現技法 縱位渦巻□文は、渦巻部分が隆起線で、その他は幅広の沈線となる。

隆起線は緩の渦巻状に粘土紐を貼り付け、ナデ状ミガキをえたもので、その断面は三角形状をしている。垂下した隆起線は高さを緩やかに減じ、沈線の肩と一体となる。

△文の沈線は幅広で浅い。内部に施された単節繩文(RL:4.5mm/1条・3mm/1節)の周縁を強くミガ

キ消している。

内面 突起・口縁部は軽いミガキで整えている。胴部は斜めの筋状痕跡を残すナデと軽いミガキとなっている。

焼成・胎土 焼成は普通で指で、彈くとコンコンという音を発する。外面は暗褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)・金色雲母細片などを含む。

資料55(第17図 図版6 土器箱②)

橋本記録 筆記「P.540 仁斗田 S」台帳「P540 仁斗田 大木9」「矢本町史 先史」図版32「純文中期 大木9式 仁斗田貝塚」

現状 高さ18.6cm・口径(推定20cm)・最大径(頸部:推定21.2cm)・底径6.0cmの深鉢で、残存するのは口縁(1/4)～胴下部(1/2)と底部である。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁部は内湾する大波状(3波に復元)で、肩が張り、底部に向かってすぼまる深鉢である。胴部は内湾気味に外傾する。

文様 頸部に緩やかな波状の隆帯が巡り、口縁部は無文となっている。胴部には縦に長い△文が並列し、部分的残存も含めると7個まで確認できる。

頸部隆帯は断面隅丸台形状で、その下に接続させて△文が垂下する。△文は幅広(約1cm)の沈線(△文頂部が深く、下部に向かうに従って浅くなる)で描かれ、内部に単節斜繩文(LR:3mm/1条・2mm/1節)が縱回転施文されている。隣接する△文間に紡錘形沈線の配された部分もある。

口縁部・頸部隆帯は横、△文の沈線・△文間無文部は文様に沿った強いミガキが加えられている。底部にもミガキがみられる。

内面 口縁部～胴部には横・斜めの器形に沿ったミガキが加えられているが、胴上部には△文の沈線に対応する位置に(押圧による)膨らみが認められる部分もある。底部は横のミガキである。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面は上半が暗褐色、下半がにぶい橙褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・黒色破

碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

資料56(第17図 図版6 土器箱⑨)

楠本記録 ラベル「P537 仁斗田 S」台帳「P537

仁斗田 大木9」「矢本町史 先史」図版30「縄文中期 大木9式 仁斗田貝塚」「田代島仁斗田貝塚」「Fig8 縄文中期大木9式の土器」

解説に「Fig8は推定高15.5cmのツボだが文様の構成はFig6と変わらず時期も同様である。この土器の特徴は中間のクビレが強いことと口縁の張り出しの大きいことだが、器形の妙は別として安定度に欠け実用性に乏しいといえよう(実存部約5分の1)。」とある。

現状 高さ15.4cm・口径(推定15.6cm)・最大径(頸部:推定16.4cm)の深鉢で、残存するのは口縁～胴部の1/4である。破損部分は復元補修してある。

器形 胴中央部でくびれ、上半部・下半部とも内湾しながら外傾する。

文様 「縦長の△文」と「縦位格円文+△文」を交互に配した文様で、2組分まで確認できる。

これらの文様は沈線(幅約6mm・深さ1.0-1.5mm)で描かれ、内部に単節斜縄文(RL多条撚り:3.5mm/1条・1.5mm/1節)を継回転施文している。

沈線及び文様間の無文部は丁寧なミガキが加えられ、光沢が生じている。

内面 口縁部からくびれ部までは丁寧な横、下半部は軽い横・斜めのミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は褐色～暗褐色である。

胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)などを含む。

資料57(第17図 図版6 土器箱⑩)

楠本記録 ラベル「P538 仁斗田(貝)」台帳「P538

仁斗田 大木9」「矢本町史 先史」図版28「縄文中期 大木9式 仁斗田貝塚」「田代島仁斗田貝塚」「Fig6 縄文中期大木9式の土器」

解説に「Fig6は大木9式のもので口径18cm、推定高23センチのツボである。土器の全面につけた縄文をヘラ先などで部分的に擦り消し沈線で輪郭を

とりいの文様を交互に配したものは、Fig5の渦巻文を省略した際継走る区郭線を图案化したものと考えられている。このようなモールス符号状の文様をもつ大木9式期の土器は仙台湾から三陸一帯にかけて広く分布し量も多い(実存部約3分の1)。」とある。

現状 高さ23cm・最大径(口径)18.5cmの深鉢で、胴下～底部を欠いている。破損部は復元補修してある。

器形 口縁部が軽く外反し、胴部中央に膨らみを持ち、底部に向かってすぼまる。

文様 全体に「縦長の△文」と「縦位格円文+△文」を交互に配した文様が繰り返されている(5組)。

文様は浅い沈線(幅約5mm・深さ1mm)で描かれ、内部には単節斜縄文(RL:5mm/1条・2.5mm/1節)が継回転施文されている。

沈線及び無文部には器形・文様に沿ってミガキが加えられ、施文された縄文の周縁にも及んでいる。

内面 口縁～上半部は横のミガキ、下半部は縦・斜めの軽いミガキが加えられている。

胴中央部以下には灰暗黒褐色の焦吸着痕がみられる。対応する外面はにぶい橙褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。外面は暗黒褐色・暗褐色～にぶい橙褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)・長石などを含む。

資料58(第17図 追加土器箱⑤)

楠本記録 「田代島仁斗田貝塚」「Fig4-2 縄文前期の土器片」「阿部勇雄氏蔵」

解説に「阿部勇雄氏資料中(地番165出土品)にも前期初頭のものが二例あり、胎土に纖維を混入するなど3に共通しているが、時期的にはやや下り大木1式期に比定し得る特徴を有している(Fig4-1-2)。」とある。

形状と技術的特徴

現状と器形 口縁～頸部破片で、突起上部を欠く。

口縁部から頸部に緩やかに屈曲して外傾する深鉢とみられる。

文様 口縁部(突起を含む)に単節斜縄文(LR多条

撚り: 4.4cm / 1条・1.8cm / 1節) を1段、その下に数段の(3段まで確認できる)「の」字形ループ文を横回転施文している。口唇部は隅丸方形状で、軽いミガキが加えられている。

内面 摩滅しているが、器面上にオサエ状の凹凸を残し、繊維痕が顕著にみられる。

焼成・胎土 焼成は普通で指で彈くとコンコンという音を発する。外面は暗褐色、内面は淡い灰褐色をしている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・漆黒色破碎石片などがみられる。また、繊維を含む。

関連事項

類似資料は仙台市三神峯遺跡第II層土器に含まれている。口縁～胴下部の大破片で、突起を持つ器形、口縁部外面の斜縄文・ループ文の形状・施文配置が共通する。この三神峯第II層土器は「ひととまとまりの土器群として大木1式土器に比定されるものとして位置づけておきたい」とされている(白島良一: 1974.11 第6図1)。

石巻市宝ヶ峯遺跡(挿図1参照)

遺跡の位置 石巻市北村字前山(旧河南町)

旭山丘陵の北東端部中央小丘陵(標高約60m)に立地する。前面は前谷地低地となっている。

宝ヶ峯遺跡の名称は明治43年の坪井正五郎による「寶能峯」に始まる。その後、大正期の松本彦七郎による「陸前國寶ヶ峰遺蹟の分層的小發掘成績」(大正8年)を経て、昭和32年の伊東信雄による「宝ヶ峯遺跡」および「宝ヶ峯式」の設定(『宮城県史1』)によって遺跡名として定着することになった(志間・桑月: 1991.11)。

資料59(第18図 追加土器箱③)

楠本記録 筆記「宝ヶ峯」

概要 深鉢と推定される厚手の胴部破片である。外面はオサエ痕の残るナデで、内面上・下に横位線刻、その間に綫の線刻が数条ある(拓本参照)。

焼成は普通で、指で彈くとぶいコンコンという音を発する。胎土はシルト質粘土で、石英の他、漆黒の破碎石片を少量含む。

関連事項 深鉢内面に線刻文様がみられるものは、黒川郡大和町金取遺跡2層から同一個体とみられる破片2点(第18図3・5)、刈田郡蔵王町二屋敷遺跡GO56区第2層から深鉢1点(第48図3)が出土している。いずれも、格子状線刻で、後期前葉の南境式土器に伴うものである(小野寺祥一郎: 1980.3 加藤・阿部・小篠: 1984.3)。

資料60(第18図 図版7 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「P105 宝ヶ峯」

形状と技術的特徴

現状 高さ2.5cm・口径8.0cmの蓋で、蓋部の約1/2、摘みの一部を欠く。破損部は復元補修してある。器形と概要 円盤状の蓋部に、隅丸台形の摘みが付く。蓋部外面には单節斜縄文(RL 多条撚り: 3.3mm / 1条・1.2mm / 1節)が周縁に沿う形で施文されるが、羽状に見える部分もある。この斜縄文は摘み部裾の高まりに及んでいることから、摘み貼り付け後に施文されたとみられる。

摘み部・蓋口縁(唇)部は縄文施文後、ミガキ仕上げがなされている。蓋内面は周縁に沿ってミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色～褐色で、黒ずんでいる部分もある(写真参照)。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・漆黒色破碎石片の細粒が多い。

関連事項

蓋は中期末から後期前葉に盛行する(丹羽・阿部・小野寺: 1982.9 第90図)。その内で円盤状のものは、二屋敷遺跡で後期前葉には存在する。ただ、摘みの判明するものは橋状である(加藤・阿部・小篠: 1984.3 第320・321図)。本資料のように、円盤中央に幾分厚みのある扁平な台形状摘みの付くものは、これらより少し新しいかも知れない。斜縄文を主体とし、一部に羽状縄文の兆しが感じられる。以上から、後期中頃かとみられる。なお、宝ヶ峯遺跡で確認されている縄文土器は後期前葉から晩期前半である(志間・桑月: 1991.11)。

資料61(第18図 図版7 土器箱③)

楠本記録 筆記「P97 宝ヶ峯」台帳「P97 宝ヶ峰
有耳把手つき」(資料52と重複登録)

『矢本町史 先史』図版56「繩文後期 宝ヶ峰式?
宝ヶ峰遺跡」

形状と技術的特徴

現状 高さ35cm・口径9.4cmで、蓋と推定される。
約1/3が残存し、復元補修してある。

器形と概要 半偏円状で、口縁部は沈線が巡る。口
縁部は少し厚手で、隅に丸みを持つ。側面上部に半
環状の把手状摘みが付き、外側は磨いて仕上げられ
ている。内側は剥落が著しいが、ミガキの痕跡が一部
に残る。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンと
いう音を発する。外側にはぶい暗褐色～淡褐色をし
ている。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、長石・石英・
黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

関連事項

資料60でも述べたように、中期末～後期前葉には
蓋が盛行する。その中には断面半偏円状のものもある。
菅生田・二屋敷両遺跡においては、左右に2個一対の
摘み孔や橋状摘みをもつものが知られている。
本資料も、それらの系譜上に位置する可能性はあるが、確定はできない。

資料62(第18図 図版6 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「P100 宝ヶ峯」「矢本町史 先
史」図版57「繩文後期 宝ヶ峰式 宝ヶ峰遺跡」

形状と技術的特徴

現状 高さ11.3cm・最大幅(注口部を含む)16.1cm・
胴径12.7cm・底径3.2cmの注口土器で、口縁上半の一部
を欠くが、ほぼ完形である。破損部は補修してある。

器形 口縁部は2段構成で、上半が軽く外反し、下半
が内湾する。胴部は偏球形で、中央上部に注口部
が付き、下部に沈線を伴う段を持つ。底部は小さく、
僅かに上げ底となっている。

注口部は、斜め上を向く。口は玉縁状で、付け根
は大きく膨らむ。

文様帯 脇部に沈線(幅2~3mm)で縁取られた弧状
入組帶状文(幅約1.5cm)が横方向に連続して描かれ
る(4組)。その始点と終点は、注口部付け根左側面
下部と注口部中心線下の胴下部の段(沈線)である。
帶状文には單節斜縫文(LR:3mm/2条・1mm/1節)が
弧状文様に沿って充填施されている。

沈線上面及び無文部分は、文様・器形の変化に沿っ
て丁寧なミガキ仕上げが加えられている。沈線上面
のミガキは粘土の捲れを鎮め、縫文帯周縁に及ぶ部
分では施文端部を磨り消している。

内面 口縁上半部は外面から続く横のミガキである。
頸部は稜線状をなすが、口縁部の上半・下半の境
目にには顯著な粘土合わせ目が見られる。胴～底部
の詳しい観察は困難だが、平滑になっていることは
確認できる。

注口部は胴中央上部に斜めに穿孔し、外面に垂ぎ
足すように粘土を貼り付けて製作している。内面の
円孔下部には穿孔時の粘土捲れが残っている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコ
ンという音を発する。外側は橙褐色～褐色で、やや
広い範囲にわたって、暗黒褐色の黒斑がみられる。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、多量の石英と
黒色破碎石片(半透明・不透明)などがみられる。

関連事項

このような器形的特徴をもつ注口土器は、宝ヶ峯
遺跡(斎藤報恩会資料)の後期前葉(宝ヶ峯式)に多
いが、その中に同様な文様は今の所見いだすことが
できない(図版19・20 第6・7図 志賀・桑月:
1991.11)。

器形・文様が類似するものとして、気仙沼市田柄
貝塚CM41区28層から破片資料ではあるが、2段構
成の口縁部(第25図17)、「連続弧状入組帶状文」と
みられる胴部(第26図12:「タスキ掛け状入組文」と
している)、注口土器胴部(第26図19)各1点が出土し
ている。CM41区28層土器群は田柄貝塚第Ⅲ群土器
(第Ⅲ-1層)に含まれる資料である。第Ⅲ群土器の
考察で、類似資料として宝ヶ峯式・宮戸Ⅱb式をあ
げ、関東地方の加曾利BⅡ式段階のものと考えてい
る。

ただ、注意しておきたいのは資料62に似た「連続

弧状入組帶状文」は、田柄貝塚第IV群土器(第V層)

まで一部(深鉢:第34図3)残ることである(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3)。

福島県伊達郡国見町川原遺跡第1遺構(溝状)第IV層・第V層上面から多量の後期中葉土器が出土し、その内容(注口土器・壺・鉢・深鉢の器形・文様)は、宝ヶ峯遺跡(斎藤報恩会資料)の後期中葉土器群と共通性が高い。その中には、上下2段の「連続弧状入組帶状文」を持つ注口土器(図版編26-1)が含まれている。報文では「関東での加曾利B II式、東北での宮戸II b式あるいは宝ヶ峰式に比定されよう」としている(目黒・大越:1975.3)。

したがって、楠本が資料62を宝ヶ峯式土器としているのは妥当な位置づけと思われる。

資料63(第18図 図版6 土器箱)

楠本記録 ラベル「P101 宝ヶ峯」 台帳「P101
宝ヶ峰 加B」『矢本町史 先史』図版53「縄文後
期 宝ヶ峰式 宝ヶ峰遺跡」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.2cm・口径13.5cm・台高4.5cm・台径6.7cmの台付き皿で、口縁部の1/4、台部の1/3を欠いている。破損部分は補修してある。

器形 浅い皿状の身と断面台形状の脚部からなる高坏状の台付き皿である。接合部外面には刻み目凸帯が巡る。

皿部 口縁部の内外面には刻み目帯があり、口唇部にミガキが加えられている。胴部外面は沈線に画されて羽状縄文、内面は帯状の段に隔てられて斜縄文が施されている。内面中央部は無文である。

刻み目帯は連続する継の刻み目を入れたもの(6刻/2cm)で、外側は細い帯状(幅約4mm)、内側はやや幅の広い帯状(約8mm)である。

縄文は細かい単節斜縄文(2mm/1条・1.5mm/2節)である。外面の羽状縄文はLRとRLを上・下交互に、内面の斜縄文はLRを横回転施文したものである。

工程的には、外面の刻み目帯・羽状縄文は沈線(幅約3mm)に、内面の刻み目帯・斜縄文は帯状に磨かれた段(幅約8mm)によって切られている。内面中央部はミガキが加えられているが、底面付近は摩滅して

いる。

台部 上・中部は無文で下部に沈線が巡る。沈線と台下端の間は幅約1.5cmの縄文帯となっている。

縄文帯には細かい単節斜縄文(LR・RL)を左右羽状に横回転施文している。無文部と沈線には仕上げミニガキが加えられている。

皿・台の接合部外面には刻み目凸帯(約6mm)が巡り、上・下端はミガキ状沈線・ミガキによって縁取りられている。なお、接合部の底部は分厚く、皿部と台部の器厚を合わせたものとなっており、別作りの可能性がある。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。内外面とも褐色~暗褐色をしており、外面から口縁部の一部にかけて暗黒色の黒斑がみられる。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)が目立つ。

関連事項

『縄文土器大成後期』図版81に「台付き浅鉢 宝ヶ峯式 宮城県宝ヶ峯遺跡」として掲載されている。解説に「宝ヶ峯式の時期になると器形分化がいちだんと進み、台付土器・壺の割合が多くなる。図81・82・83は小型品で、この時期の特徴をよく示している。」とある(執筆者:後藤勝彦)。

類似資料としては宝ヶ峯遺跡斎藤報恩会資料の第4図34(図版17-32)の台付浅鉢(後期中葉)がある。しかし、接合部外面が凸帯ではなく沈線であったり、内面が帯状段ではなく沈線である。台部の縄文帯構成にも違いがある。資料63と較べると、器形・文様とも簡略である(志間・桑月:1991.11)。

田柄貝塚CL47区3a層から皿の口縁~胴部破片が出土している(第79図11)。刻み目帯が口縁部外面に2段あり、口縁部内面は段状沈線に画され、胴部に細かい縄文が施文されている。細部の配置に相違はあるが、共通性がある。CL47区3a層は第III群土器(第Ⅲ-1層)の主体をなすもので、宝ヶ峯式・宮戸II b式(関東地方の加曾利B II式段階)と考えられている(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3)。田柄例は破片ではあるものの、層位的な資料である。

これらの中でも、資料63は器形・文様配置が整った、

技術的・造形的に優れたものと言えよう。

資料64(第18図 図版7 土器箱⑩)

楠本記録 ラベル「106」

台帳「P106 宝ヶ峰 安行」

形状と技術的特徴

現状 高さ6.3cm・径7.4cm・底径2.4cmである。口縁上部は一部を残し破損している。注口部も欠く。破損部は復元補修してある。なお、復元注口部を入れると、幅8.5cmとなる。

器形 袖珍土器とも言えるほどの、小型の注口土器である。口縁部は内傾し、胴部は丸みを持った算盤玉状をしている。注口部は胴上半下部を斜めに穿孔し、外面に貼り付けたものである。

外面 口縁部には2条の沈線(幅約1mm)が巡らされ、その間(約4mm)に不整円形の刺突(径約1mm)が連続して加えられている。

胴部は口縁部下端の沈線と胴部下端の沈線によって、上下が画され、その中に文様が描かれている。胴部中央には、注口部を中心として対称的な位置に、3個の貼瘤(半円形)がほぼ等間隔で配置され、これらを中心として並行弧状沈線を組み合わせた文様が描かれている。この多条連弧文は結束部で方向を斜めに変えながら胴部全体に展開している。

器面の保存があまり良くないが、沈線を引いたときの粘土のまくれが見られず。上面が平滑なことから、胴部全体に軽いミガキが加えられていたと思われる(貼瘤下端にはミガキ痕が残る)。

内面 口縁部は軽いミガキ、胴部はナデ状のミガキで、全体的に滑らかであるが、粘土紐積み上げ痕を残す部分もある。

焼成・胎土 焼成は普通で指で彈くとコンコンという音を発する。内外面ともにぶい褐色で、胴下部には黒斑がある(図版参照)。

胎土はシルト質粘土で、長石が多く、黒色破碎石片や石英も含む。

関連事項

楠本政助は台帳に「安行」と書いている。これは関東地方の「安行式土器」(後期後業)に併行するものという意味であろう。「矢本町史」では「金剛寺式」

を用いている(楠本政助:1973.5)。金剛寺式とは「宮城県史1」で「よい単独遺跡がないので、名取郡名取町高館金剛寺貝塚の名をとって、一応金剛寺式と呼んでいる。」としたものである(伊東信雄:1957.3)。

資料64と類似する土器群は丸森町清水遺跡A地點の遺物包含層(「僅か数種厚さの泥炭化した地層」)で、まとまって出土したことが報告された(志間泰治:1960.9)。その中に小型の注口土器があり、「疣状の高まり…箇の葉を図案化したような沈線文様がみられる。」ことを指摘している(図3-9)。基本的に共通する文様は図3-1・2の深鉢にもみられる。これらの土器群について志間は「宝ヶ峯式より金剛寺式に推移する、両方の要素を中に含みもつ過渡的存在の土器ということがいえるかも知れない。…ここでは問題を提起するにとどめ、ご教示を仰ぐ次第である。」とした。その後、志間は「宝ヶ峯」において、この種の土器群を後期後葉に含めて報告している(志間・桑月:1991.11)。これは、後期後葉土器群の初期(古相)という理解であろう。田柄貝塚第IV群土器(第V層)も、この時期のまとまった層位の資料である(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3)。

一方、この時期の土器群に対して「西ノ浜式」とする見方もある(後藤勝彦:1962.6 関根達人:1993.9)。

資料65・66(第18図 図版7 土器箱⑪)

楠本記録

資料65 スタンプ「P109」 筆記「宝ヶ峯」

台帳「宝ヶ峯 袖珍土器 表探昭334」

資料66 スタンプ「P112」 筆記「宝ヶ峯」

台帳「宝ヶ峯 袖珍土器 (四足の痕あり)」

形状と技術的特徴

資料65の概要 高さ2.2cm・径4.2cmで、歪みのある浅い塊状をしている。底部は分厚いが、内湾する胴部から口縁部はやや薄く、口縁端は丸く収まっている。内外面ともオサエ・ナデ仕上げであるが、内面の底部上端に積み上げ痕が部分的に残っている。

焼成は普通で全体に桃・橙褐色をしており、胴部下端から底部にかけて黒斑がある。胎土はシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明・不透明)を含む。

資料66の概要 高さ1.7cm・長径4.3cm・短径3.1cmで、歪みのある浅い皿状をしている。「資料65」同様、底部が分厚い。歪みは口縁部を中心に顯著で、オサエ・ナデもやや粗雑である。内部の底部上端に積み上げ痕が一部残っている。この資料の特徴は底部周縁四隅に不整円形の脚剥がれ目(4個)が顯著に残ることである。底が丸く、石皿を寫したかの親を抱かせるが、木製容器や土器そのものにモデルがあったのか、今のところ確定できない。

焼成は普通で、褐色～暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英・黒色破碎片(半透明・不透明)を含む。

関連事項

資料65・66は特に小型で、作りも簡略である。しかし、製作技法の基本は同じである。他の器物を縮小して忠実に写している資料64などとは異なり、簡略化が著しい。宝ヶ峯遺跡の斎藤報恩会資料でも袖珍土器(後期～晚期)とし、忠実でそれよりやや大きい小形土器(後期～晚期)と区別しているが、その境が難しいものもある(志間・桑月:1991.11)。これまでも、中期末から後期初頭、後期前葉を主体とした菅生田遺跡(丹羽・阿部・小野寺:1982.9)・二星敷遺跡(加藤・阿部・小徳:1984.3)などの報告では両者を実用性の有無という観点を含めて袖珍土器として括して扱ってきた。今回も、存在の指摘に留めざるを得ない。

資料67(第18図 図版7 土器箱③)

楠本記録 ラベル「P90 宝ヶ峯」

台帳「P90 宝ヶ峰 (コウロ形) BC」

形状と技術的特徴

現状と器形 高さ5.3cm・最大径(胴部)11.5cm・底径4.5cmで、身はやや扁平な算盤玉状をしており、台は欠失している。口縁部は隅丸方形(内法5.9cm)、胴部は円形をしている。

基本的な器形的特徴は香炉形土器や注口土器胴部と共に通性がみられる。

外面 上半部は口縁部突起帯・彫込文様帯・胴中央部突起帯からなる。下半部は單節斜縫文が施文され、台接合部は不整縦円形に剥がれている。

口縁部突起帯は正面・背面が大玉瘤状突起、左右側面が小玉瘤状突起の配列となっている。

張り出した胴部中央には6単位の小玉突起群がある。この小玉突起群は2個一対の突起3組を弧状(山形)に配したものである。

口縁～胴部中央間には変形三叉状文が彫り込まれている。彫り出された部分は偏円形の玉を抱く変形蛇行文で、肩は丸みを持つ。これが主文様として横に繋がりながら展開する(3単位)。

沈線状彫込や玉・蛇行文にはミガキが加えられ、半立体的文様となっている。口縁部・胴中央部の玉瘤状突起にもミガキが加えられている。

胴下部の單節斜縫文(RL:3mm/1条・1.6mm/1節)は器形に沿って同心円状に横回転施文され、胴部中央突起下面にも及んでいる。

内面 内面はナデ状の粗いミガキである。内傾する上半部には、積み上げ痕・ナデツケ状痕跡も残る。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。器面はにぶい黄橙褐色で、黒斑がみられる。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石が多く、黒色破碎片(半透明・不透明)もみられる。

関連事項

楠本台帳の「BC」とは晩期大洞BC式土器のことと考えられる(山内清男:1930.5)。

上半部文様が大洞B式(山内第1図「B」)に似るものとの、文様の主体が三叉文(陰刻)というよりは玉抱蛇行文(陽刻)とみられる。また、口縁部・胴中央部の玉瘤状突起が顯著なことがあげられ、文様・技法の点で大洞BC式的である。層位的に検証できる資料があると良い。

資料68(第18図 追加工器箱③)

楠本記録 筆記「宝ヶ峯」

形状と技術的特徴

現状・器形 胴下部から台上部で、その1/2(胴下部)～2/3(台上部)が残る台付鉢(皿)である。

鉢(皿)部 胴下部は直線的に開くように外傾する。外面に2条の並行沈線が巡り、外面は丁寧に磨かれている。内面も磨かれているが、摩滅している。

台部 内湾する台上部は、外面に上下2段の浮彫文様がある。上段は深いX字状彫込みの間に玉やそれを囲む文様が陽刻され、それが横方向に繰り返すように展開する。

下段は斜めS字状の陽刻が連続し、それぞれの間に円形の穿孔(径5mm)が加えられ、内面に粘土の捲れが生じている。

陽刻文様は肩に丸みを持つか、断面が半円形で、ミガキが加えられている。

底部と台部の接合 底部外面は指頭状のオサエで、台とはナデツケで接合補強されている。底部周縁には台の剥がれ目が弧帯状に認められる。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも黒褐色で、台の一部が褐色をしている。

胎土は均質なシルト質粘土で、細かな石英・黒色破碎石片(半透明)状のものを少量含む。

関連事項

このような台付鉢(皿)に類似する資料は大崎市(旧田尻町)中沢貝塚I区X層(第16図版12および付図)から出土している。I区VI層～XV層は「山内編年の大洞B-C式、芹沢編年の「雨滝II式」にあたる土器が出土した」と述べ、晚期2期としている(須藤隆他:1984.9)。

資料69(第18図 追加土器箱③)

楠本記録 スタンプ「P107」筆記「宝ヶ峯」

形状と技術的特徴

鉢の口縁部突起破片である。扁平な作りで、外面は浮彫状文様があり、内面は無文である。

外面中央の孔を中心にC字状浮彫文様、その左右には2個一対の扁平な玉瘤状小突起が配されている。

焼成は普通で、淡い暗黒褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片などの細粒を含む。

関連事項

このような装飾突起をもつ鉢形土器は、岩手県八幡平市(旧安代町)曲田I遺跡E III-011住居跡などから多量の土器と共に出土し(212-223-224など)、全体的な特徴から縄文時代晩期前業とする(鈴木隆

秀他:1985.2)。

林謙作はこの曲田I遺跡出土土器群を比較検討し、大洞B-C式にあたるという(林謙作:1993.4)。

資料70(第18図 図版7 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「P94 宝ヶ峯」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.6cm・最大幅(注口部を含む)17.3cm・胴径15.3cmの注口土器で、注口部と口縁・胴部の1/4を欠く。破損部は復元補修をし直した。なお、底部に剥離部分があるが、これは現状のままとした。

器形 口縁～胴部は算盤玉状で、上半部が内反気味に内傾する。下半部はやや深く、底部は丸い。

文様 口縁部に1条の沈線、胴部中央に凸帯状の浮彫文様帯が巡り、その中央に注口部が付く。凸帯状浮彫文様帯の上下にも沈線が巡る。

胴部上半(口縁部沈線と胴中央部の間)には半浮彫による横長のX字状文が連続する(9個)。X字状文間は細長い斜めのS字状文である。

注口部は両側から偏梢円形状の浮彫隆線に包み込まれ、その両脇に2個一対の玉瘤状突起が配置されている。玉瘤状突起は胴部の両側面・背面にも配置されている(合計5カ所)。玉瘤状突起も半梢円形状の浮彫隆線に包まれ、その両側は2段の細長い横位浮彫隆線の上下組み合わせ文様で埋められる。

胴部下半には、注口部の下にミガキ沈線によって半浮彫風に縁取られたX字状雲形文があり、内部に細かな斜綱文が充填施文されている。この他は丁寧なミガキ仕上げが加えられている。

注口部は破損しているが、胴部中央に斜めに丸く穿孔しており、外面に貼り付けたものと推定される。内面 器形に沿ってミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも淡い暗褐色で、外面に黒斑がみられる。

胎土はシルト質粘土で、漆黒破碎石片などを含む。

関連事項

本資料と器形・文様が共通する注口土器の類例は、今のところわからない。文様的には大崎市中沢貝塚I区V層の鉢(第23図12-第16図版10-PL21-7)、

黒川郡大和町摺萩遺跡 CJ50区65c 層深鉢(第66図6-7)などはやや似た感じがする。中沢目例は晩期Ⅱ期(須藤隆他:1984.9)、摺萩例は晩期前葉大洞BC式期(阿部・柳沢他:1990.3)とされている。細部に問題を残す所があるかも知れないが、今後の資料に注意したい。

石巻市沼津貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 石巻市沼津字出外

京ヶ森から西(稻井低地)に半島状に延びる丘陵部(標高25~15m)に立地する。貝層は北・南斜面を主体に広く分布する。

明治末~昭和初期に毛利統七郎・遠藤源七による発掘調査があり、骨角器をはじめとする多くの遺物は昭和38年に重要文化財に指定され、現在東北大蔵となっている。

また、沼津貝塚は昭和47年10月21日に国指定史跡となった(石巻市教育委員会:1976.3 宮城県教育委員会:1978.3 藤沼・小井川他:1989.3)。

資料71(第19図 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「陸前沼津 昭32.8」

スタンプ「P8」 筆記「沼津32.8」

現状と概要

現状 高さ3.5cm・台径7.8cmの台付き土器(鉢か?)の底~台部である。残存上面は平坦で軽いミガキが加えられ(底部)、その周縁は環状に磨り減らされている(後世)。

概要 台部は僅かに外傾し、外面上端に沈線が巡る。その下に単節斜縄文(LR・RL: 2.5mm/1条・1.5mm/1節)を2~3段横回転施し、羽状縄文としている。内面は軽いミガキで、底部にナデツケ痕が残る。焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・白色石片の他、漆黒破碎石片細粒などがみられる。

関連事項

後期中葉の宝ヶ峯式土器には台付き鉢が良く見られ、斜縄文や羽状縄文が施文されている(伊東信雄:1957.3 志間・桑月:1991.11)。田柄貝塚第Ⅲ群土器

(第Ⅶ-1層)では、台部は必ずしも明確でないが、施文される縄文には両者がみられる(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3)。

資料72(第19図 図版7 土器箱⑬)

楠本記録 ラベル「P2 沼津」 筆記「沼津32.7」

現状と概要

現状 高さ4.0cm・口径11.7cm・底径7.9cmの浅鉢で、口縁~胴上半部の2/3を欠いている。破損部分は補修してある。

概要 口唇部はやや平らで、口縁・胴部は内済気味に外傾する。底部内面は中央部が僅かに高く、外側も僅かに丸みを持つ。

内外面とも丁寧なミガキが加えられ、胴部外面には光沢がある。底部内面には鱗状のひびが広がる。

焼成は普通で全体に暗黒褐色をしている。胎土はやや均質で、石英・黒色破碎石片細粒を少量含む。

関連事項

丁寧なミガキ仕上げの浅鉢は摺萩遺跡V・VI期(大洞C1・2式)にもある(阿部・柳沢他:1990.3)。しかし、口縁・胴部の微妙な屈曲、底部の作りにやや相違がある。むしろ、器形細部は浮彫文様の浅鉢に近いともみえるが、時期の確定は難しい。

資料73(第19図 土器箱⑬)

楠本記録 ラベル「P4 沼津」

現状と概要

現状 高さ8.4cm・最大径(胴部中央)10.6cm・底径4.2cmの壺で、口縁・頸部を欠く。胴部は1/4を破損しているが、この部分は補修してある。

概要 胴部は算盤玉状の球形で、外表面はやや粗い縦・横方向のミガキが加えられている。底部には木葉痕がある。内面には横・斜めのナデやナデツケ痕があり、胴中央部には粘土組積み上げ痕を残す。

焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)・石英細粒などを含む。

関連事項

この器形の壺は後期か晩期と思われるが、確たることはわからない。参考までに述べると、角田市老

が崎遺跡第3層から出土した「無文の小壺型土器」(第5図の39)は、宝ヶ峯式土器と併出したと報告されている(志間泰治:1964.3)。この壺は資料73に較べ僅かに小さいが、器形などの点で似ている。

資料74(第19図 追加土器箱③)

楠本記録 筆記「P6 沼津 昭32-9」

現状と概要

現状 高さ3.0cm・口径6.7cm・台径4.2cmの小型台付き皿で、口縁部の1/4、台部の1/3を欠いている。口縁部は補修してある。

概要 盤は内面が丸底で、口縁部から口唇部は丸く整えられている。内面はナデで滑らかである。外面はナデとオサエ痕がみられる。台部は分厚い底部周縁に粘土を貼り付け、上げ底状にしたものである。

焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも橙褐色から淡褐色をしている。器壁内は暗褐色で、火が通っていない。

胎土は均質なシルト質粘土で、石英・黒色漆黒破砕石片細粒を含む。

関連事項

形状は盃に似る。時期等についてはわからない。

資料75(第19図 追加土器箱③)

楠本記録 筆記「沼津 昭32-7」スタンプ「P111」
現状と概要 高さ2.2cm・口径3.9cmの小型丸底の碗で、内外面に指頭によるオサエ痕が顯著に残る。

焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。内外面ともにぶい褐色で、外面に黒斑がある。

関連事項 資料65に似るが、製作はさらに粗雑である。類似するのは宝ヶ峯遺跡の「後期～晩期 袖珍土器」である(志間・桑月:1991.11)。

資料76(第19図 図版7 土器箱⑨)

楠本記録 ラベル「P86 沼津」

台帳「P86 沼津 BC」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.9cm・頸部径9.2cm・最大径(胴中央)16.4cmの注口土器で、口縁部が立ち上がり部分から欠け、胴部の2/3が残っている。胴破損部は復元補修して

ある。

器形 脊部は算盤玉状をしている。口縁部は「く」の字状に屈曲して立ち上がり、注口部は胴部の破損側に位置すると推定される。

文様 脊部上半に幅の広い、胴中央部に幅の狭い浮彫文様帯がある。これらは2条の沈線と1条の浮彫隆線によって画されている(頸部・胴上半下端・胴中央下端)。胴部下半はミガキ仕上げの無文である。

胴上半部文様帶には浮彫手法による横長の「X(K)」字状文が連続して繰り返される。上下の隙間に刻み目浮彫帯が配置される。

幅の狭い胴中央部の凸帯状文様帶には、浮彫羊歯状文が連続して繰り返される。

内面 頸部付近は丁寧なミガキが加えられ、光沢が生じている。胴部のミガキは、上半・下半とも粗いが、平滑化はなされている。また、胴部中央には粘土の合わせ目を観察することができる。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。外面と頸部内面は暗黒褐色をしている。

胎土はほぼ均質なシルト質粘土で、石英・黒色破砕石片(半透明・漆黒)の細片・粒を含む。

関連事項

同様な器形の注口土器は青森県杉沢遺跡の大洞BC～C1式土器にもみられる(藤沼邦彦他:2008.3)。文様として「X(K)」字状文の繰り返しは、大崎市中沢貝塚I区VII層の鉢(第23図12・第16図版10・PL21-7)に、羊歯状文も同区同層の深鉢(第23図4・第16図版8・PL7-3)などにみられ、「晩期2期の大洞BC式」としている(須藤隆他:1984.9)。

なお、「羊歯状文」は山内清男が大洞BC式の説明に「模型図」と併に示している(山内清男:1930.5)。

資料77(第19図 図版7 土器箱⑩)

楠本記録 筆記「P546 遠藤源七氏旧蔵」

台帳「P546 沼津 C1」

形状と技術的特徴

現状 高さ13.6cm・頸部径6.2cm・胴部径11.2cmの小形壺で、頸部・胴上半部が残存している。胴下半～底部は復元してある(遠藤源七によるものか?)。

器形 脇部が膨らむ壺で、頸部から口縁部に向かって「ハ」字状になる。頸部に4個の突起(斜S状刻が入る小突起2個からなる)が配置され、それらを弧状に結ぶ隆線(細隆帶)がある。

文様 肩部に3条の沈線が巡り、沈線間に単節斜縄文が施文される。脇部には浮彫手法による雲形文が左右反転対称に彫り出され、単節斜縄文がやや方向を変えながら文様に沿って施文されている。

これらの単節斜縄文はLR(1.5mm/1条・1mm/1節)の細かい縄文である。

彩色 外面は、破損部を除き赤彩が残っている。

内面 頸部で屈曲しナデ・オサエ痕がみられる。

また、頸部内面には部分的に赤彩痕がある。

焼成・胎土 烧成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。

胎土は均質なシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片細粒が少量確認される。

関連事項

この種の壺は摺薪遺跡16層下A層上面(198図2)で口縁～頸部が出土し、第V期(大洞C1式期)に位置づけられている。類似する文様は同期の皿などにみられる(阿部・柳沢他(1990.3))。

なお、この種の壺は大形と小形の両者にみられ、口縁部は受け口状になるものが多い。脇部は最大径が同中央に位置するものと、脇下部のものなどがある(藤沼邦彦他:2007.3・2008.3)。本資料は脇上半部の残存状況から、最大径が同中央に位置すると推定される。

資料78(第19図 土器箱⑧)

楠本記録 筆記「P545 遠藤源七氏復原」

台帳「P545 沼津 C1 遠藤源七氏旧藏」

形状と技術的特徴

現状 皿として復元してあったが、脇部下端と底部の接合に無理があったので、石膏を取り外し、クリーニングと接合の歪みを補正した。

口唇部の多くは欠けているが、口縁～脇部は1/4ほど残っている。底部は大部分残存するが、周縁は半分ほど欠けている。口縁・脇部と底部は接合しないが、およそその器形と大きさは判明した。

器形 口縁～脇部が外反する皿で、底部は平底で大きい。口縁部内外面に沈線が巡り、口唇部に小突起が巡る。底部外縁は丸く張り出す。高さ3.7cm・口径20.4cm・底径11.6cmと推定される。

文様 文様は脇部全体から底部外周に及んでいる。彫去部と削り出し部からなる浮彫文様である。

脇部には資料77と類似する雲形文が展開する。雲形文内部には細かな単節斜縄文(LR:2.4mm/2条・1.4mm/2節)が文様に沿って方向を変えながら充填施文されている。彫去部は丁寧なミガキが加えられ浮彫文様との境目は少し深めに縁取っている。

底面は外周を帯状に削り出し、向かい合う2カ所を弧状三角形にしている。この帯状部分には4カ所に楔形の彫去を入れ、その間に楕円・弧状の組合せ文様をミガキ沈線で描き、斜縄文を施文している(拓本参照)。

内面 丁寧なミガキ仕上げが施されている。

焼成・胎土 烧成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色で、外面は部分的に黒色をしている。

胎土は均質なシルト質粘土で、砂粒は少ない。僅かに黒色破碎石片・金色雲母の細片が確認される。

関連事項

この種の特徴をもつ皿は摺薪遺跡19層(第79図7・8:V期 大洞C1式期)や青森県杉沢遺跡「C-2V層中」(第87図郷土館11 大洞C1式土器)で出土している。杉沢遺跡例は器形・文様構成(脇部・底部外周)などの点で共通性が多い(阿部・柳沢他:1990.3 藤沼邦彦他:2008.3)。

資料79(第19図 追加土器箱⑨)

楠本記録 筆記「沼津」

形状と技術的特徴

現状 高さ4.8cm・最大径(脇部)10.2cm・台径6.4cmの台付き土器である。脇中央上部で割れ、脇中央～台部が残る。台部は縁の多くが欠けている。

器形 脇部は算盤玉状と推定されるが、脇下半部は内湾気味に外傾する。台部は上半部が直立気味で、下半部は「ハ」字状に外傾し、内面に稜がある。

脇部 脇部中央には2個一対の小突起がほぼ等間隔

で4組配置されている。この小突起は粘土を貼り付けて刻みもしくは刺突を加えたもので、丸みを持っている。小突起上にはミガキ沈線があるので、胴上半部には何らかの文様の存在が想定される。

胴下半部には單節斜縄文(LR:4mm/1条・3mm/1節)が横回転施文される。この縄文は小突起下面に及ぶが、胴部下端では台接合部のミガキによって、磨り消されている。

内面は胴下半～底部に軽いミガキが加えられ平滑になっているが、胴中央部の屈曲にはナツケ痕が顕著に残る。

台部 外面は丁寧な横のミガキ、内面は軽いナデで、底部にはナツケ・オサエ痕が残る。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面ともにぶい暗褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、黒色破碎石片・白色岩片などがみられる。

関連事項

胴部が算盤玉状で台の付く器形は晩期前半から中頃に多い。2個一対の突起は簡略化されているよう見える。内面胴下半部のミガキは、算盤玉状胴部が、口縁部で再び開く可能性も示す。種々の点で、類例を待ちたい。

資料80(第19図 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「P5 沼津」

形状と技術的特徴

現状 高さ6.3cm・最大径12.7cmの四脚付き土器である。胴下部～底・脚部の多くが残るが、2脚が付け根付近で破損している。現状は四脚付き鉢として、復元してある。

外面 胴部は円形に近いが、底部は隅丸方形で、四隅に高い脚が付き、その周りに1条の沈線が巡る。

脚間は2条の沈線で方形状に繋がれる。底部中央に沈線による円文を配置し、四脚と円文間を筋交い状に2条の沈線で繋いでいる。その後、外面は丁寧に磨かれている。

内面 内面は丸底状で、丁寧に磨かれている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。内外面ともにぶい褐色をして

いる。胎土は均質なシルト質粘土で、漆黒の破碎石片細粒を含んでいる。

関連事項

四脚付き土器には壺・鉢・浅鉢などがあり、脚の高さにも相違がみられる『宮城県史考古資料』「大洞A式 国版88・89」(伊東・藤沼他:1981.10)。本資料は内面のミガキ仕上げから、鉢とみられるが、口縁部の形状を確定するのは難しい。東北大学蔵沼津貝塚出土有脚鉢(J339 151頁 東北大文学部:1982.3)に近いかもしれない。

四脚付き土器が層位的にまとまって出土しているのは栗原市(旧一迫町)山王廻遺跡第VI層で、V・VI層を大洞A式としている、「付図2」(伊東・須藤編:1985.3)。藤沼も同様な層位的位置づけを行っている(藤沼邦彦:1989.10)、これには脚・底部の文様までは明示されていない。

胴部下端・脚・底部の状況が良く似るのは摺萩遺跡第1土壤墓埋設土器(鉢 第556図1)である(阿部・柳沢他1990.3)。高脚で底部に延びる文様(筋交い状沈線・円文)が共通する(胴部縄文・底部内面平坦は相違する)。口縁～胴上部には沈線による工字文があり、山王廻遺跡V・VI層・山内の大洞A式「模型図」の文様とも共通する(山内清男:1930.5)。

資料81(第19図 追加土器箱③)

楠本記録 ラベル「P1 沼津」筆記「沼津 329」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.6cm・口径13.1cm・底径7.8cmの鉢で、口縁～胴部の1/4、底部2/3が残っている。破損部は復元してある。

器形 逆台形状の鉢で、口縁・胴部は外反気味に外傾する。底部は僅かに上げ底である。

外面 沈線で画した口縁～胴上部文様帯に、沈線・彫去による変形工字文が描かれている。その下は無文である。

この変形工字文は、扁平な三角形状文の内部を沈線と台形状彫去の組み合わせで埋めたものと、残存部から推定される。この主文様間に沈線と方形彫去を組み合わせた工字文が配されている。

その後、外面全体(底部も含む)にミガキが加えら

れ、沈線や彫去による粘土の捲れが押し潰されたようになっている。

内面 口縁部内面にも沈線が巡り、口縁・胴部にミガキが加えられている。底部のミガキは粗く、オサエの凹凸痕を残す。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英や黒色破碎石片(半透明)などがみられる。

関連事項

『宮城県史考古資料』「図版90-2」に一迫町山王遺跡出土の鉢が「晚期 大洞A'式」として掲載されている(伊東・藤沼他:1981.10)。器形・文様とも似ている。

このような変形工字文は山王遺跡「IV I・m層」の台付鉢にもみられ、大洞A'式とされている「付図1」(伊東・須藤編:1985.3)。

資料82(第19図 図版7 土器箱⑩)

楠本記録 ラベル「P3 津沼」

筆記「津沼 329」「A'」

形状と技術的特徴

現状 浅鉢で全体の1/4強が残存している。全体を復元してあるが、歪みが顯著なので、残存部を拓本で示すにとどめた(復元数値:高さ4.4cm・口径15.5cm)。

器形 口縁部には、外傾する小突起(低い三角形状)が巡り、突起間(口唇部)に溝がある。胴部は内湾し、そのまま腰から底部へ移行する。

外面 頸部と胴部下端の沈線によって画された胴部文様帯は、沈線・彫去による変形工字文で構成され、腰から底部は無文となる。

この変形工字文は扁平な三角形(頂部台形)に彫去したものを交互に組み合わせて並べ、間隙を沈線で埋むようにしたものである。

その後、外面全体が丁寧に磨かれている。

内面 頸部に深い沈線が巡らされ、胴部が内湾するために、外傾する口縁部小突起帯は、小さな受口状となる。内面も丁寧なミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコ

ンという音を発する。内外面とも淡暗褐色である。

胎土は均質なシルト質粘土で、石英・長石・黑色破碎石片(半透明・不透明)を含む。

関連事項

この種の変形工字文は、資料81と基本的に共通する。器形的にも、山王遺跡「IV I・m層」の「浅鉢皿」と類似する。また、山内の大洞A'式「模型図」上段の器形・文様とも共通性が認められる(山内清男:1930.5)。

石巻市泉沢貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 石巻市北上町女川字泉沢

北上川(追波川)の支流である大沢川が南東に流れ、その流域に追波川に向かって開く河谷低地を形成している。その西側に位置する舌状の小丘陵(標高20~25m)に泉沢貝塚が立地する。貝層は北と南斜面に分布するが、南斜面貝層は破壊され、残っていないという(藤沼・小井川他:1989.3)。

資料83(第20図 図版7 土器箱⑪)

楠本記録 ラベル「P89 泉沢」筆記「加B」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.0cm・口径16.6cm・底径4.0cmの鉢で、口縁・胴部1/3~底部が残っている。破損部は復元してある。

器形 口縁・胴部が内湾気味に外傾する鉢で、底部は上げ底で小さい。全体的に厚手で、口唇部は平坦になっている。

文様 残存部における沈線や縄文施文の特徴から、胴部に先の丸い横長の弧状三角形を沈線で描き、外縁に単節斜縄文を施文したものと推定される(文様構成は3単位:展開図参照)。

単節斜縄文(RL多条:4mm/1条・15mm/1節)は文様を囲むように方向を変えながら施文され、羽状になっている部分もある(拓本参照)。

沈線文様内部は無文で、ミガキが加えられている。このミガキは沈線を越えて縄文施文部の周縁まで達している部分もある。

口唇部も縄文施文後丁寧に磨いている。底部には軽いミガキが加えられている。

内面 口縁～胴部は丁寧にミガキ、底部は軽いミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色であるが、底部内面は褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、石英・長石・黒色破碎石片(半透明)を含む。

関連事項

この資料と器形的に類似するのは宝ヶ峯遺跡の第3図23・24の鉢・浅鉢である(志間・桑月:1991.11)。

また、同様な鉢・浅鉢は田柄貝塚の第Ⅲ群土器(第Ⅲ-1層)にもみられ(199図1・2)、文様的に近いのは198図16などであるが、壺の中にも同様な文様が認められる(199図13)。これらは後期中葉の宝ヶ峯式・宮戸Ⅱ式とされるものであるが、田柄貝塚第Ⅲ群土器は関東地方の加曾利BⅡ式段階に対比している(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3)。

楠本が土器内面に「加B」と書いたのは関東地方の型式名で時期を示したものと思われる。

石巻市二渡貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 石巻市(旧牡鹿町)清水田浜二渡

牡鹿半島清水田浜の海に面する東側舌状台地(標高10~20m)に立地する。かつて、清水田貝塚と呼ばれていたことがあった(藤沼・小井川他:1989.3)。

資料84(第20図 図版8 追加土器箱③)

楠本記録『矢本町史 先史』図版76「繩文晩期 大洞
B式 牡鹿町清水田貝塚』

形状と技術的特徴

現状 高さ9.5cm・口径12.0cm・底径5.2cmの深鉢で、口縁部の1/4を欠く。破損部は復元補修した。

器形 口縁(唇)部に文様に伴う刻みが入る。口縁部は内湾気味に直立、胴部は内湾気味に外傾する。

外面 外面には口縁部文様帯・胴部繩文帯・胴下部無文帯があり、それぞれの境(頸部・胴下部)は沈線で画される。

口縁部文様帯 口縁部文様帯には、沈線・彫去手法による三叉状入組文・三叉状魚眼文が主文様としてほぼ等間隔に配置される(5単位 展開図参照)。

主文様両側の三叉状彫去はミガキ沈線によって彫がれ、口縁上部に偏平三角状彫去の入る台形無文帯、弧状沈線による楕円帯(斜繩文施文)を作り、口唇部境目に刻みを入れ、補足文様としている。口縁下半部と頸部沈線の間は横位沈線で埋めている(正面図参照)。

胴部繩文帯 胸部には單節斜繩文(LR:2mm/1条・1mm/1筋)が数段にわたって横回転施文される。

なお、口縁上部の楕円文に施文されている斜繩文も同種のものである。

口縁部ミガキと胴下部無文帯 口縁部は文様を描いた後、無文部にミガキを加え、それは頸部沈線の一部に及ぶ。胴下部無文帯も同様で、底部にも丁寧なミガキが加えられている。

内面 口唇部は形状に沿って、口縁部は横方向、胴部は縱方向、胴部下端～底部は曲面に沿ったミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。内外面とも暗褐色で橙色味を帯びる部分がある(国版参照)。胎土はシルト質粘土で、石英・漆黒破碎石片を含む。

関連事項

伊東信雄・藤沼邦彦他(1981.10)『宮城県史考古資料編』図版79-4に「晩期 大洞B式」として写真が掲載されている。

類似資料としては田柄貝塚第Ⅲ群土器(第Ⅱ層)の深鉢(第212図4・第213図4)等がある。大洞B式((山内清男:1930.5)の内容を示す晩期初頭の土器群とされる(藤沼・阿部・手塚・相原他:1986.3))。

女川町尾田峯貝塚・浦宿遺跡(挿図1参照)

遺跡の位置 牡鹿郡女川町浦宿浜字尾田峯
女川町浦宿浜字浦宿

万石浦の奥に北から注ぐ大沢と、その河谷低地がある。その西側に位置し、谷あいの東斜面から低地(標高5~10m)に立地するのが尾田峯貝塚である。

浦宿(B)遺跡は谷あいの東側にあって南に張り出する小丘陵斜面に立地する(藤沼・小井川他:1989.3・宮城県教育委員会:1998.3)。

尾田峯貝塚は当初、浦宿貝塚と呼ばれたが、後に

浦宿地内に新たに遺跡が発見され、1960年に改称されたという（三宅宗議：1967.4）。

資料85（第20図 図版8 追加土器箱③）

桶本記録 ラベル「P95 浦宿」『矢本町史 先史』

図版77「縄文晚期 大洞B式 尾田峰貝塚」

形状と技術的特徴

現状 高さ7.6cm・口径11.4cm・底径3.9cmの深鉢で、口縁・胴部の2カ所（約1/4）を欠いている。破損部分は復元補修してある。

器形 口縁（唇）部に文様に伴う小突起（2個一組）が、ほぼ等間隔にみられ、口縁・胴部は内湾気味に外傾する。

外面 外面には口縁部文様帯・胴部繩文帯・胴下部無文帯がある。口縁部文様帯の下部は2条の沈線で画される。底部には細かい網代圧痕がある。

口縁部文様帯 口縁部文様帯には、彫去手法・沈線による三叉状入組文が繰り返される（推定7単位展開図参照）。入組文上の口縁部は、左右に向かい合う小突起状になっている。

胴部繩文帯 胴部には単節斜縄文（LR:3mm/1条・2mm/1節）が横回転施文されている。

口縁部ミガキと胴下部無文帯 口縁部文様帯と胴下部には丁寧なミガキが加えられ、光沢がある。

彫去部や沈線にもミガキはあるが、粗雑な感は否めない（三叉状彫去部は顯著）。

内面 口縁～胴部は、単位の大きい横方向のミガキが加えられているが、滑らかな器面を形成し得ていない。底部は軽いミガキで、オサエ痕が残る。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも上半部は暗黒褐色、下半部は褐色気味である（図版参照）。

胎土はシルト質粘土で、石英・長石・漆黒破碎石片を含む。

関連事項

類似資料としては、晚期初頭大洞B式に位置づけられる田柄貝塚第Ⅸ群土器（第Ⅱ層）の深鉢（第213図5～7）等がある（藤沼・阿部・手塚・相原他：1986.3）。

資料86（第20図 追加土器箱③）

桶本記録 鉛筆書き紙片「女川町三宅宗議さん実家の近く（浦宿の近く）」

形状と技術的特徴

現状 高さ12.1cm・口径6.3cm・最大径（胴部）15.4cmの注口土器で、口縁部の1/2と注口部口縁を欠いている。なお、底部付近に直径1.4cmの焼成後の孔があいている。

口縁部は復元補修し、注口部・底部付近孔はそのままとした。

器形 口縁部は内傾し、胴部最大径は胴上部にあり、稜を形成する。底部は丸底である。

注口部は胴上部稜の上に、斜めに継ぎ足されている（器壁穿孔後）。基部は直径25mmの半球形状でその先は直径14mmの細い筒状をしている。

外面 口縁下部に1条の沈線が巡るほか、全面が無文で、器形に沿って丁寧なミガキが加えられている。口縁部下端と胴部の繋ぎ目はミガキが沈線状に深くなっている。

内面 口縁部下端は胴部との接合部で、少し下に食み出し稜を形成している（図参照）。口縁部内面は横の軽いミガキ、胴部は横のナデで、底部付近にはヘラナテ状の痕跡が残る。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも灰暗褐色で、胴上部～頸部に黒斑がみられる。

胎土は均質なシルト質粘土で、石英を含み、漆黒破碎石片もみられる。

関連事項

出土地について確実な記録はないが、女川町浦宿地内で、尾田峰貝塚と照源寺の間に位置するすれば、浦宿B遺跡（後・晩期）をあげ得るであろう（宮城県教育委員会：1998.3）。

この種の注口土器は伊東信雄・藤沼邦彦他（1981.10）『宮城県史考古資料』図版80-1に「晩期

大洞B式」として沼津貝塚資料の写真が掲載されている。資料86に較べさらに口縁～頸部が大きく高いが、同一時期の特徴をもっている。

また、摺薪遺跡71b層A層上面（第184図11）からは、資料86と近似する注口土器が、大洞B式の台

付き鉢(第184図10:口縁部文様は資料84に類似)などと併に出土している(阿部・柳沢他:1990.3)。

松島町西の浜貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 宮城郡松島町磯字西の浜

松島湾に面する磯崎から館ヶ先に延びる丘陵から南に舌状に張り出した小丘陵に立地し、前面には海が迫っている。昭和49年7月に大規模な貝塚として国指定史跡となった(藤沼・小井川他:1989.3・宮城県教育委員会:1978.3・1998.3)。

資料87(第20図 追加土器箱④)。

楠本記録 筆記「70 西ノ浜」

現状と概要

(深)鉢の口縁～胴上部破片である。口縁部は短く内傾し、胴上部は内湾気味に外傾する。

口縁部にS字状の突起があり、そのまま頸部を巡る細い隆帯となる。細隆帯と並行に胴上部に横位沈線が引かれるが(4条まで確認)、S字状突起から降りる継の沈線(2条まで確認)に切られている。頸部細隆帯から胴上部には単節斜繩文(LR横回転)が施文されている。S字状隆帯・口縁部～頸部細隆帯間は丁寧に磨かれている。内面にもミガキが加えられている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。外面は淡橙褐色～灰褐色、内面は灰褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で漆黒破碎石片を含む。

関連事項

筆記「70」は登録No.ではなく(P70は宝ヶ峯遺跡)、1970(昭和45)年採取のことかと思われる。

西の浜貝塚Rトレンドチからは同種の資料(破片)が出土し、宮戸II式併行としているが、層位的には明確でない(第10図12 後藤勝彦:2008.3)。

器形全体が判明するものとしては、宝ヶ峯遺跡の大突起を持つ深鉢がある(図版14-7 志開・桑月:1991.11)。大突起間の小突起部分と見れば理解し易いが、確定は難しい。なお、この資料は「宮城県史考古資料」では宝ヶ峯式とされている(伊東信雄・藤沼邦彦他:1981.10)。

いずれにしても、資料87は後期中葉(宝ヶ峯式・宮戸II式)であることに異論はないであろう。

資料88(第20図 追加土器箱④)。

楠本記録 筆記「Nishinohama」

形状と技術的特徴

概要 高さ3.5cm・口径5.3cm・台径2.7cmの小型台付塊である。口縁部はほぼ直立し、胴部が内湾して外傾する。台部は底部が鈍状にはみ出した形をしており(粘土難ぎ足し)、上げ底である。

外面は、口縁・胴部がナデ、台との接合部がオサエ、底部がオサエ・ナデである。内面はオサエ・ナデで、粘土組積み上げ痕が残る。口唇部のみ、最終的に軽いミガキを加えてある。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。内外面ともにぶい褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片(漆黒・不透明)・白色針状細片を含む。

関連事項

西の浜貝塚SトレンドチI区混土(貝)層から小型高坏(図5-3)が出土し、資料88と大きさ・製作技法に似た点がある。この層は宮戸IIa式・西の浜式が主体で、宮戸IIa式・大木10式が出土しているという(後藤勝彦:2008.3)。この小型高坏について触れていないが、後期後半頃(中項を含む)の可能性はあるかも知れない。

東松島市平田原貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 東松島市(旧矢本町)大塩字平田原

旭山丘陵の東縁、定川の北部にあって赤井低地に面した小丘陵に立地する。昭和49年4月に宮城県指定史跡となった(後藤勝彦他:1969.3・藤沼・小井川他:1989.3・宮城県教育委員会:1978.3・1998.3)。

資料89(第20図 追加土器箱④)

楠本記録 筆記「平□?」「矢本町史 先史」図版10上「繩文前期大木 2式 繊維混入 矢本町平田原貝塚 保管場所 矢本町教委」

形状と技術的特徴

概要 深鉢胴部破片である。外面には帶状の凹凸が

みられ、内面の粘土紐積み上げ痕（1カ所残存）と対応する。

外面には単節斜繩文（LR:3mm/1条・1.5mm/1筋）を横回転施文しているが、それほど整然としたものではない（拓本参照）。

内面は軽いミガキが加えられているが、オサエ・粘土紐積み上げ痕を一部に残す。なお、内面下半部には白い紐状付着物がある（外面の一部にもある）。焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとややにぶいコンコンという音を発する。外面は暗褐色、内面にはぶい暗黒褐色をしている。

胎土は粗いシルト質粘土で、明確な繊維混入は確認できなかった。石英・風化砂礫粒・黒色破碎石片・各種砂粒を含む。

関連事項

平田原貝塚は昭和43年に塙釜女子高等学校社会部による発掘調査が行われ、大木2a式土器がまとまって出土した（後藤勝彦他：1969.3）。

資料89は破片であり、時期の限定は難しい。ただ、発掘調査結果では、斜行繩文の土器（第1群第1類）が出土土器の約半数で、胎土に必ずしも繊維を含むとは限らないという。拓本で図示されたもの（第8図10～20）は単節斜繩文が整然と施文されたものが多い。しかし、第8図15・16のように必ずしも整然としないものもある。その点では本資料も大木2(a)式に含まれる可能性もあると思われる。

東北地方の遺跡

福島県いわき市平（旧平市）の貝塚（挿図1参照）

資料90（第20図 図版8 追加土器箱④）

楠本記録 筆記「P93 平 香炉形蓋部 繩文
形状と技術的特徴」

現状 高さ5.3cm・幅7.8cmの香炉形土器天井部の大破片で、両端および背面側の1/3を欠いている。

天井部背面側は復元補修してある。復元部を含めると、径は約10cmとなる。胴径はもう少し大きくなるであろう。

外面 顶部に貫通孔（径4mm）があり、その両側から突起が立ち上がる。左右は玉瘤状2個一対であるが、

正面・背面から立ち上がる突起は破損しているものの、基部の状況から高く延びると推定される。

天井部の両側には隆帯に縁取られた梢円形の窓があり、隆帯が窓の間を繋いでいる（2条）。窓は長径約6cmと推定され、全体の大きさからすると、やや大振りである。窓および間を繋ぐ隆帯は2個一対の小瘤と点列状刻み目窓の組み合わせからなる。

頂部突起と窓の間には、背中合せの対称C字状沈線文があり、その上下に楔状の透かしが入る。

頂部突起および横位隆帯間に円形（径5-6mm）の透かし孔が規則的に配置されている（上段：2個・中段：3個・下段：推定4個）

外面は最終的に丁寧なミガキ仕上げがなされる。内面 窓枠には隆帯に沿って沈線が1条巡らされ、外面同様ミガキが加えられている。しかし、その他の部分は軽いナデで、オサエ・粘土合わせ目、穿孔による粘土の捲れが残る。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンという音を発する。外面はやや光沢のある黒褐色、内面にはぶい黒褐色をしている。

胎土は均質なシルト質粘土で、含まれる砂粒は細かく、白く光る微細片などがある。宮城県内出土資料にみられる黒色破碎石片は確認できない。

関連事項

この資料は平市（現いわき市）内の貝塚を案内され、採取したものという（楠本政助の教示：2008.9.8）。平地区では貝塚が10カ所知られている。晩期の遺物が出土するのは、梅林貝塚B地点（大洞C1式）、薄磯貝塚（大洞B～A'式）であるが、晩期の貝塚として著名なのは（規模・出土遺物の豊富さ）、薄磯貝塚である（福島県教育委員会：1991.3 大竹・山崎他：1988.3）。したがって、資料90の採取地としては薄磯貝塚の可能性も考えられる。

摺痕遺跡15層下A層上面からは香炉形土器が大洞C1式土器と共に出土している（第202図7 V期

阿部・柳沢他：1990.3）。資料90に較べ、窓が小さく、頂部突起も簡略で、上半部は彫去文様、下半部は「半肉形的な雲形文（LR 繩文充填）」とされる。

資料90は窓・頂部突起・玉瘤・点列刺隆帯・対向C字状文・円形透かしなどの点で古い要素を残し

ている。胴部中央の鈍状文様帯・胴下部文様帯の特徴が不明なため確定できないが、全体に占める窓の大きさを考慮すると大洞BC式か、大洞C1式でも古い要素を残すものと考えられる。

岩手県大船渡市泊貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 大船渡市三陸町越喜来字泊

資料91(第20図 図版8 追加土器箱④)

楠本記録 スタンプ「P98」筆記「越喜来湾 泊」

形状と技術的特徴

現状 高さ6.1cm・最大径(胴部)6.3cm・底径3.2cmの小型壺で、口縁部を欠いている。

外面 胴部球形平底の小型壺で、頸部にミガキ状沈線(幅4mm)、胴上部に3条の沈線が巡る。

その間に変則羊歯状文が配置されている(4単位)。この変則羊歯状文は普通にみられる羊歯状文の上半部のみを表現し、下半部の点列刻みを省略したものである。文様を描いた後、外面全体に丁寧な仕上げミガキを加えている。

内面 内面はナデ仕上げであるが、頸上部に粘土雜ぎ足し痕を顕著に残す。

彩色 沈線・胴下部に赤彩痕が残る他、頸部内面にも薄い赤彩痕がある。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で弾くと軽いコンコンという音を発する。内外面ともにぶい暗褐色で、外面に黒斑がある。

胎土は均質なシルト質粘土で、黒色破碎石片細粒などを少量含む。

関連事項

羊歯状文は大洞BC式土器に良く見られる文様である(山内清男:1930.5他)。資料91の変則羊歯状文は文様帯が狭いため、一部を省略したものと考えられる。

資料92(第20図 図版8 土器箱④)

楠本記録 ラベル「P87 岩手県越喜来泊」

形状と技術的特徴

現状 高さ10.3cm・口径13.8cm・最大径(胴部)14.6cmの鉢で、口縁～胴部上半が1/2ほど残っている。

破損部は復元補修してある。

器形と概要 口縁部が外傾し、肩が膨らむ無文の鉢である。口縁部外面は小波状で、内面に沈線状の段が巡る。

小波状口縁は、刻目(楕円形)を連続して加えたもので、その後、口縁部上面を磨いて平坦にしている(上面平坦小波状口縁:図・拓本参照)。

頸部外面は横のナデ、胴部は軽いミガキの下にナデ・ケズリの痕跡が顕著に残る。内面は段～頸部がミガキで、ケズリ痕が残る。胴上部は横のナデ・オサエ痕、胴中央下部が縱のナデとなっている。

全体の器形は整っているが、仕上げは粗い。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くとコンコンという音を発する。外面は橙褐色～暗褐色、内面がにぶい暗黒褐色で、外面に黒斑がある。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・長石が多く、金色の雲母・黒色破碎石片(半透明・不透明)等がみられる。

関連事項

無文の鉢であるため、時期の特定は難しいが、この種の器形は大洞BC式からC2式頃まで存在する。

口縁部内面に沈線を巡らし、波状口縁の上面を平坦化した鉢は里浜貝塚や摺萩遺跡の大洞C2式土器に時折みられる(藤沼・岡村・小井川:1983.3 阿部・柳沢他:1990.3)。したがって、資料92はこの頃のものとみられる。なお、貝塚からは、大洞C2式土器も出土していることが紹介されている(金野良一:1991.3)。

青森県西津軽郡峰ヶ沢町の遺跡(挿図1参照)

資料93(第21図 図版8 追加土器箱④)

楠本記録 「ツガル アジガ沢」寄贈資料で遺跡名不明(楠本政助教示:2008.9.8)

形状と技術的特徴

現状 高さ12.0cm・口径(推定10.5cm)・底径5.4cmの深鉢で、口縁部1/5・胴部1/3・胴下～底部1/1が残存する。

器形 口縁部上面(口唇部)は平坦で、低い棱を4カ所に形成する低い波状口縁と推定される。口縁～胴

下部は直線的に外傾する。底部は平底であるが、中央部が僅かに窪む。

文様 口縁部文様帶には、単節縄文(LR)が、緩やかな波状(横位)に4~5段押圧施文されている。

胴部には単節撚糸文(LR)が縱位(やや斜行する)に施文されている。

口唇部は押圧縄文施文後丁寧なミガキが加えられ、平坦になっている。底部外面も丁寧なミガキが加えられている。縄文施文の口縁~胴部下端が凸凹のある粗面であると較べ、対照的である。

内面 口縁部・胴部・底部内周はやや丁寧なミガキが加えられているが、器面に凹凸を残す。胴部下端・底部の接合部はミガキが不徹底である。底部中央は軽いミガキでオサエ痕が残る。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面とも褐色で、黒斑が器壁を通し、内面に及んでいる。

胎土はシルト質粘土で、黒色破碎石片・茶褐色半透明石片等を含む。また、纖維を少量含む。

関連事項

器形・口縁部押圧縄文帶の特徴が、類似するのは「山内清男先生作成青森県是川一王寺貝塚出土 円筒下・上層式土器の型式別写真」の円筒下層d式土器である(図版42~48 山内先生没後25年記念論集刊行会:1996)。

円筒下層d1式・d2式に細分されて久しいが、資料93の位置づけは円筒下層d式まで、報告書の図・図版で一致するものは見いだせなかった(江坂輝彌:1955.10 江坂・篠津・西村:1958.9 江坂輝彌編:1970.6 茅野嘉雄:2008.6他)。

八戸市是川中居遺跡(挿図1参照)

遺跡の位置 青森県八戸市大字市川町字長七谷

資料94(第21図 図版8 追加土器箱④)

橋本記録 筆記「陸奥是川中居 昭34・7・11」

形状と技術的特徴

現状 高さ13.0cm・口径8.1cm・最大径(胴上部)13.6cm・底径5.2cmの壺で、口縁部1/3・胴部1/2・胴下~底部1/1が残る。

破損部分は復元補修をし直した。

器形 口縁部は短く外反し、端部が丸く取まる。頸部に沈線状の段を形成する。胴部は球形状であるが、最大径は胴上部にある。底部は平底である。

外面 口縁部から頸部はミガキが加えられ、それは頸部の沈線上面に及ぶ。胴部には単節斜縄文(LR:3mm/1条・15mm/1筋)が器形の変化に沿って、横回転施文されている。底部には軽いミガキが加えられている。

内面 口縁部~頸部は横のミガキ、胴部はナデ状の軽いミガキである。底部も軽いミガキが加えられているが、ナデツケ状痕跡を残す。

焼成・胎土 焼成は良好で軽いコンコンという音を発する。内外面とも淡褐色で、外面に黒斑がある。

胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片などがみられる。

関連事項

口縁部が短く外反し、胴部球形状の壺は、是川中居遺跡長田沢地区の調査でも出土している(第11図9:B~11a層)。遺物が多いのは11b層で、「大洞C2式からA式に移行する段階がのものが中心」と考えられている(宇部・小久保他:2002.3)。また、東津軽郡平館村(現外ヶ浜町)今津遺跡弘前大学調査区からも、類似する壺が出土し(図版4:壺17・18など III・IV層)、「大洞C2式の範疇とみてよい」としている(藤沼・関根他:2005.3)。

大洞C2式土器については細分問題もあるが、資料94に関しては大筋として大洞C2式に属すると考えるに留めたい。

八戸市長七谷地貝塚(挿図1参照)

遺跡の位置 青森県八戸市大字市川町字長七谷

資料95~106(第21図 図版8 追加土器箱④)

橋本記録 資料95(「P85」)には明確な長七谷地貝塚の記名がある。資料96~106の破片については、「長七谷地貝塚」を示す記名は3点であるが、連番登録したもの(「P507~517」)はすべて長七谷地貝塚から採取したという(橋本政助の教示2008.9.8)。

資料95

標本記録 ラベル「P85」 青森県八戸市長七谷地貝塚 昭和34.7.12 繩文式文化早期赤御堂式

形状と技術的特徴

現状 高さ8.3cm・口径12cmの鉢形尖底土器である。口縁・胴部1/3～尖底部が残存する。破損部は復元し直した。

器形 口唇部は外側に丸く収まる。口縁部から尖底部へは、ほぼ直線的に外傾するが、頸部にオサエによる凹み帯がある。尖底部は丸みを持つ。

概要 外面には単節斜縄文(RL:7mm/1条・4mm/1節)が基本的に横回転施文されるが、口縁部と尖底部付近は方向が不規則になっている(器形のためか)。

頸部の指頭状オサエは、縄文施文前と、その後のものが重複している。

内面 内面はナデ仕上げであるが、オサエ痕や、シボリ目かと思われる斜めの筋状凹みを残している。

内面はにぶい褐色をしているが、頸部に暗黒褐色の帶状焦吸着痕(幅5～12mm)が巡る。対応する外表面は橙褐色で、胴下・尖底部付近はにぶい褐色をしている。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で弾くと、ややにぶいコンコンという音を発する。

胎土はシルト質粘土で、褐灰色風化砂礫・石英・長石の他、微細な黑色破碎石片を含む。

資料96 ラベル「P516」 筆記「長七」

概要 口縁部破片で、頸部に焼成後の穿孔(径6mm)がある。口唇部は粗面(ナデ)の隅丸方形で、外面には単節斜縄文(RL)が施文されている。口縁部は斜め、胴部は横回転施文であるが、口縁部の縄文はナデで消されている(拓本参照)。内面はオサエ・ナデで、器面に僅かながら凹凸を残す。

焼成は普通で、暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、風化砂礫・黒色破碎石片を含む。

資料97 ラベル「P517」

概要 口縁・胴上部破片で、胴上部に焼成後の穿孔(径10mm)がある。口縁部が外反し、口唇部に斜めの押圧縄文が施文されるが、口縁部内外面のナデで

潰されている。胴部は外側面とも単節斜縄文(RL)が横回転施文されている。

焼成はやや不良で、暗褐色をしている部分が多い。胎土はシルト質粘土で、褐色風化砂礫・黒色破碎石片を含む。

資料98 ラベル「P511」

概要 口縁部破片で、口唇部は隅丸方形で斜めの押圧縄文が施文されている。外表面は口縁部がオサエ・ナデ、胴部が単節斜縄文(RL)の横回転施文である。内面は僅かに凹凸を残すオサエ・ナデである。

焼成は普通で、にぶい橙褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英の他黒色破碎石片を含む。

資料99 ラベル「P513」

概要 口縁・頸部破片で、口縁部が外反する。口唇部に斜めの押圧縄文が施文されている。外表面は口縁・頸部に単節斜縄文(RL)が横回転施文されるが、口縁部では斜め回転施文の部分もある。内面は凹凸を残すオサエ・ナデである。

焼成は普通で、外表面は淡灰褐色、内面は暗黒褐色である。胎土はシルト質粘土で、白色石片・黒色破碎石片などを含む。

資料100 ラベル「P508」 筆記「八戸長七谷地(貝塚) 昭和34-7-12 早期赤御堂式」

概要 口縁・胴上部破片で、口縁部が外反する。口唇部に斜めの刺突が加えられ、口縁部は小波状になっている。外表面は口縁部がナデ、口縁下部～胴部が単節斜縄文(RL:7mm/1条・4mm/1節)が横回転施文され、頸部に1条の押圧縄文が認められる(拓本参照)。内面はナデ・オサエで、器面の凹凸が顕著に残る部分がある(断面図参照)。

焼成は良好で、外表面はにぶい橙褐色、内面は暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、石英・黒色破碎石片を含む。

資料101 ラベル「P510」

概要 口縁・胴上部破片で、口縁部が短く外反する。口唇部に斜めの押圧縄文が等間隔に加えられ、口縁

部は小波状になっている。外面は口縁～胴部が単節斜縄文(RL:6mm /1条・4mm /1箇)が横回転施文され、頸部に1条の押圧縄文が認められる(拓本参照)。内面はナデ・オサエで、器面の凹凸が残る。

焼成は普通で、外面は暗褐色、内面はにぶい褐色で、胴上部に黒褐色の焦吸着痕がある。対応する外は褐色をしている。胎土はシルト質粘土で褐灰色軟質破碎岩片や僅かに黒色破碎石片粒などを含む。

資料102 ラベル「P507」

概要 胴部破片で、膨らみを持つ。外面には単節斜縄文(RL:4mm /1条・2mm /1箇)が、やや不揃いながら横回転施文されている。内面はオサエ・ナデであるが、器面に顯著な凹凸を残す。

焼成は普通で、外面は橙褐色、内面はにぶい灰黒褐色をしている。胎土は砂粒を含むシルト質粘土で、石英・風化砂礫などの他、少量の黒色破碎石片粒がみられる。

資料103 ラベル「P509」 筆記「長七谷地」

概要 胴部破片で、外面には単節斜縄文(RL:5mm /1条・3mm /1箇)が、横・斜め回転施文されている。内面はオサエ・ナデで、器面に凹凸を残す。

焼成は良好で、外面は淡褐色～橙褐色、内面は灰暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、風化砂礫・黒色破碎石片粒などを含む。

資料104 ラベル「P512」

概要 胴上部破片で、外反気味である。口縁部に近いかも知れない。内外面に単節斜縄文(RL)を縱斜め回転施文しているが、内面は摩滅が顯著である。

焼成は普通で、外面は灰褐色、内面は橙褐色である。胎土はシルト質粘土で、褐灰色軟質岩片などを含む。

資料105 ラベル「P515」

概要 胴部破片で、外面に単節斜縄文(RL)を横回転施文し、横位並行沈線(2条)が間隔をあけて引かれている(2段まで確認)。内面はオサエ・ナデで、やや凹凸を残す。

焼成は普通で、外面は淡褐色、内面が暗褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、褐色風化砂礫・黒色破碎石片などを含む。

資料106 ラベル「P514」

概要 胴部破片で、上部が外反気味になっている。左肩に焼成後穿孔端部が残る。外面は単節斜縄文(RL)を横回転施文、内面はオサエ・ナデで、器面に僅かながら凹凸がある。

焼成は良好で、内外面とも橙褐色をしている。胎土はシルト質粘土で、風化砂礫・石英・長石・黒色破碎石片粒等を含む。

関連事項(資料95～106)

楠本は資料95のラベルに「P85 青森県八戸市長七谷地貝塚 昭和34.7.12 繩文式文化早期赤御堂式」と記している。資料100にも「八戸長七谷地(貝塚)昭和34-7-12 早期赤御堂式」と記している。

赤御堂貝塚は昭和30・31年に江坂輝弥等によって発見と発掘調査が行われ、繩文文化早期末頃の「表裏に縄文の施文された、器壁内に織維の含有が全く認められぬ尖底土器」が出土したと報じられた(江坂輝弥:1957.5)。

「赤御堂式」の型式設定と資料の公表は、「世界考古学大系1」で、長七谷地貝塚出土の尖底深鉢の写真が示された(図版14)。江坂輝弥は「赤御堂貝塚の貝層中などから全面に縄文のはどこされた砲弾形の尖底深鉢が出土した。この土器は赤御堂式土器とよび、内面に底まで縄文のはどこされたものがある。赤御堂貝塚や八戸市長七谷地貝塚などで発掘したものは(図14)、器壁内には植物織維がみられないが、他に器壁内織維を入れた、文様器形にもわずかずつ変化のみられる後続する数型式が注意されている。」と述べている(江坂輝弥:1959.6)。楠本政助も長七谷地貝塚採取土器について、江坂輝弥に教えを受けたという(楠本政助の教示:2008.9.8)。

赤御堂式については資料の増加に伴い、細分案も提出されている(古・中・新段階)。しかし、織維を未だ含まない点では、次の早稻田5類(多量に含む)と区別されている(二本柳・鹿角・佐藤:1957.12 鹿角・

二本柳・佐藤・渡辺: 1960.4 二本柳・佐藤: 1961.1
工藤竹久: 1989.4 熊谷常正: 2008.6)。

資料95は器形や縄文施文の特徴が判明し、江坂輝彌が提示した資料と良く似ている。また、資料96～106はいずれも破片であるが、胎土に明瞭な繊維を含まないという共通性を持つ。口唇部の特徴(素面・押圧縄文・刺突)、縄文の施文位置(内外と外面)などに細かな相違はみられるものの、単節縄文横回転施文を基本としている。これらは赤御堂式の範囲に大筋として取まるものと思われる。

その他の縄文土器

整理過程で、遺跡名が分からなかったものである。その後、資料107は宝ヶ峯遺跡の記名がみつかった。また、資料108は沼津貝塚として寄贈を受けたもので、旧遠藤源七氏蔵の可能性があるという(楠本政助の教示: 2008.9.8)。したがって、(伝)沼津貝塚出土ということになる。

資料107・108は、結果的に、収録が最後になったことをお詫びしたい。

資料107(第21図 図版8 追加土器箱④)

楠本記録 ラベル「P99」筆記「宝ヶ峯」

形状と技術的特徴

現状 高さ 5.2cm・口径 4.0cm・最大径(胴部) 6.5cm の小型壺で、口縁～胴部の 1/6 を欠いている。破損部分は補修してある。

器形 胴部偏球形の短頸壺である。口縁部は外面が特に丸い。胴部にも膨らみがある。底部は扁平な丸底である。

文様 頸部に1条、胴下部に2条の浮彫風沈線が巡る。両者に画された頸部から胴中央部が文様帶で、浮彫手法によるC字状渦巻文が交互に対向して配置されている(展開図参照)。

器面は幾分磨滅しているものの、外面は彫込線も含め、ミガキ仕上げである。

内面 口縁部は横のミガキ、胴部はナデ、底部はナデツケである。胴部は平滑であるが、胴上部・頸部に粘土紐積み上げ痕を残す。

焼成・胎土 焼成は普通で、指で彈くとコンコンと

いう音を発する。内外面とも淡暗褐色をしている。

胎土はシルト質粘土で、石英・漆黒破碎石片粒・褐灰色風化岩片などを含む。

関連事項

資料107にみられるような浮彫対向C字文は摺薪遺跡66層(第IV期大洞BC式)の注口土器(第65図20)にみられる(阿部・柳沢他: 1990.3)。

器形的には、胴部に丸みを持つ小型の短頸壺は曲田I遺跡E III-011住居跡から出土している(第48図257 図版102～257)。口縁部が短く外傾し、胴上半部の文様が浮彫変形羊齒状文(点列刻み主体)などの細かな相違もあるが、浮彫対向C字文は273・274(第50図)の往口土器にみられ、いずれも大洞BC式土器に伴うものである(鈴木隆英他: 1985.2・林謙作: 1993.4)。

資料108(第21図 図版8 追加土器箱⑤)

形状と技術的特徴

現状 高さ 6.6cm・口径 30.6cm・底径 19.0cm の浅鉢で、全体の約3/5が残っている。胴下部の部分的な文様剥落を補修した。

器形 口縁・胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が肥厚する。底部は外周に丸みをもつ平底である。口唇部は小突起間をハ状の浮彫文様で埋めている。口縁部を正面から見ると、小突起(推定4個)間が扁平な台形小波状となっている。

外面の文様 胴部全体に浅い浮彫手法による龍尾状の雲形文が展開し、口縁部とは2条、底部とは3条の浮彫状沈線によって画される。

各々(2個)の龍尾状雲形文は器面の3/4を巡り、上下斜めに入組むように配置されている。文様内には細かい単節斜縄文(LR: 1cm/6-7条・1cm/8節)が施文されている。外面は底部を含め、最終的に丁寧なミガキ仕上げが加えられている。

内面 胴部中央に1条の帯状縄文帯が巡る。浮彫帯状部分に細かい単節斜縄文(外面に同じ)を横回転施文したものである。内面も丁寧なミガキ仕上げが加えられている。

焼成・胎土 焼成は良好で、指で彈くと軽いコンコンという音を発する。内外面ともにぶい橙褐色で、

底部外面の広い範囲に黒斑がある。

胎土は僅かに砂粒を含むシルト質粘土で、黒色破碎石片(半透明・不透明)・石英・長石・風化砂礫などがみられる。

関連事項

この種の浅鉢もしくは皿は里浜貝塚西畠地点上部層、摺薪遺跡VI期(15~7層)からまとまって出土し、大洞C2式土器(旧段階)とされる(藤沼・岡村・小井川:1983.3 小井川・山田:2002.3 阿部・柳沢他:1990.3)。

考 察

楠本コレクションの縄文土器108点について、調査の内容を図・拓本・写真とともに述べてきた。この中で、南境・仁斗田貝塚資料は発掘調査によるものが主体を占めている。その他の各地遺跡資料(宝ヶ峯遺跡以降)は表面採取によるもので、個人から寄贈されたものを一部含んでいる。また、両者には預かり品も含まれている(資料49・58・89)

したがって、ここでは南境・仁斗田貝塚の発掘調査出土土器を中心に、その編年的位置づけを検討することにする。

なお、各資料の「関連事項」において、両貝塚については、これまでの出版物における掲載内容の紹介、その他の東北各地遺跡については、それに加え、類例の指摘を行っておいた。併せて、参考いただければ幸いである。

南境貝塚出土土器

楠本調査区について

「資料の調査 南境貝塚 発掘調査について」で、楠本の発掘調査区は北斜面貝塚(北境久保)に位置し、発掘区は幅1.5m・長さ5mのトレンチ(『試掘溝』)が2本(B・C)、調査期間は昭和35年から昭和36年8月とみられることを指摘しておいた。

その後、昭和41~43年度に宮城県教育委員会による開田工事に伴う南境貝塚の緊急発掘調査が広範囲にわたって実施され、膨大な遺物が出土すると伴に、結果として貝塚の大部分は失われることとなっ

た。楠本の発掘調査区の位置比定については、その第3次・4次緊急調査概報における記述と図面が参考になる。

第3次調査概報(昭和42年)(後藤勝彦:1968.3)

「調査経過」の8月11日「1・2トレンチ、…遠藤、毛利氏や楠本氏の発掘区域でS-R区に1メートル巾のピットを設定して、層序の確認につとめた。」

8月12日「1・2トレンチ、S区は擾乱層。…PQ区は擾乱されていない。」

「第二図 発掘地域の平板図」には地形測量図に発掘区(トレンチ)が図示されている。

第4次調査(昭和43年)(後藤勝彦:1969.3)

「調査概要 北境久保地区 3・4トレンチ」では「O-R区で西壁沿いに、東壁三十センチを残して擾乱層(以前調査トレンチ)にあたった。」とし、「第6図 3・4トレンチ壁面実測図」が掲載されている。この3・4トレンチは幅約3.4mで、東壁図には貝層の堆積状況、西壁図には長さ約6mの擾乱層の範囲が図示されている。

まとめ 久保地区3・4トレンチで確認された「以前調査トレンチ」は、楠本の「試掘溝」(昭和35・36年頃 楠本政助:1976.2)の規模に近似し、両者は一致する可能性が高いと思われる。

記名について

縄文土器に記名されたアルファベットとローマ数字の関係を検討しておきたい。

アルファベットの「B・C」は2本の試掘溝を指し、北斜面貝塚に対し南北に並んで設定されたトレンチで、宮城県教育委員会調査の3・4トレンチO-R区に該当する可能性は既に述べた通りである。

ローマ数字はB(トレンチ)にIV・V・VI・VII,C(トレンチ)にI・IIがみられる。記名の状況に応じて、楠本の認定した土器型式(ラベル・筆記・『矢本町史先史』)を対応させると次のようになる。

Bトレンチ

B-IV(記載無し)・B-V(大木9式・大木10式)・
B-VI(大木9式・10式)・B-VII(大木9式・10式・
南境式並行・堀之内1式)

Cトレンチ

C - I (大木8b式・大木9式・大木10式・大木10式?・
称名寺式)・C - II (大木10式・称名寺式併行)

以上のように、ローマ数字には複数の土器型式が
いずれにも含まれ、B - VIを最下層とすると層位は
完全に乱れていたことになる。しかし、楠本は遺物
が層位的に出土したことを『東北考古学』第1輯掲載
論文で述べている(楠本政助: 1960.10)。

したがって、ローマ数字は層位名ではなく、各ト
レンチの地区名を示すと見た方が良いのではなかろ
うか。層名は記録しなかったことになる。

それでは、縄文土器を始め、台帳に土製品・石製品・
骨角器等の土器型式名が記入されているのはどのように
理解したら良いのであろうか。可能性が最も高いのは、
発掘調査中に出土する土器を見て、大木10
式の層・大木9式の層・大木8b式の層等と命名し、
それらの土器とともに他の遺物を取り上げ、それ
ぞれに土器型式名を記したと考えられることである。
後日、以上のことを確認したところ、當時とし
てはそうであったという(楠本政助の教示:
2008.8.1)。

出土土器の検討

南境貝塚の土器は資料1~52で、この中には表面
採取されたものも含んでいる。資料45・46・48・52
には採取年月(昭33-7など)が記入されている。
また、資料49は預かり品(石巻市教委)である。

確実に発掘資料と言えるものは、アルファベット・
ローマ数字の表記のある37点である(中期中期頃~後
期初頭)。しかし、それ以外の土器で記名はないもの
の、完形に近いものがあり(7点)、表面採取では
収集が難しい。それらは記名漏れの可能性があるの
で、発掘資料に準じる扱いをしたい。その他の8点
は表面採取資料として扱うこととする。

出土土器の検討は、楠本政助の発掘調査に基づく
土器型式認定を基本とし、他の調査で出土した層位
的資料・一括資料と比較し、その妥当性をみること
に重点をおきたい。その意味では楠本発掘区と推定
される宮城県教育委員会による南境貝塚発掘資料
(第1~4次)の3・4トレンチ、東に隣接する5・6ト
レンチの成果が最も有効と考えられるが、未だ整理

途上で公表されていない。そこで、公表済みの7・8
トレンチや他の遺跡における出土状況を参考にす
る。

また、楠本が土器型式の認定を行っていない資料
については、類例との比較から、その編年の位置付
けを可能な範囲で行うことにしてみたい。

大木8b式土器(挿図2参照)

資料1

C - I 区出土で、楠本は大木8b式土器とする(楠
本政助: 1973.5)。類似資料として大郷町大松沢貝塚
出土土器群(大木8b式: 第1~7図)の深鉢[2]・[7]
をあげることができる。両者の器形の融合した形(口
縁部:[7]・胴部:[2])で、胴部文様の構成は[7]に
近い。劍先状渦巻文は[2]にある。

加藤は山内清男の大木圓貝塚調査資料(大木8b
式: 第8図)を提示し、「大松沢貝殻貝塚出土の前掲
の遺物群は、土器型式學上、山内氏調査に係る大木
圓貝塚出土の遺物群と、非常に多くの類似點を持っ
ていて、同型式に屬する遺物と考えられる」と
した(加藤孝: 1956.6・12 文様展開模式図は丹羽・
阿部・小野寺: 1982.3の101~104図)。

大木9式土器(挿図2参照)

資料2~11・29・32・33・35

楠本の認定した土器 楠本が「矢本町史 先史」で
大木9式土器としているのは資料8(B - VI区)・9(B
- VII区)・11(B - VII区)・32(B - VI区)の4点である
(楠本政助: 1973.5)。また、資料ラベル・筆記・台帳
記載で大木9式土器としているのは資料4(B - VI
区)・29(B - V区)・33(B - VII区)・35(C - I区)
の4点で、合計8点となる。

その他の土器 記載のない6点は、林が『日本の考
古学II 東北』で「大木9a式」: 資料2(C - II区)・
「大木9b式」: 資料6(B - VII区)としたもの(林謙作:
1965.7)、「宮城県史考古資料」に「中期大木9式」と
して収録された資料3(C - I区)・6(林の大木9b式
に同じ)(伊東・藤沼他: 1981.10)と、資料5(B - VI
区)・7(B - VII区)・10(B - VII区)である。

土器群の特徴と編年の位置づけ 以上の土器群は、

渦巻楕円文（横位・縦位）・縦位楕円文・△文とその変形（接続）文様（資料8・9）で、縄文（一部刺突文）を充填施するという特徴をもっている。これらは山内写真資料の大木9式土器に、いずれも含まれる（興野義一：1996.8）。

楠本コレクションの大木9式土器をグルーピングするとA：渦巻文を併用するもの（資料2-4・10・11）と、B：縦位楕円文・△文およびその変形文様からなるもの（資料5-9）がある。両者に共通するのは楕円文や△文である。その意味では共通する文様原則を持っている（挿図2参照）。

大木9式土器の細分問題 林は「宮城県梨木町の調査によって、大木9式が少なくとも二型式に細分されることがあきらかになった」とし、「大木9a式」として南境貝塚の資料2、「大木9b式」として資料6の実測図を掲げた（林謙作：1965.7 図24）。

資料2は口縁部が内湾し、胴部がキャリバー形の深鉢である。口縁部文様帶は横位渦巻楕円文、胴部文様帶は縦位渦巻文と△文の交互組合せで、Aグループの中でも渦巻文の独立性を残す土器である。器形・文様・技法とともに大木8b式に系譜をたどることができる。

資料6は口縁・胴上部が外反し、胴部が膨らむ深鉢で、胴部全体に縦位楕円文・△文が配置されている。器形は大木10式に繋がる要素をもち、文様は大木9式土器の中で最も単純である。

梨木町貝塚における出土状況 里浜貝塚梨木町地区は昭和33年8月（1958.8）と昭和36年7月（1961.7）に発掘調査が行われている。昭和33年調査区の層序は①上部貝層（upper Shell-bed）・②赤褐色土（reddish brown earth）・③下部貝層（another shell-bed）・④暗色有機質土層（dark colored organic earth）・⑤基盤（basement）で、大木9式土器を主体として、大木8b式～10式土器が出土している（S.TAIRA AND T.KATO：1959.12）。

林が大木9a式とした資料2に類似するものは④第2混土層（second mixed bed ≈ dark colored organic earth）：Plate3-2、大木9b式土器とした資料6に類似するものは②第1混土層（first mixed bed ≈ reddish brown earth）：Plate2-6から出土している。

確かに層位的ではあるが、層序の説明（50頁）と遺物（図版説明）の出土層名が別の用語でなされていること、②第1混土層からは大木10式土器（Plate2-7）も出土しているなど明確にし得ない部分がある。

昭和36年調査区の層序は①表土・②灰層・③キサゴ層・④キサゴ層下土層・⑤アサリ層・⑥純貝層・⑦混土層・⑧破碎貝層で、大木9式～10式土器が層位的に出土している（大木10式土器については後述）。

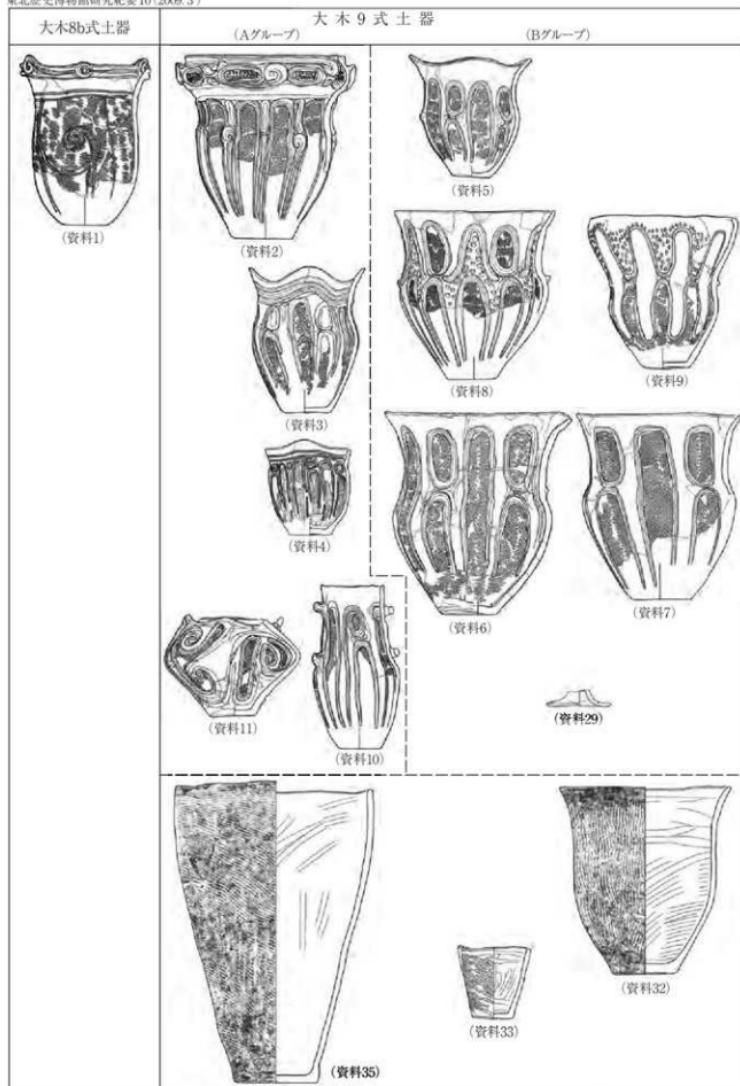
大木9式土器は⑧破碎貝層からの出土で、口縁部内湾（横位渦巻文）・頸部段（無文帯）・胴部キャリバー形（縦位渦巻文）の深鉢、口縁部が外反し胴上部がくびれる深鉢（縦位渦巻楕円・△文）等からなり、隆・沈線を組合せた文様を主体とし、沈線文様土器も少量みられる（芳賀良光：1968.12 第3図12～14・第4図Ⅴ）。この破碎貝層出土土器群は、第3図12がNashinokigakoi Plate3-2・楠本資料2と同一時期から検討を要するが、林の大木9a式土器を構成する可能性はあると考えられる。

南境貝塚における出土状況 南境貝塚楠本調査区では、資料2（C-II区）と資料6（B-VII区）の出土区は違うが、それが時期差に結びつくか否かは明らかでない。ちなみに、C-II区からは大木10式から後期初頭の土器、B-VII区からは大木9式（A-Bグループ）・大木10式～後期初頭土器も出土している。両地区とも時期幅がある。

その後、昭和41年～43年に宮城県教育委員会によって実施された南境貝塚の4次に及ぶ発掘調査の内、第7・第8トレントの調査成果が報告された（後藤勝彦：2004.5 2005.3）。大木9式土器は第7トレントの第16層・17層、第8トレントの12～14層から出土している。いずれも、大木10式土器の下層である。

第7トレント16層と17層（破碎貝混入黒土層）は大木9式土器を主体とするが、層位的に大木9式土器の変遷を把握するには至らないようである（後藤勝彦：2004.5）。

第8トレント12～14層の中で後藤は「第12層は……大木8b式に近い土器群が混入する」（9頁）と指摘している（後藤勝彦：2005.3）。明らかに古い混入



挿図2 南境貝塚出土中期後半の縄文土器(大木8b式土器・大木9式土器)(縮尺1/6)

土器を除いて第12・13層と14層を比較すると時期的な違いがありそうである。南境貝塚の大木9式土器については、今後の整理結果を待ちたい。

青島貝塚 層位的にまとまりのある例としては、登米市(旧南方町)青島貝塚第2次調査Fトレンチ6~8区第4層(貝層)出土土器群で、12点の深鉢実測図が掲載されている。口縁~胴部の器形が判明するのは8点で、口縁部が外反するもの5点、内湾するもの3点(1点は縄文施文のみ)がある。

文様は縦位楕円文もしくは△文・変形△文が主体を占め(8点)、渦巻文を伴うもの2点3点、コ字状文が1点で、文様内部に縄文が施文されている。(加藤・後藤他:1975.3)。

これらは楠本コレクションのBグループを主体とする土器群で、大木10式に繋がる文様(コ字状文)をもつものもある(図14-1:F8区4層)。林の大木9b式(資料6)に近似するのは図19-5(F8区4層)である。青島貝塚の土器群(第4層)は大木9式土器でも新しい様相を示すと言えよう。

大梁川遺跡 大梁川遺跡南側遺物包含層から、層位的に大木9・10式土器が出土している。大木9式土器は第IV層・第III(c~d層・a~b層)層から出土し、その様相から青島貝塚第4層土器群に先行するもので、大木9式土器の前半から中頃のものとみられる(手塚・相原・加藤他:1988.3)。

大梁川遺跡第III・IV層土器の特徴は一貫して「縦位楕円文・△文」によって文様が構成される土器が伴うことである。IV層土器からIII層土器への変化は次のように整理することができる。

- (1)内湾する口縁部文様帯が横位渦巻楕円文で、胴部キャリバー形の深鉢は第IV層に多く、中には頬部無文帯を形成するものもある。器面に縦・横位対向渦巻(楕円)文、縦位渦巻楕円文の発達する深鉢や浅鉢もみられる。
- (2)第III層では、内湾する口縁部に縦位対向渦巻(楕円文・横位対向渦巻(楕円)文)が深鉢・浅鉢に特徴的にみられる。横位対向渦巻(楕円)文の中にはハート状に繋がり、あたかも人面状(両目・口)をなすものもみられる。

また、第III層では縦位渦巻楕円文・△文、縦位

楕円文・△文を多重線文で描いたり、それらを組むものも多い。さらに、縦位楕円文間に波状に縫う多重沈線文も特徴的にみられる。

(3)文様表現技法をみると、横・縦位渦巻文の隆線は第IV層で高い山形をなすが、第III層では、次第に低くなる傾向がある。

楠本コレクションのAグループの大木9式土器は、大筋として大梁川遺跡第III・IV層土器に対応するとみられる。ただ、大梁川遺跡第IV層→第III層という大木9式土器の変化は主に組成の違い(器形・文様・技法)として表れている。それは青島貝塚第4層出土土器群へ変化するとみられるが、特徴的なものは識別可能であるものの、一貫して共通する要素を持っていることは前述の通りである。

まとめ 林謙作が里浜貝塚梨木開地区の調査から導き出し、楠本コレクションの南境貝塚資料2-6によつて提示した大木9a式・大木9b式の2型式への細分は、その後の調査(青島貝塚・大梁川遺跡)によって、変遷の妥当性としては支持し得るが、独立した型式『地方差・年代差を示す年代学的の単位 -我々が型式と云って居る- を制定し』山内清男(1932.7)とするには、まだ無理があると思う。

大木9式土器については、良好な一括資料の出土を待って検討を続けるべきかと思われる。

大木10式土器(挿図3・4)

楠本の認定した土器(挿図3)

楠本が『矢本町史 先史』(楠本政助:1973.5)や記録(台帳・ラベル・筆記)で大木10式土器としているものと、それらに類似するものを挿図3に示した。その中には楠本が資料21・22のように「大木10式?」と疑問符を打っているものも含まれている。

一方、『宮城県史考古資料』では資料21・22・24を後期前葉の南境式土器としている(伊東・藤沼他:1981.10)。その他の資料に対する土器型式の位置づけはほぼ一致する。また、近年は発掘調査資料の増加・公表も進み、大木10式土器の変遷や、それに後続する後期初頭の土器について理解が深まるとともに、さまざまな、意見が出されている。ここでは、楠本政助コレクション資料の位置づけを行うことを

目的に、充分とは言えないかも知れないが、実態としての資料と比較・検討し、問題点の指摘を行うことにする。

大木10式土器前半(資料12・13)

資料12・13の深鉢は幅広沈線でC・S字状文様を描き、内部に縄文を施文し、外側を磨いて仕上げたものである。資料12は器面全体に文様を描いたもの、資料13は文様に沿った幅広沈線を胴中央部に巡らし、胴下半に縄文を施文したものである。

幅広沈線に縁取られたC字状縄文帯文様は、大木9式土器後半に少数ながら現れる。登米市(旧南方町)青島貝塚F8区第4層(加藤・後藤他:1975.3)や、刈田郡蔵王町二屋敷遺跡第8号住居跡埋設土器等(加藤・阿部・小徳:1984.3)をあげることができる。刈田郡七ヶ宿町大梁川遺跡南側包含層第II d・c層では資料12・13と同様なものがまとまって出土し、巻込み形の波瀬文も伴っている(手塚・相原・加藤他:1988.3)。これらは、大木9式土器の口文が母体となつて成立したものとみられる。口文自体は縱文文様であるが、それが横文文様へと変化したことを示している。

大木9式土器と大木10式土器の文様と方向の違いを指摘したのは江坂輝弥である(山内清男編著『日本原始美術1』1964.3 図版88(楠本コレクション資料17解説)。図版89の山形県白須賀遺跡例も加藤稔は大木10式とする。

それ以前に、伊東信雄は『宮城県史1』の巻頭図版の「県内出土中期縄文式土器」に「大木10式土器」として「白石市荒井出土」資料を掲載している(図版4-VI)。資料13と似た文様構成で、隆線に縁取られた横S字状文の深鉢である(伊東信雄:1957.3 調査報告は佐藤・片倉:1958.10)。

伊東は山内の大木開貝塚の発掘調査に参加し、指導を受けている(伊東信雄:1977.12)。山内には仙台を去るに当たり「大木式土器型式別写真」の実物資料等を東北大に残した(加藤孝:1956.12 早瀬・菅野・須藤:2006)。伊東が荒井遺跡出土土器を大木10式土器としたのは山内の大木開貝塚発掘資料との比較・検討の上でなされたものと思われる。この種の土器に対して、大木10式とする理解は伊東が

早かったことになる。

古相:大梁川遺跡南側包含層第II d・c層のように資料12・13タイプが共伴する例は蔵王町二屋敷遺跡第4号住居跡埋設土器(加藤・阿部・小徳(1984.3)、相馬市馬見塚遺跡第2・3号住居跡埋設土器などにもみられる(鈴鹿良一・橋本博幸他:1982.3)。これらを大木10式前半の古相と仮称する。

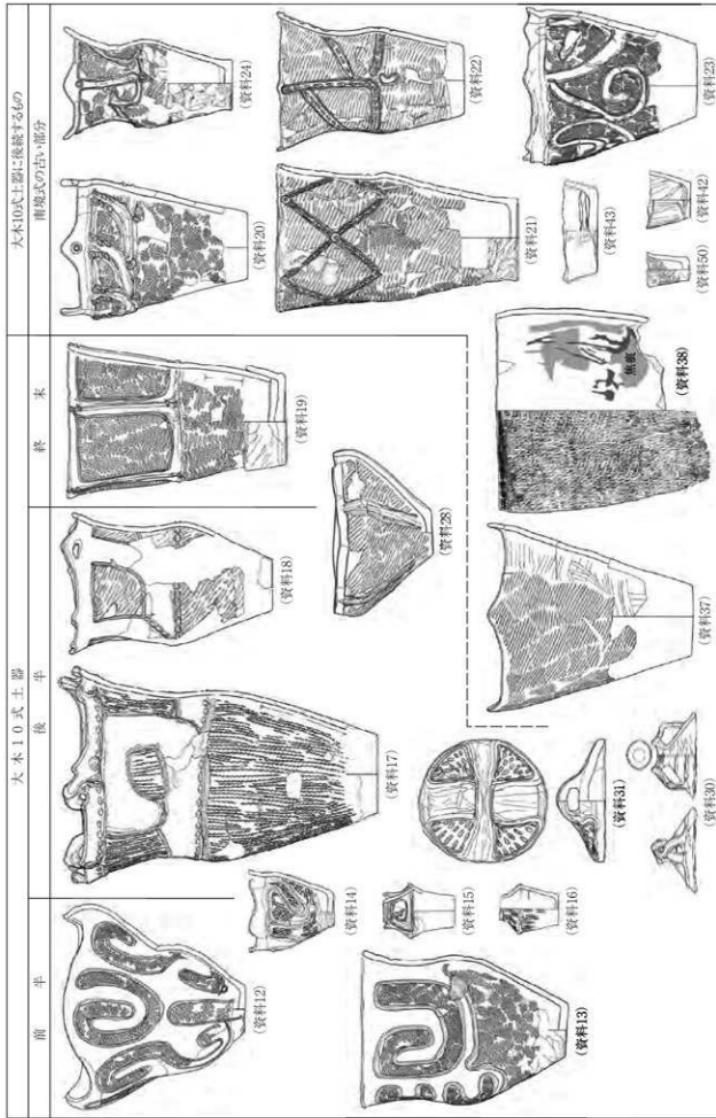
新相:一方、大梁川遺跡南側包含層では第II d・c層の上位に第II b・a層がある。II b・a層には新たに又状帶状文(雁股状文:隆線で縁取り縄文を施文)が出現し、資料13タイプが共伴する。これらの文様は上半部に展開し、胴中央部に隆線もしくは幅広沈線が巡り、下半部は縄文が施文される。上半部の文様はC・S字状帶文・横長波瀬文・横積円文・などが主体を占め、II d・c層にあった器面全体に文様が展開するものは少數となる。これを新相と仮称する。古相・新相は組成の相違と層位的関係による。

以上までの、大木10式土器前半の古相・新相は大梁川遺跡調査報告の第II層土器変遷の理解(手塚・相原・加藤他:1988.3)とほぼ一致する。

大木10式土器前半から後半への変化(挿図4)

挿図4の下段は南相馬市(旧小高町)浦尻貝塚第1号住居跡埋設土器(a・b・c)、中段は利府町郷楽遺跡第121号住居跡埋設土器と七ヶ浜町大木開貝塚出土の山内資料である(福島大学考古学研究会:1971.10 阿部恵・鈴木真一郎:1990.3 早瀬・菅野・須藤:2006)。浦尻貝塚資料は図面修正の上、展開模式図を添えた。大木開貝塚資料にも相互に比較できるように展開模式図を加えた。浦尻貝塚は福島県北部であるが、郷楽遺跡は大木開貝塚北西約5kmの至近距離に位置する。

浦尻貝塚:浦尻貝塚第1号住居跡資料は埋設土器(3個)で、前述の大木10式土器前半新相にあたる。埋設土器はいずれも深鉢で、aは上半部が隆線に縁取られた波状磨き帯、下半部が変則的に横に繋いだ円文(隆線)で、LR斜縄文が施文されている。bは上半部に隆線に縁取られた又状帶状文(内部にLR斜縄文施文)5個を取り組ませて横に並べ、胴中央部に文様に沿った波状隆線を巡らせている。上半無文部は磨き帯で、上・下端が開放型のS字状となってい



挿図3 南境昌塚出土の大木10式主器とそれに接くもの(縮尺1/6)

る(口縁部は報告書図版E-2・3から推定)。cは上半部に幅広沈線でC字・横S字帶状文を描き、胴中央部に文様に沿った波状幅広沈線を巡らせたもので、文様内部・胴下半部にLR繩文を施文している。

浦尻貝塚資料と共通する組成を持つものは大梁川遺跡南側包含層第II b・a層の他に、同遺跡3号住居跡炉埋設・炉内土器、南相馬市(旧鹿島町)上棚窯遺跡住居跡炉埋設・床面出土土器(福島県立相馬高等学校郷土クラブ:1967.8)、相馬郡飯館村上ノ台A遺跡第4号住居跡炉埋設土器(鈴鹿良一他:1984.1)等がある。

郷楽遺跡と大木岡貝塚:郷楽遺跡資料は第121号住居跡の炉埋設土器である。深鉢上半部に隆線に縁取られたS字状磨き帯を4個横に並べ、その内の1個は下部で玉抱き文様を形成している。S字状磨き帯の隆線は口縁部まで延び、胴中央部では相互に連結している(結合型S字状文)。S字状磨き帯に囲まれた部分と、胴下半部には単節斜繩文(RL)が施文されている。

大木岡貝塚(山内資料)の沈線に縁取られた磨き帯間に縦位燃糸文が施文された資料2点は、郷楽遺跡資料と共通する文様構成をなすとみられる(展開模式図参照:一部に隆線を使用し、4個の横刻みを入れる)。基本的な違いは隆線と繩文、沈線と燃糸文の組合せである。山内資料のもう1点は、隆線に縁取られた磨き帯と斜繩文施文の鉢口縁部で、隆線は口縁部まで曲線的に延びている。この文様は変形S字状文ではないかと推定される。

郷楽遺跡・大木岡貝塚資料を比較すると、以上のような文様の共通性とともに、隆線系と沈線系の二者が存在することがわかる。さらに、郷楽遺跡・大木岡貝塚の結合型S字状文は、浦尻貝塚第1号住居跡炉埋設土器bの開放型S字状文の系譜上にあり、口縁部・胴中央部で隆線を接続させた形と言える。

このような現象を、「大木10式土器前半から後半への変化」としてとらえたい。その証明のために、他の遺跡での出土状況を検討することにしたい。

大木10式土器後半(挿図4・資料17・18)

宮城県南部:二屋敷遺跡第6号住居跡床面からは隆線に縁取られた結合型S字状・変形結合型S字状(1

段構成)磨き帯文の他に、玉抱き状磨き帯文とみられる深鉢が出土している(加藤・阿部・小徳:1984.3)。同様なものは菅生田遺跡第2号住居跡炉からも出土している(丹羽・阿部・小野寺:1982.9)。これらには単節斜繩文が施文されたものが多い。

一方、菅生田遺跡遺跡第10号住居跡の炉埋設土器は、隆線に縁取られた玉抱き部を形成するC・S結合磨き帯文が深鉢上半部に展開し、単節斜繩文が施文される。胴下半部は単節・複節斜繩文・条線文など多様である。床面から出土した深鉢は、上部に隆線に縁取られたC状磨き帯文が横に連続し、縦位燃糸文が施文されている。同遺跡第13号住居跡炉埋設土器2個は沈線に縁取られたC状磨き帯文が横に連続し、燃糸文・単節斜繩文が施文される。

二屋敷・菅生田遺跡のこれらの土器群が大木10式土器後半に位置づけられるとしても、二屋敷6住・菅生田2住・菅生田10住・同13住出土土器はそれぞれ一樣ではなく多様性がみられる。

層位の出土例としては大梁川遺跡南側遺物包含層第I層出土土器群がある(手塚・相原・加藤他:1988.3)。すでに述べた第II b・a層(大木10式土器前半新相)の上層である。隆線系としては、結合型S字状磨き帯文・同変形文(1段)・玉抱き磨き帯文・横長波溝文・横長格円文などがある。沈線文系は少數だが玉抱き磨き帯文がみられる。施文されるのは単節斜繩文と縦位燃糸文で、明確な使い分けを指摘することはできないが、結合型S字状磨き帯文に単節斜繩文が施文される傾向がある。

これらの大梁川遺跡第I層土器群は二屋敷・菅生田遺跡各土器群を包括する内容となっている。少なくとも、第II b・a層(前半新相:浦尻1住)→第I層(後半:郷楽121住)への層位的変遷は証明されたことになる。

宮城県中西部:大木10式後半の土器群は仙台市下ノ内遺跡SI6・7住居跡、同市山田上ノ台遺跡第15号住居跡からまとまって出土している(篠原・吉岡他:1990.3 主浜光朗他:1987.3)。

下ノ内遺跡SI6・7住居跡の床面出土土器のうち第40図2は接合関係にあるという(「報告書79・82頁」)。また、SI7住居跡は3号炉→2号炉→1号炉の

順で作られ、3・2号炉は同一床面上での作り直しとみられるのに対し、1号炉は住居内堆積土5層（旧床面より20cm高い）で検出されたという（「報告書112～117頁」）。また、2・3号炉主軸方向に位置する埋設土器は2号→1号の順であるという（「報告書116頁」）。したがって、同一床面における変遷は3号炉→2号炉、2号→1号床面埋設土器となる。

2号炉埋設土器は2個（72・73図1）で、胴上部が沈線もしくは隆沈線による玉抱き磨き帯状文で、結合部が鱗状突起となる。72図1は斜長C字磨き帯状文、73図1は菅生田遺跡第10号住居跡埋設土器に似ている。

床埋設土器（74・75図1）の74図（2号）は深鉢上部に沈線による横8字磨き帯状文が連続し、玉には刺突文、横長変形梢円文には撚糸文が施文される。75図（1号）は波状（大小4・4）口縁で、突起下部の半円形盤に梢円形刺突文を巡らせる。胴上部C字磨き帯状文を連結させ、単節斜縄文を施文している。

床面直上の深鉢（第77図3）は沈線による結合型S字状磨き帯文を横に繋いだもので、撚糸文（綴位・やや斜め）が施文されており、挿図4の大木岡貝塚出土山内資料に類似する。

山田上ノ台遺跡第15号住居跡の床面を覆う堆積土5層、その上の4層（堆積上下半部）からこの時期の土器群が出土している。5層からは沈線による結合型S字状・コノ字状・玉抱き連結磨き帯文を横に繋いだ深鉢（第104・105図）の他、隆線・沈線を部分によって使い分け、結合部を鱗状隆線にしたL字状磨き帯文で方形に囲んだ文様を横に連結した摺形深鉢（第107図）も出土している。

4層からは沈線による結合型S字状磨き帯文（第119図5：縄文施文部が隅丸方形）・隆沈線による結合S字とC字状磨き帯を組み合わせた玉抱き文を横に連結したもの（第117図：玉には刺突文、その他は無節斜縄文・綴卵状磨き帯文を4個配し沈線で横に繋いだもの（第115図1：卵状内部に刺突文、その他は撚糸文）などが出土している。第115図1の卵状文下部から鱗状に結合部へ延びる隆線には3個の横の刻みがある。

これらの土器群は磨き帯文に囲まれた地文部分

（縄文・撚糸文・刺突文）が主体かと思われるものが多いという特徴を持っている（方形状も含む）。

松島湾：松島町西の浜貝塚・東松島市里浜貝塚（梨木岡地区）から大木10式後半の土器が層位的にまとまって出土している（後藤・斎藤：1967.3・後藤勝彦：2008.3・芳賀良光：1968.12）。

西の浜貝塚ではAトレンチ13～15区の第1貝層から後期前葉（宮戸I b式）、第2貝層（下部貝層）から大木10式後半の土器群（1967年概報の第四層土器）が出土している。

第2貝層出土土器群は隆線文・隆線・沈線文併用、沈線文がある。列状刺突文には隆線文（部）に沿うものと、隆線上に加えられるもの、併用のものがある。文様はAグループ：口縁部のみのもの（山形突起と頭部隆線を鱗状に繋ぐ：20・29・32・37・47等）、Bグループ：上半部を横長C・コ・コ・」ノ状磨き帯文を横に繋ぎ、玉を抱くものもある（21・22・26・27・28・36・38・41・42・45・50・52・54等）、Cグループ：上半部を曲折S状磨き帯文で隅丸方形に囲むもので、連結部に鱗状隆線を伴う（13・17・46等）がある。空間部や胴下部には斜縄文・撚糸文などが施文され、玉の部分には刺突文が充填される場合がある。

これらの土器群は仙台市下ノ内遺跡SI6・7住居跡（炉・床面・床面直上）と較べると、次のような相違点を指摘できる。Aグループのように口縁部突起と頭部隆線間が鱗状隆線で定型化して繋がれるのは、西の浜貝塚第2貝層になってからである。下ノ内遺跡SI7住居跡では突起下部が半円形（刺突文施文）であったり、結合型S字磨き帯の上部のままである。西の浜貝塚ではB・Cグループのように各種磨き帯文に囲まれた部分は隅丸方形が主体であるのに対し下ノ内遺跡では曲線的玉抱き文様が盛行している。

以上のように、西の浜貝塚第2貝層土器群は一部玉抱きC字状磨き帯文が残るもの、下ノ内遺跡SI6・7住居跡出土土器群より新しい要素が多い。これらは、「山内清男先生作成 宮城県大木岡貝塚出土 大木式土器図版107上段」（山内先生没後25年記念論集刊行会：1996.8）に対応する可能性がある。これらを大木10式土器後半新相と仮称する（挿図4

上段参照)。したがって、下ノ内遺跡SI6・7住居跡炉・埋設土器・床面・床面直上土器群は古相と仮称する。

楠本コレクション資料17は西の浜貝塚Aトレンチ13～15区第2貝層の22に類似し、資料18は21・26・36・38の複合形態の特徴を示している。

東松島市里浜貝塚梨木田地区の発掘調査区層序は大木9式土器の考察でも触れたように①表土・②灰層・③キサゴ層・④キサゴ層下土層・⑤アサリ層・⑥純貝層・⑦混土層・⑧被碎貝層である。芳賀良光は出土土器を3群に分け、第1群土器(②灰層・③キサゴ層・⑤アサリ層・⑥純貝層出土土器群)、第2群土器(⑦混土層出土土器)、第3群土器(⑧被碎貝層出土土器群)と層位的に区別した。そして、第1群土器を大木10式に比定し、第2群土器を「大木9・10式両者の土器破片を含み(第4図VI・VII)この点問題となる(51頁)」、第3群土器を「山内氏の陸前大木9式の指標中の1つのタイプに併行する」とし、第2群土器について「第3群土器とは一型式を割する。第1群土器とは……一線を劃する。(52頁)」と述べている(芳賀良光:1968.12)。

図示されている土器は破片が多く、確実性は期したいが、現時点での他の遺跡出土土器群との対比を簡単にしておく。②灰層出土土器(第4図I)は西の浜貝塚第2貝層・⑤アサリ層・⑥純貝層出土土器(第4図IV・II)は下ノ内遺跡SI6・7住居跡・山田上ノ台遺跡第15号住居跡に類似し、いずれも大木10式土器後半のものとみられる。⑦混土層出土土器は第4図VI・VIIに限定すれば大木10式前半とみられるが、第5図IVに含めると大木10式後半古相までの幅をもつ可能性がある。⑧被碎貝層出土土器は大木9式土器であるから、⑦混土層以上とは芳賀が述べるように「型式を割する」ことになる。

この梨木田貝塚資料の意味は層位の出土で、下ノ内・山田上ノ台遺跡と西の浜貝塚資料の新旧を示す傍証になろう。

石巻湾:南境貝塚(大木10式土器の終末を巡って)

宮城県教育委員会による南境貝塚発掘資料は7・8トレンチの成果が公表されていることは既に述べた(後藤勝彦:2004.5～2005.3)。

第7トレンチでは大木10式土器は第14・15層か

ら出土している。第8トレンチでは第11層に比較的多いが、大木9式・8b式土器等の混入が目立つ。

第7トレンチは14層と15層で内容が異なる。第15層は幅広沈線に縁取られたC字帶状文(図21～47～50・56・58)が主体で、器面全体に文様が展開するもの(47・58)と脇部に波状沈線が巡るものがある(56)。隆線による文様を持つものもある(51・53・54)、中には横長波濤文もある(図20～37)。これらの土器群は大木10式前半のものと考えられる。

第14層はAグループ:円筒状深鉢で、縦の隆線と脇中央部巡る隆線を直交する形に繋ぎ、縦位方形状区画を形成するもの(図18～19・図19～21～25・図20～40など)。隆線は断面三角形で、二個一对の刻み目を施すもの(図19～21・図20～40)と列状刺突文を伴うもの(第19図23)、隆線のみのもの(図19～22)などがある。これらは沈線を併用し、磨き帶文(逆L状など)を沿わせるものが多い(図18～19・図19～21・23～25・図20～40)。

Bグループ:西の浜貝塚第2貝層土器群に類似するもの(図17～9・図18～12・15・16・図19～26～33など)。

南境貝塚7トレンチ14層土器群は組成として一時期をなすのか、過渡的なものか、それとも幅のある土器群なのか問題となるところである。そこで、南境貝塚の北14kmに位置する石巻市桃生町山居遺跡南側遺物包含層の状況をみてみたい(相原淳一:2007.12)。SX01②遺物包含層2c層(C5西ベルト)からは南境貝塚Aグループ類似の土器が比較的まとまって出土し、Bグループかと思われる破片も少數(3点)含まれている(第45・46図)。その上層(C5区2b'層:57図)からはボタン(小輪)状貼り付けをもつ土器群が出土している。興味深い層位の成果である。

したがって、南境貝塚7トレンチ14層土器群は大木10式後半新相(西の浜貝塚第2貝層)と山居遺跡SX01②遺物包含層2c層(C5西ベルト)出土土器群への過渡的なものか、時間的幅のある資料となる。

楠本資料17は14層Bグループ(西の浜貝塚第2貝層土器群対応)の図17～9に良く似ている((後藤勝彦:2004.5)。楠本資料18は南境貝塚7トレンチ



挿図4 大木10式土器前半から後半への変化 (縮尺1/6)

14層A グループ・山居遺跡2c層の2個一対刻みをもつものと共通するが、隆線に沿う磨き帯は幅が狭まっている。さらに、楠本資料19は縄文施文後に隆線が貼り付けられ、磨き帯は磨消縄文になっている。南境貝塚7トレンチ14層A グループ・山居遺跡2c層土器群がすべてこのような工程をとるかは明らかでない。

南境貝塚第14層A グループ・山居遺跡2c層土器群を大木10式土器に含めるとしても、文様構成(擬方形)・文様表現技法で終末の様相を示し、その施文工程に大きな転換点を迎えることは確かである。

なお、西の浜貝塚第2貝塚土器群(概報の第四層土器)と門前貝塚第2a類土器の間に介在するものは藤沼邦彦によって沼津貝塚資料に基づき1970年以前から考えられていたが、その具体的な内容の調査を積極的に推し進めたのは阿部正光である(吉田義昭:1960.3 丹羽茂:1971.2の16・18頁 阿部正光他:1976.3 注:阿部正光の成果は西の浜貝塚1967年宮城県教育委員会発掘調査のE3、G1・3・13トレンチ出土土器の整理結果に基づくもので、実測図のコピーは身近な人々に配布されたが、まだ公表されていない。概報:加藤孝:1968.3)。

まとめ 楠本コレクションの大木10式土器理解のため各遺跡の出土状況を検討した。その結果、大木10式土器は前半(古相・新相)、後半(古相・新相・終末)の土器群が存在することがあきらかになった。山内の大木貝塚出土大木10式土器資料は後半(古相・新相)が大部分を占める(図版106下段・図版107 山内先生没後25年記念論集刊行会1996.8)。

しかし、以上で述べた大木10式土器の変遷過程をみると、共通原則として横方向の文様展開を示すこと、大木9式土器の△文から生まれたC・S字に縁取られた文様を基本として、縄文施文部主体から磨き帯主体へと変化していくことを指摘できる。終末には方形区画文に沿う狭い磨き帯になってしまい、磨消縄文技法(地文の後に文様を描く)も開始される。このことは次節で検討する。

ここでは、楠本コレクション資料の位置づけを整理しておきたい。これまで、直接検討の対象にした

のは次の資料である。

大木10式前半:資料12・13

大木10式土器後半・終末:資料17・18・19

若干補足すると、資料12は前半の古相、資料13は前半の古相・新相両者の可能性がある。資料17・18は後半の新相、資料19は終末に位置づけられる。

次に、未検討資料について説明する。

資料14の隆線による二重波濤文の小形深鉢は、その形状から前半の新相と思われるが後半まで残る可能性はある。

資料15の左右に上下一対の吊手付き土器は大木9式の資料10から系譜的に繋がるものである。両側吊手と胴中央部の隆線で台形状に区切り、内部に沈線による隅丸台形状文があり、複節斜縄文が施文されている。山田上ノ台遺跡第2・19号住居跡のものとは器形に異なる。器形が算盤玉状で吊手を持つ鉢は仙台市沼遺跡SI5住居跡から出土している(工藤信一郎他:1992.3)。大木10式土器前半の可能性はみられるが、確定は難しい。

資料16の小形壺は燃糸文が施文されている。胴部が算盤玉状をしていることから、後半でも古相のものと考えられる。これも確定は難しい。

資料28の浅鉢は口縁部と縦の磨き帯で5分割されている。磨き帯の幅が一定し、斜縄文も充填施文である。後半の新相に伴うもので、終末までは降らないと考えられる。

資料30の蓋は左右の把手が8字帶状をしている。この種の文様は、仙台市沼遺跡SI5住居跡や山田上ノ台遺跡20号住居跡(主浜光朗他:1987.3)から出土し、前半新相以降に時折みられる。

資料31の蓋は半扇状区画に楕円形刺突文を充填施文している。この種の刺突文は後半古相に盛行し一部新相まで残る。

資料37の深鉢は4個の山形突起をもつもので、器形的に類似するものは後半新相から後期初頭の里浜貝塚袖窪地区(小笠原好彦:1993.11)から出土しており、確定は難かしい。

資料38の深鉢は後半新相に盛行する大形深鉢や樽形深鉢との関連を考えさせる。また、同様な器形は里浜貝塚袖窪地区にもみられる。

以上、特殊な器形や粗製土器についていは、確実な比較資料が少なく、推定の域をでるものではない。ご寛恕をお願いしたい。

大木10式土器に続くもの

挿図3の右側5点の土器(資料20～24)は、楠本が大木10式(資料20・23)・大木10式?(資料21・22)、伊東・藤沼が後期南境式(資料21・22・24)としたものである(楠本政助:1973.5 伊東・藤沼他:1981.10)。中期大木10式土器の終末と後期南境式土器の開始に関わる土器群である。評価の分かれ目は山内清男の大木貝塚出土大木10式土器資料図版106上段左の鉢形土器(山内先生没後25年記念論集刊行会:1996.8)の理解に関わるものと思われる。楠本の理解は山内資料と同一時期とみるものであろう。

伊東は『宮城県史1 古代史』で「中期の終わりにはじまった器形の分化と擦消繩文の使用は、後期に入りますますさかんになる。後期の初めの南境式土器は大木10式の延長を見てよい。」「県内のこの時期の遺跡としては南境貝塚が昔から知られており、南境式という名称もそこから起こっている」(伊東信雄:1957.3 44頁)と述べている。『宮城県史34 考古資料集』(伊東・藤沼他:1981.10)は、その後発見された資料で構成され、「県内でもっとも一般的に用いられている次のような編年を使用した」としている。中期は大木7a式から大木10式まで、後期は南境(宮戸I b)・宝ヶ峯(宮戸II ab)・金剛寺(宮戸III ab)式土器である(380・381頁)。

まず、問題となる山内資料の小形鉢については、大木8b式土器(加藤孝:1956.6・12)と、大木10式土器後半とする(興野義一:1996.8)見解がある。お二人とも山内清男の指導を受けた方々である。今の時点で、どちらが適切なのか判断し得る資料を明らかにすることはできない。2個一対の山形突起と貫通孔、貫通孔周囲の膨らみは小輪貼付の前段階ともみられるが、確定できない。この資料の位置づけは今後の課題となろう。

土器群の特徴 次に資料20～24の特徴と類似例の出土状況を検討することにする。これらの土器群は

山形の突起をもつもの(20・23・24)・小低突起をもつもの(22)・平口縁のもの(21)がある。文様の特徴としては①文様の結節点に粘土貼り付けによる小輪が配置されるもの(20・21・24)、②並行状沈線によるもの(21～24)。③施文工程が地文→文様→(磨消繩文)のもの(20・21～23 ※24は確定困難)。④文様は横・斜め・菱形・渦巻・蛇行など方向が一定しない。

資料20は横に連続するノ字状磨き帯と扇状繩文部が横に連続する。

資料21は並行状沈線で菱形文を描き、横に連続する。並行状沈線間にには列状刺突文が加えられる。

資料22は並行状沈線でL状・方形状文様を横に連属させ、筋交い状文を入れる。並行状沈線間にには列状刺突文が加えられる。

資料23は並行状沈線で下向きの渦巻文・縦横蛇行文を描き、内部の繩文を磨り消す。

資料24は並行状沈線でL字・J字・巻き込みJ字状文を描き下端を繋ぐ。

このようにみると、①小輪貼付・②並行状沈線・③並行状沈線間の列状刺突・磨り消しなどが特徴となる。これらの中で文様的にも技法的にも古い要素(大木10式後半新相以降)を残すのは資料20である。また、大木10式的要素から脱却しているのは、資料21～23である。

類似資料の出土状況

南境貝塚7・8トレンチ 7トレンチ13層では小輪貼り付け・連鎖状文様が出現し、第12層ではそれらと共に並行状沈線文・円形凹文(小輪の退化形)も現れる。後藤は第12・13層土器群について、これらの特徴を踏まえ、「大木10式と違った磨消手法が多用され……後期の要素が強いものである。大木10式から分離されるものと考えられる」と述べている(後藤勝彦:2004.5 80頁)。

8トレンチ9層からは7トレンチ12層土器群と共通するものがまとめて出土している。並行沈線間に列状刺突文の加えられたものもみられるが、それらは釣針状文様や小部分に過ぎず、資料21・22のように器面全体に主体文様として展開するものは明らかでない。後藤は「門前式周辺に相当するものと考

えられる」とする(後藤勝彦:2005.3 26頁)。

確かに、**門前貝塚第6号貝塚第4区出土土器**(吉田義昭:1960.3)と共通性が高い。宮城県内では石巻市山居遺跡SX01②遺物包含層2b'層(C5区)出土土器群(相原淳一:2007.12)、栗原市(旧一迫町)**青木畠遺跡第IV層出土土器**土器群が類似する(加藤道男:1982.3)。青木畠遺跡では、L字状並行沈線と横位沈線の組合せによる方形文を横に繋ぎ、楕円形刺突文を列状に加えているものもある。しかし、刺突文の特徴・文様の展開は資料21・22と異なる。

楠本コレクションで、南境貝塚8トレンチ9層土器群と文様・技法的に共通性がみられるのは、資料20・24で、さらにはあげるとすれば資料23である。

里浜貝塚袖窟地区 林謙作は袖窟地区貝塚出土器を「宮戸I式(南境式)」に先行するものとして4点の土器実測図を示し「袖窟式」とした(林謙作:1965.7 図26)。その後、小笠原好彦によって出土土器のほぼ全容の紹介と編年的位置が論じられた(小笠原好彦:1993.11)。小笠原は、C3・拡張区(混土貝層)→C1・2区・B1~4区(黒色土層)の層位関係と土器群の特徴(大木10式の系譜→沈線文を多用・幾何学文様)から、後期初頭において袖窟I式からII式に変遷し、袖窟I式は「門前式土器と併行する編年的位置が与えられる」(16頁)とした。さらに、袖窟II式は文様構成からみると後藤勝彦の宮戸I b式より古いた想定した(19頁)。

C3・拡張区土器群からC1・2区・B区土器群への変化は妥当なものと思われる。しかし、小笠原がC3・拡張区の「大木10式の系譜を強く引いた文様を施文した」ものは第4図7・10の2点である(逆L字形磨消縄文)。一方、C1・2区・B区の「幅の狭い磨消縄文で幾何学的な文様を施文したり、沈線文を多様した文様構成」は第5図3~5・9・10とするが、①特徴的な技法(「ボタン状の粘土」貼付・「連続刺突文をつけた隆起線」など)は共通している。②第1群B類・第2群A-B類は両地区的土器が同一分類になっている。③第6図の両地区出土破片(拓本)では区別し難いものも多い。このような理由から袖窟I式土器・袖窟II式土器と、それぞれ独立した土器型式と理解するのは難しいのではなかろうか。

後期初頭に位置づけられること、共通要素を含みながらも袖窟I群(古相:C3・拡張区)→袖窟II群(新相:B・C1・2区)へ変遷したとする方が理解しやすいと考えられる。

南境貝塚資料との比較 このような立場に立って、南境貝塚と袖窟地区貝塚出土資料の比較・検討を行うことにする。南境貝塚8トレンチ9層土器群は文様の明確なものが多い。袖窟地区貝塚で他地域からの搬入とみなした大突起を持つもの(小笠原の門前式土器)も、南境貝塚では土器組成の一部を構成するものである(8トレンチ図9-9~11・15など)。大木10式土器終末の系譜を引くものも存在する(8トレンチ図9-1~4・8など)。南境貝塚8トレンチ9層土器群と袖窟I群土器(C3・拡張区)は併行関係にあると考えられる。

南境貝塚で、未だ層位的に明確でないのは袖窟II群土器の段階である。それに該当するのが楠本コレクションの資料21・22であろう(楠本の大木10式?)。袖窟II群土器(B・C1・2区:5図4・5・7)に文様構成・施文技法が類似する。また、資料23は南境貝塚8トレンチ9層に位置づけたが、袖窟II群土器との関連も考慮される。問題点としておきたい。

まとめ 南境貝塚7・8トレンチ・里浜貝塚袖窟地区的発掘調査資料を検討することによって、資料20~24の位置づけに関する問題は、ほぼ解消したのではないかと思う。これらの土器群は後期前葉「南境式土器」の古い部分としておきたい。これらは、古相(資料20・24:南境8トレー9層・袖窟C3・拡張区)、新相(資料21・22:袖窟C1・2・B区)の変遷がみられる。

なお、資料42・43は深鉢の底部、資料50は袖珍土器で、今のところ確實な位置づけは難しい。この頃のものとだけしておきたい。

後期・晚期の土器

楠本政助が後期前葉・後葉・晚期に位置づけた資料と、それに類するものについて触れておきたい。
後期初頭~前葉の土器1 資料25・41は「堀之内I・同式併行」、資料26は「後期初頭」と台帳にある。「堀之内I」とは関東地方の後期前葉に位置づけられる

「堀之内1」式土器のことである。

資料25は繩文の施文された細身の深鉢胴下半部で、破損部に粘土小輪の貼り付けがあり、その間を下向きの弧状沈線が繋いでいる。堀之内式土器(旧型式)の深鉢にやや近いものがあるが、胴下部は磨き仕上げで、細隆帯で画している(図版50 山内清男: 1967.12)。器形・繩文施文・小輪貼付手法の点では、資料24など南境式土器の古い部分と共通する。

資料26は胴下部に細沈線で下向き・入組弧状文を描くものである。文様的にやや似たものは南境貝塚8トレンチ第9層(図10-30-37)にも見られる。口縁・胴部を欠いているため、確定できないが南境式土器の古い部分の可能性もある。

資料27は楠本による型式名の記載はない。逆台形状の深鉢で、繩文施文後縦位並行沈線間に列状の短沈線を加えたものである。刺突文であれば資料21・22と同じであるが、新しい要素がみられる。しかし、里浜袖窪地区貝塚C1・2区から、沈線間に列状短沈線を加えたものが出土している(6図13: 小笠原好彦: 1993.11)。南境式土器古い部分の新相に含まれる可能性もある。

資料41は全面ミガキのコップ形深鉢で、類例を明らかにしない。

後期初頭～前葉の土器2 資料34・36・39・40・51は繩文のみが施文された粗製土器である。資料39はラベルに「(称)併行」、資料40は「南境式並行」とあり、資料51は「称名寺」と筆記されている。「(称)・称名寺」とは「称名寺式土器」のことと思われる。称名寺式土器は横浜市称名寺貝塚発掘資料に基づいて設定された関東地方後期初頭の土器型式である(吉田格: 1956.2 1960.9)。しかし、粗製土器で称名寺式土器と比較するのは難しい。

資料39・40は里浜袖窪地区貝塚C3・拡張区の深鉢(4図11)と器形・繩文の方向など共通する。器形だけなら青木畠遺跡第IV層の深鉢(第6図19)とも近い。

資料36は里浜袖窪地区貝塚C1・2・B区の深鉢(5図12)や、門前6号貝塚第4区の深鉢(第8図2・3)とも共通性がある。

資料34は資料21・22と、やや器形的に似ている。

資料51の袖珍土器は難しいが「称名寺」記名からこれらの時期に伴うものではなかろうか。

以上のように、これらの粗製土器も南境式の古い部分の可能性がある。次に、楠本が「称名寺式」という型式名を使用しているので、南境式との関係について可能な範囲でふれておきたい。資料21・22や里浜袖窪地区貝塚C1・2・B区の深鉢(5図4)にみられる沈線間に列状刺突文を加える手法は称名寺B貝塚の深鉢(第十圖6)にもみられる。この点からすれば、南境式土器の古い部分(新相)は称名寺B貝塚出土土器群と併行関係にある可能性は高い。称名寺A貝塚土器群との関係は明確にはしにくいが、A貝塚→B貝塚の変遷が正しいと仮定した場合、それに対応するのは南境式土器の古い部分(古相)の可能性が生じる。

楠本が南境式の古い部分を大木10式(一部)・大木10式?としたのはこの辺のことが関係しているのではなかろうか。

後期初頭～前葉の土器3 資料44～46は無文で、44は鉢、45・46は台付塊である。44は「南境」、45・46は「南境 昭33-7」の筆記がある。したがって、資料45・46は昭和33年7月の表面採取によるものである。資料44は区名も記入されていないことから、表面採取の可能性もある。

楠本は『矢本町史 先史』の図版50・51で資料44・45を「繩文後期 南境式」としている。筆者には確たることはわからないが、採取状況もしくはそれ以外に、縦年の位置を知り得る状況にあったのである。資料46も45に類似しており、同時期の可能性がある。

後期後半の土器 資料47は楠本が『矢本町史 先史』の図版65で「繩文後期 金剛寺式」としている小型注口土器である。この種の土器と器形・文様が類似するのは、丸森町清水遺跡A地点遺物包含層から出土した小型注口土器である(図3-9 志間泰治: 1960.9)。

資料64の関連事項でも述べたように、志間は宝ヶ峯式から金剛寺式への過渡的存在かも知れないとしていたが、「宝ヶ峯遺跡」において、後期後葉に含めている(志間・桑月: 1991.11)。また、「西ノ浜式」と

する見方があることも事実である(後藤勝彦:1962.6
関根達人:1993.9)。ここでは金剛寺式初期の土器とだけしておきたい。

資料52の小形壺は「南境 33-4」と筆記があるので、昭和33年4月に採取されたものとみられる。底部にある「宝ヶ峯」の墨書きは型式名かもしれない。宝ヶ峯遺跡では「後期～晩期」とされる多様な小形土器・袖珍土器の出土が多い(志間・桑月:1991.11)。晩期の土器 資料48の小形皿は、胴部が縄文だけであるが、口縁部に2個一対の小突起が巡る。これらの小突起を上から見ると、Y字状の浮影になっている。このような口縁部の特徴をもつ皿・浅鉢は摺薪遺跡第1遺物包含層19層(第79図7・8)などから出土し、第V期(大洞C1式期)とされている(阿部・柳沢他:1990.3)。

資料49の注口土器は楠本が『矢本町史 先史』の図版82で「縄文晩期 大洞C2式」としている。この注口土器は胴部が算盤玉状で、注口部の両側が張状三角形になるタイプである。口縁部内面に1条の沈線が巡り、文様は斜縄文と頸部・上半裾を巡る並行状沈線のみである。

器形・口縁部の内外面の沈線は、摺薪遺跡第1遺物包含層12層下A層上面(第216図)などと共に通する。摺薪遺跡例は大洞C2式の特徴的な文様が施文され、第VI期(大洞C2式旧段階)に位置づけられている(阿部・柳沢他:1990.3)。資料49もこの頃のものとみて良いと思われる。

仁斗田貝塚出土土器

発掘調査について

仁斗田貝塚の発掘調査は昭和39年で、発掘区は仁斗田内山地番150の電柱隣接地に、幅40cm・長さ1mのトレンチを設定して行われた。楠本の調査報告によれば、既に事実記載で述べたように「層位等については上部が大木9・10式、下部に大木8b式、最下部に近いところから大木7式期の土器片が認められる程度のことしかわかっていない。」という(楠本政助:1973.8)。層名の記録はないが、台帳には骨角器などについて土器型式名が記載されている。調査方法としては南境貝塚の場合と同様に、大木9式の層・

大木8b式の層という遺物の取り上げ方であったと考えられる。

出土土器について

資料53・54・56・57は調査報告(楠本政助:1973.8)、資料55は『矢本町史 先史』(楠本政助:1973.5)に写真が掲載され、資料53は大木8b式土器、資料54・57は大木9式土器として、簡潔な説明が加えられている。南境貝塚の場合と同様に妥当な見解といえる。ここでは、類例の指摘と若干の補足説明を加えることとする。なお、資料58の大木1式土器(破片)については、既に事実記載の「関連事項」で述べておいたので、ここでは触れない。

大木8b式土器

資料53 口縁部に1個の立体的な大突起をもつ胴部キャリバー形の大木8b式土器は、大松沢貝塚などでも知られていなかった(加藤孝:1956.6・12)。端正な作りで、造形的に優れており、胴部文様に対して、楠本が「各区画は沈線による渦巻文が組み合わされて華麗な文様をつくっている」と述べているのはもっともある。

その後、類似する資料は七ヶ浜町大木圓貝塚(DF72区L2:図5-2 図版I-2)や七ヶ宿町小柴川遺跡第2号配石遺構(第327図1 図版61-4)等から出土しているが、やや寸詰まりである(八巻正文他:1974.3 真山悟他:1987.3)。

資料53の基本的文様は曲流渦巻文で、棘(剣先)状文様を伴う。この点では南境貝塚の大木8b式土器や大松沢貝塚等出土土器の文様と共通するが、連結部に(結果的に)渦巻精円文を形成するという違いがある(第16図の展開図参照)。このような文様構成は川崎町中ノ内B遺跡第1号住居跡・第1号土壙出土土器群(伊藤・須田:1987.3)の文様へと繋がる新しい要素である。

資料53は造形的に優れているとともに、大木8b式土器の変遷を知る上で興味深い資料と言えよう。

大木9式土器

資料54・57 南境貝塚の項で述べたように、大木

9式土器は組成が変化しつつ変遷している。文様的には、資料54はAグループ：渦巻文を併用するもの、資料55～57はBグループ：縦位横円文・匁文からなるものに該当する。

仁斗田貝塚の大木9式土器は青島貝塚Fトレンド4層土器群と共通性が高く、その主体は大木9式土器の後半のものと考えられる（加藤・後藤他：1975.3）。青島貝塚でも縦位渦巻匁文の土器が少數みられるが、資料54がそれらと同一かは難しい所である。Aグループの資料54については大木9式の中項に遡る可能性もある。

東北地方の遺跡

南境貝塚・仁斗田貝塚出土土器については、発掘調査資料を中心に、検討を加えてきた。東北地方各地の採集資料（寄贈を含む）については、「関連事項」の項目で、類例の指摘をしておいた。ここでは、その結果を整理しておきたい。なお、仁斗田貝塚の資料58は発掘調査資料でないので、ここで扱うこととする。なお、挿図5は、それらの資料の主なものを編年順に配列したものである。参照していただきたい（南境貝塚の資料47も、この中に組み込んだ）。

仁斗田貝塚（資料58）：大木1式土器

宝ヶ峯遺跡（資料59～70・107）

南境式土器：資料59

宝ヶ峯式土器？：資料60・61

宝ヶ峯式土器：資料62・63

金剛寺式土器初期：資料64

後・晚期：資料65・66

大洞BC式土器？：資料67

大洞BC式土器：資料68・69・70・107

沼津貝塚（資料71～82・108）

宝ヶ峯式土器？：資料71・73

大洞BC式土器：資料76

大洞C1式土器：資料77・78

大洞C2式土器：資料108

大洞C式土器？：資料72

晚期前半～中項：資料79

大洞A式土器：資料80

大洞A'式土器：資料81・82

後・晚期：資料74？・75

泉沢貝塚（資料83）：宝ヶ峯式土器

二渡貝塚（資料84）：大洞B式土器

尾田峯貝塚等（資料85・86）：大洞B式土器

平田原貝塚（資料89）：大木2式土器

西の浜貝塚（資料87・88）

宝ヶ峯式土器：資料87

後期後半？：資料88

いわき市平の貝塚

大洞BC式～C1式土器：資料90

大船渡市泊貝塚（資料91・92）

大洞BC式土器：資料91

大洞C2式土器？：資料92

鰐ヶ沢町の遺跡（資料93）：円筒下層d式土器

八戸市是川中居遺跡（資料94）：大洞C2式土器

長七谷地貝塚（資料95～106）：赤御堂式土器

楠本コレクションの意義

楠本コレクションの意義は次の3点にまとめることができる。第1は「はじめに」でも述べたように、多くの出版物に縄文土器の代表的資料として写真が掲載されたり、研究資料として活用されてきたことである。それは学術的価値とともに、個々の資料を豊富な知識と優れた技術で復元・修復し、多くの人々が活用できるようにしたからにはならない（「関連事項」参照）。このことは、研究者のみならず、一般の人々にとっても、今後とも有益なことである。

第2は学術的な面である。楠本政助氏の南境貝塚発掘調査は層位に基づくもので、編年の位置づけも一部（中期末期初頭）を除けば、正確である。これは表面採取資料や遠藤源七氏などから寄贈された資料においても発揮され、今回類似資料の調査を行った結果ともほぼ一致する。

第3は楠本コレクションには、南境貝塚を始めとする多量の縄文土器の他に、土製品・石製品・骨角牙貝製品がある。楠本政助氏の骨角製漁具の使用実験は高く評価され、縄文時代の生活を解明する上で重要な役割を担っている。これらの資料は台帳に登録され、編年の位置づけである土器型式名が記載されている。今後の調査は実物資料と台帳との対象作

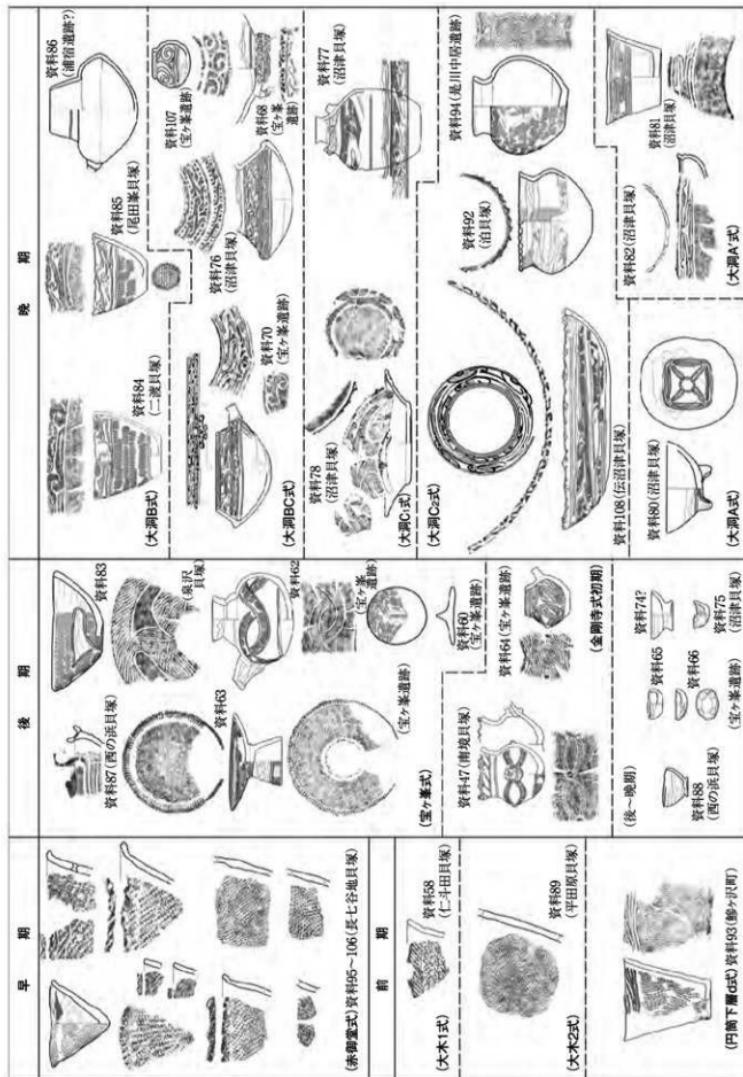


図5 東北各地探査の調査土器（早期・中期・後期・晚期）（縮尺1/6）

業が欠かせないものとなろう。

今後のために付言すると、楠本台帳に「称名寺」等の型式名が頻出する。このことをご本人にお尋ねしたところ(2008年9月8日)、今回「南境式土器の古い部分」とした土器群に伴つたものであるという。参考までに記しておく。

終わりに

最後に、今回の縄文土器調査では「はじめに」に記したように、多くの方々にお世話になつた。また、各地の発掘調査報告書・論文における研究成果に負うところが多い。各地で遺跡の発掘調査・遺物整理・報告書・論文作成に尽力されている方々に深甚なる感謝を申し上げたい。

なお、今回の調査結果に誤りがあれば、筆者の能力の至らざる所である。発掘調査成果に基づき、訂正していただくことをお願いしたい。また、縄文土器の実測図については、自分なりに工夫してきたつもりでいたが、モース(1879)『大森貝塚』の図解(EXPLANATION OF PLATES.)を見て、その素晴らしさに愕然とした。モースの指導によるアーティスト木村の彩色された実測図は見事である。筆者の実測図は表現方法も異なるが、分かり易さは及びもつかない。実測図の改良とともに拓本・写真を併用し、忠実性を心がけるだけであった。

なお、印刷用トレース図は筆者(ロットリングイソグラフ)と加藤道男氏(デジタル)が共同で製作した。氏の協力に感謝したい。

引用・参考文献

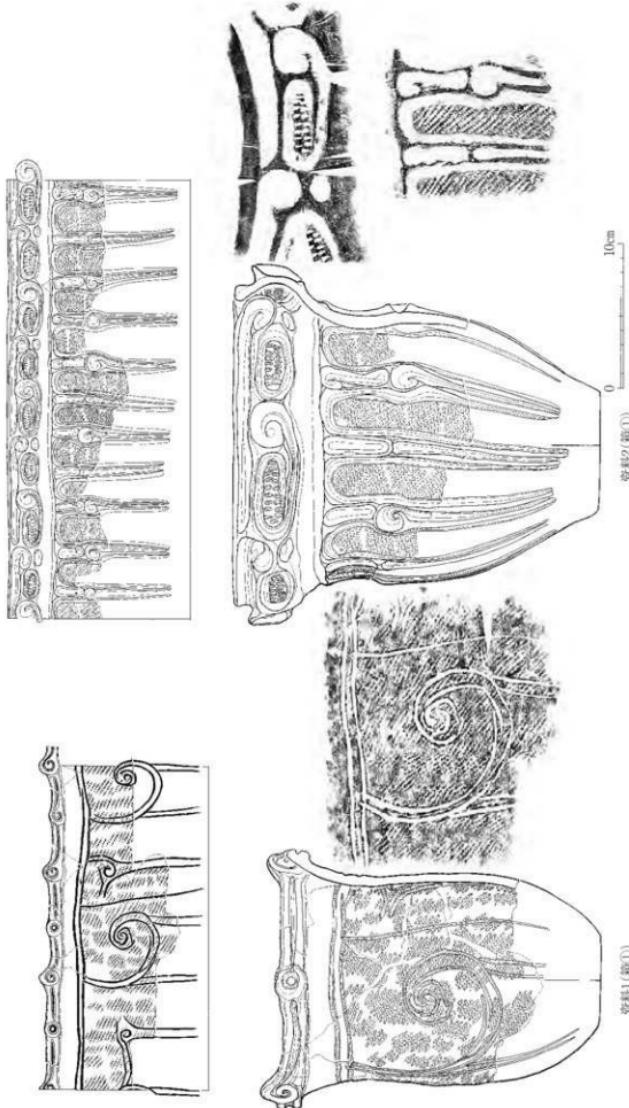
- 阿部明彦(1978.5)「村山市古道遺跡第2号住居跡出土の土器」「さあべい」第3巻 第1号 9~15頁 さあべい同人会
- 阿部正光他(1976.3)「沼津貝塚の考古学的調査」「沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書」8~60頁 付図 石巻市教育委員会
- 阿部・鈴木(1990.3)「利府町那楽遺跡Ⅱ 縄文時代中期の構造と出土遺物」「利府町文化財調査報告書」第5集 25~66, 177~183頁 図版
- 版4~15
- 阿部・柳沢他(1990.3)「沼沢遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第132集 1~1162頁
- 会田容弘(1996.1)「松本彦七郎博士の層位的発掘の再検討—宮城県・里浜(宮戸島)貝塚の資料による—」「古代文化」第48巻第1号 35~50頁
- 会田容弘(1999.3)「里浜貝塚」「鳴瀬町文化財調査報告書」第5集 原色図版1~8 本文1~38頁 図版1~77
- 相原淳一(2007.12)「山居遺跡(縄文時代編)」「宮城県文化財調査報告書」第214集 2~304頁 図版1~108
- 伊東信雄(1957.3)「古代史」「宮城県史1」3~171頁 図版1~31
- 伊東信雄(1977.12)「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」「考古学研究」第24巻第3・4号 164~170頁 考古学研究会
- 伊東・須沼他(1981.10)「縄文時代」「宮城県史34史料集V 考古資料」図版1~146 本文379~411頁
- 伊東・須藤(1985.3)「山王廻遺跡調査図録」1~15頁 図1~4 原色図版1~11 写真図版1~37 付図1~2
- 伊藤・須田(1987.3)「中ノ内B遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第121集 401~466頁
- 石巻公民館(1964.10)「石巻周辺古代遺物展」「目で見る郷土史 シリーズ1」1~9頁 石巻市教育委員会
- 石巻市教育委員会(1976.3)「沼津貝塚保存管理策定事業報告書」1~60頁
- 宇部・小久保他(2002.3)「是川中居遺跡 長田沢地区」「八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書」第2集 1~193頁
- 江坂輝彌(1955.10)「青森県女館貝塚発掘調査報告」「石器時代」第2号 36~45頁 PL. IV
- 江坂輝弥(1957.5稿)「三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査略報」「奥南史苑」第2号 1~10頁 青森県文化財保護協会八戸支部
- 江坂・笹津・西村(1958.9)「青森県蟹沢遺跡調査報告」「石器時代」第5号 20~37頁 PL. II~IV
- 江坂輝弥(1959.6)「縄文文化の発現 縄文早期文化」「世界考古学大系」第1巻 39~60頁 図版

- 14 「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」平凡社
- 江坂輝弥(1964.3)「國版88解説」山内清男編著『日本原始美術』講談社
- 江坂輝彌編(1970.6)「石神遺跡」1~65頁 PL1~40 ニュー・サイエンス社
- 小笠原好彦(1993.11)「袖淵貝塚出土の縄文後期初頭土器」『宮城史学』特別号 4~22頁 宮城歴史教育研究会
- 小野寺祥一郎(1980.3)「金取遺跡」「宮城縣文化財調査報告書」第70集 1~61頁
- 大竹・山崎編(1988.3)「薄磯貝塚」「いわき市埋蔵文化財調査報告」第19冊 本文編1~607頁 図版編1~142 國版説明3頁 付図1~6 福島県いわき市教育委員会
- 鹿角・二本柳・佐藤・渡辺(1960.4)「早稻田貝塚」「上北考古会報告」1~3頁 國版I~XIX 第1~3図 上北考古会
- 加藤孝(1956.6~12)「陸前國大松澤貝塚の研究(その一・その二)」「宮城学院女子大学研究論文集」9~10 63~72頁 139~156頁
- 加藤孝(1968.3)「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報(第2次)」「宮城縣文化財調査報告書」第16集 1~37頁
- 加藤・後藤他(1975.3)「宮城縣登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」「南方町史資料編・第一部」1~274頁
- 加藤道男(1982.3)「青木烟遺跡」「宮城縣文化財調査報告書」第85集 1~84頁
- 加藤・阿部・小島(1984.3)「二屋敷遺跡」「宮城縣文化財調査報告書」第99集 1~868頁
- 金子・和田他(1968.5)「綱取C 地点貝塚の発掘」「小名浜」79~126頁 第1~9國版 福島県いわき市教育委員会磐城出張所
- 金子裕之(1996.3)「曾谷貝塚資料」「奈良国立文化財研究所史料」第43冊 1~24頁 PL1~41
- 金子・安孫子(1998.3)「加曾利B式土器資料」「奈良国立文化財研究所史料」第49冊 1~28頁 PL1~73
- 茅野嘉雄(2008.6)「円筒下層式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』218~225頁 アム・ブロモーション
- 興野義一(1996.8)「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」215~224頁「山内清男先生作成 宮城県大木貝塚出土大木式土器の型式別写真」國版96~107 『画龍点睛』山内先生没後25周年記念論集刊行会
- 楠本政助(1960.10)「宮城県南境貝塚出土の雞頭話について」「東北考古学」第1輯 34~36頁
- 楠本政助(1973.5)「仙台湾における先史狩獵文化」「矢本町史」第1巻 47~264頁
- 楠本政助(1973.8)「石巻市田代鳥仁斗貝塚」「石巻地方の歴史と民俗」「宮城県石巻工業高等学校創立10周年記念論集」5~24頁
- 楠本政助(1976.2)「縄文人の知恵にいどむ」1~247頁 筑摩書房
- 楠本政助(1980.6)「縄文生活の再現 - 実験考古学入門」1~230頁 筑摩書房
- 工藤信一郎他(1992.3)「沼遺跡」「仙台市文化財調査報告書」第166集 1~111頁 國版1~46
- 工藤竹久(1989.4)「縄文尖底系土器様式」「縄文土器大観1」293~296頁 小学館
- 熊谷常正他(1987.3)「根井貝塚発掘調査報告書」「岩手県立博物館調査研究報告書」第3冊 1~100頁 國版1~28
- 熊谷常正(2008.6)「縄文条痕土器(東北地方)」「絶観縄文土器」104~111頁 アム・ブロモーション
- 小林・小川編(1989.4)「縄文土器大観1」1~358頁 小学館
- 後藤勝彦(1957.1稿)「陸前宮戸島里浜台貝塚出土の土器編年について」「塩竈市教委教育論文」第二集 1~6頁
- 後藤勝彦(1960.9)「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究」「宮城県の地理と歴史」第2輯 109~122頁 地域社会研究会
- 後藤勝彦(1962.6)「陸前宮戸島里浜台貝塚出土の土器について」「考古学雑誌」第48巻第1号 37~48頁 日本考古学会
- 後藤・斎藤(1967.3)「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」「宮城縣文化財調査報告書」第13集 1~36頁
- 後藤勝彦(1968.3)「埋藏文化財第三次緊急発掘調査概報 - 南境貝塚 - 」「宮城縣文化財調査報告書」第15集 1~46頁
- 後藤勝彦他(1969.3)「埋藏文化財第四次緊急調査概

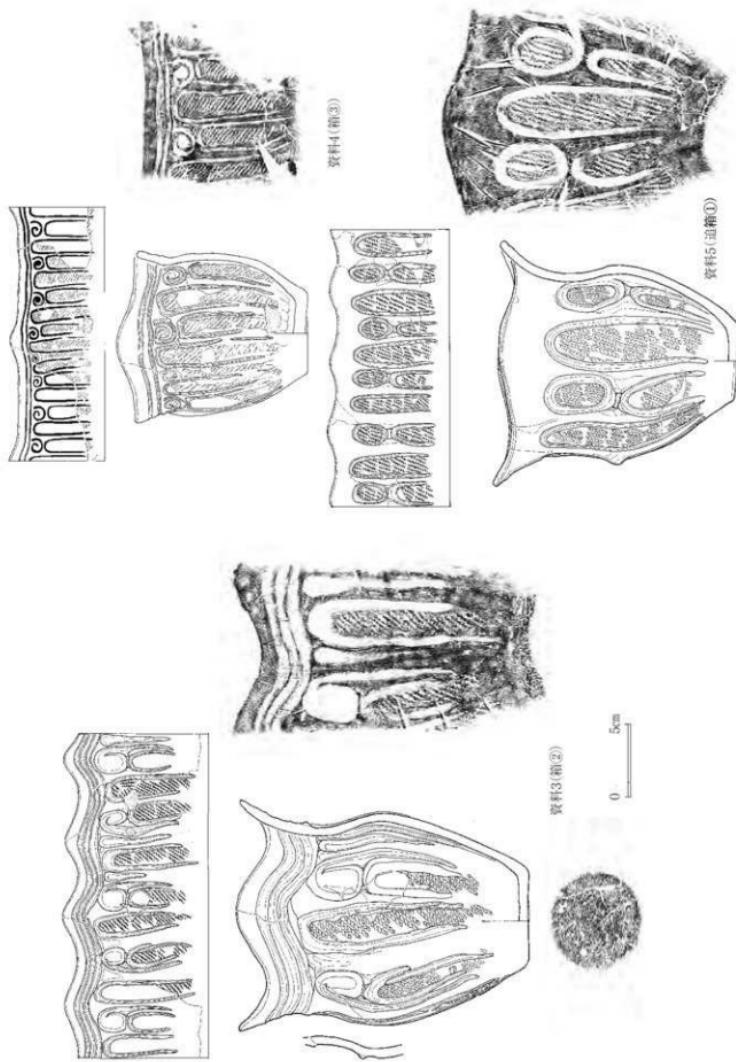
- 報 - 南境貝塚 - 『宮城県文化財調査報告書』
第20集 1 ~ 83頁
- 後藤勝彦他(1969.3)「宮城県桃生郡矢本町平原貝塚発掘調査報告」「貝輪」5 3 ~ 15頁 第1 ~ 11図 宮城県塙釜女子高等学校社会部
- 後藤勝彦(1974.11)「繩文後期宮戸1b式周辺の吟味」「東北の考古・歴史論集」79 ~ 110頁 宝文堂
- 後藤勝彦(1981.10)「繩文後期の土器 - 東北地方 - 」「繩文土器大成」3 139 ~ 143頁 および図版解説
- 後藤勝彦(2004.5)「南境貝塚調査の層位の成果I 7トレンチの場合」「宮城考古学」第6号 63 ~ 110頁 宮城県考古学会
- 後藤勝彦(2005.3)「南境貝塚調査の層位の成果II 8トレンチの場合」「宮城史学」第24号 1 ~ 29頁 宮城歴史教育研究会
- 後藤勝彦(2008.3)「西の浜貝塚」「松島町文化財調査報告書」第1集 1 ~ 155頁
- 後藤勝彦(2008.3)「西の浜貝塚 R・Sトレンチ(昭和34・35年)」「松島町文化財調査報告書」第3集 1 ~ 70頁
- 小井川・山田(2002.3)「里浜貝塚西畠地点出土遺物」「東北歴史博物館研究紀要」3 45 ~ 136頁
- 小井川和夫(2004.3)「里浜貝塚風越地点出土土器の検討」「東北歴史博物館研究紀要」5 17 ~ 51頁
- 金野良一(1991.3)「気仙の遺跡」1 ~ 105頁 大船渡市立博物館
- 佐藤・片倉(1958.10)「白石荒井繩文住居遺跡」「仙臺郷土研究」第18巻第4号 15 ~ 21頁
- 斎藤良治(1968.12)「七夕遺跡調査報告書」1 ~ 11頁 丸森町教育委員会
- 佐々木和博他(1985.3)「香の木遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第103集 3 ~ 46頁
- 志間泰治(1960.9)「丸森町清水遺跡の調査」「宮城県の地理と歴史」第2編 98 ~ 108頁 地域社会研究会
- 志間泰治(1964.3)「宮城県角田市老が崎遺跡の調査」「考古学雑誌」第49巻第4号 50 ~ 63頁 日本文考古学会
- 志間・桑月(1991.11)「宝ヶ峯」原色図版1 ~ 8 本文1 ~ 28頁 図録篇1 ~ 170 資料篇1 ~ 82 資料篇1 ~ 82
- 82 資料報恩会
- 白鳥良一(1974.11)「仙台三神峯遺跡の調査」「東北の考古・歴史論集」1 ~ 54頁 宝文堂
- 篠原・吉岡他(1990.3)「下ノ内遺跡」「仙台市文化財調査報告書」第136集 1 ~ 706頁
- 主浜光朗他(1987.3)「山田上ノ台遺跡」「仙台市文化財調査報告書」第100集 39 ~ 668頁 図版756 ~ 909
- 須藤隆(1985.10)「東北地方における繩文集落の研究」「東北大考古学研究報告」1 1 ~ 36頁
- 須藤隆(1984.3)「北上川流域における晚期前業の繩文土器」「考古学雑誌」第69巻第3号 1 ~ 51頁 日本考古学会
- 須藤隆(1984.9)「中沢貝塚」巻頭図版1 ~ 5 1 ~ 218頁 第1 ~ 45図版 PL1 ~ 56 東北大考古学研究会
- 鈴鹿良一・橋本博幸他(1982.3)「馬見塚遺跡」「福島県相馬市文化財調査報告書」1 ~ 130頁 図版1 ~ 47
- 鈴鹿良一他(1984.1)「上ノ台A遺跡(第1次)」「福島県文化財調査報告書」第128集 7 ~ 282頁
- 鈴木隆英他(1985.2)「曲田I遺跡発掘調査報告書」「岩手県理文センター文化財調査報告書」第87集 第1分冊 1 ~ 376頁 第2分冊 1 ~ 467頁
- 鈴木・林編(1981.4)「繩文土器大成4 - 晩期」1 ~ 206頁 講談社
- 間根達人(1993.9)「西ノ浜式とその周辺」「歴史」第81輯 65 ~ 88頁 東北史学会
- 芹沢長介(1960.6)「石器時代の日本」口絵1 ~ 97 1 ~ 303頁 葦地書館
- 手塚・相原・加藤他(1988.3)「大梁川遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第126集 1 ~ 625頁
- 東北大文学部(1982.3)「東北大文学部考古学資料図録」第1巻 1 ~ 242頁
- 永峯光一編(1981.7)「繩文土器大成2 - 中期」1 ~ 210頁 講談社
- 丹羽茂(1971.2)「東北地方南部における中期繩文時代中・後業土器群研究の現段階」「福島考古」第12号 1 ~ 21頁 福島県考古学会
- 丹羽茂(1981.11)「中期の土器 太木式土器」「繩文文化の研究」第4巻 43 ~ 60頁 雄山閣
- 丹羽・阿部・小寺(1982.3)「勝負沢遺跡」「宮城県

- 文化財調査報告書』第83集 43~251頁 図版1~52
- 丹羽・阿部・小野寺(1982.9)「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集 23~223頁 図版1~58
- 丹羽茂(1989.4)「中期大木式土器様式」「縄文土器大観」346~352頁 小学館
- 二本柳・鹿角・佐藤(1957.12)「青森県上北郡早稻田貝塚」「考古学雑誌」第43巻第2号 35~58頁 日本考古学会
- 二本柳・佐藤(1961.1)「六ヶ所村出土早稻田5類土器」「上北考古会報」1~2頁 図版I~X III 第1~3図 上北考古会
- 野口義麿編(1981.10)「縄文土器大成3~後期」1~210頁 講談社
- 芳賀良光(1968.12)「宮城県宮戸島貝塚梨木圓遺跡の研究」「仙台湾周辺の考古学的研究」45~53頁 宝文堂
- 林謙作(1965.7)「縄文文化の発展と地域性~東北」「日本の考古学II 縄文時代」64~96頁 出書房
- 林謙作(1993.4)「曲田Iと八幡~東北北部晚期前葉の土器~」「論苑考古学」223~263頁 天山舎
- 早瀬・首野・須藤(2006)「東北大文学研究科考古学陳列館所蔵大木圓貝塚出土基準資料」「Bulletin of the Tohoku University Museum」NO.5 1~40頁
- 福島大学考古学研究会(1971.10)「浦尻貝塚」「福島大学考古学研究会発掘調査報告書」第1冊 1~58頁
- 福島県教育委員会(1991.3)「福島県の貝塚」「福島県文化財調査報告書」第260集 1~208頁
- 福島県立相馬高等学校郷土クラブ(1967.8)「福島県相馬郡鹿島町上柄窪敷石住居跡発掘調査報告書」卷頭図版1~2 1~5頁 第1~6図 相馬郡鹿島町教育委員会 文献資料刊行会(1974.11)「上柄窪遺跡」1~26頁に補足・再録
- 藤沼・阿部・手塚・相原他(1986.3)「田柄貝塚I 遺構・土器編」「宮城県文化財調査報告書」第111集 1~675頁
- 藤沼・小井川他(1989.3)「宮城県の貝塚」「東北歴史資料館資料集」25 1~181頁
- 藤沼邦彦(1989.10)「亀ヶ岡式土器様式」「縄文土器大観4 晩期」318~324頁 小学館
- 藤沼・岡村・小井川(1983.3)「里浜貝塚」II 「東北歴史資料館資料集」7 1~67頁
- 藤沼・閑根他(2005.3)「青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書」「弘前大学日本考古学研究室研究報告」2 1~176頁 写真1~89
- 藤沼邦彦他(2007.3)「青森県十和田市明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器について」「弘前大学日本考古学研究室研究報告」5 1~116頁
- 藤沼邦彦他(2008.3)「青森県三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書」「弘前大学日本考古学研究室研究報告」6 1~200頁
- 藤谷誠他(1989.3)「深沢A遺跡」「福島県文化財調査報告書」第206集 91~168頁
- 保坂三郎他(1972.3)「是川遺跡出土遺物報告書」巻頭図版 本文1~110頁 八戸市教育委員会
- 松本彦七郎(1919.5)「陸前國寶ヶ峰遺跡の分層的小发掘成績」「人類學雑誌」第34巻第5号 161~166頁
- 松本彦七郎(1919.9~10)「宮戸島リ演介塚の分層的發掘成績」「人類學雑誌」第34巻第9~10号 285~315頁・331~344頁
- 馬日順一(1968.5)「網取貝塚第四地点発見の堀之内I式期土器の考察」「小名浜」127~156頁 第1~8図版 福島県いわき市教育委員会
磐城出張所
- 真山悟他(1987.3)「小梁川遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第122集 1~625頁
- 宮城県教育委員会(1978.3)「上深沢遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第52集 1~516頁 図版1~51
- 宮城県教育委員会(1978.3)「宮城県の文化財」1~228頁
- 宮城県教育委員会(1998.3)「宮城県遺跡地図」「宮城県文化財調査報告書」第176集
- 三宅宗議(1967.4)「尾田峰の縄文文化」1~32頁 石巻古代文化研究会
- 目黒・大越(1975.3)「川原遺跡」「福島県文化財調査報告書」第47集 本文編 169~189頁 図版編 221~247頁
- 八巻正他(1974.3)「史跡大木圓貝塚環境整備調査

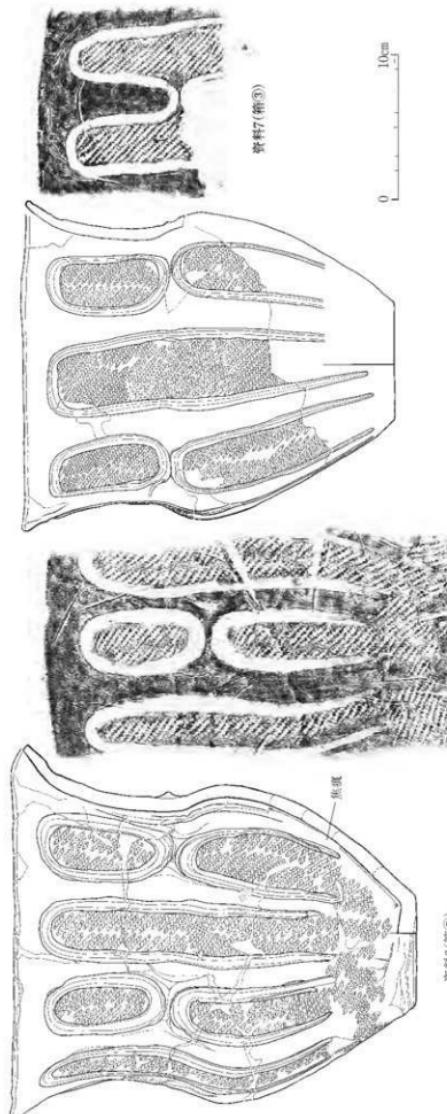
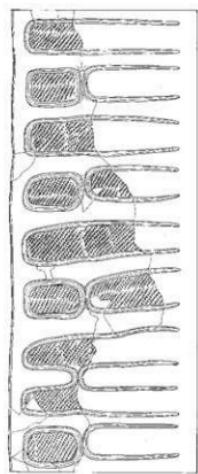
- 報告書Ⅱ』『七ヶ浜町文化財調査報告書』第2集 1~37頁
- 山内清男(1930.5)「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 139~157頁 「先史考古学論文集」第三冊(1967.7)所収
- 山内清男(1932.7)「縄文土器文化の真相」「ドルメン」第1巻第4号 40~43頁 「先史考古学論文集」第一冊(1967.4)所収
- 山内清男(1937.1)「縄紋土器型式の細別と大別」「先史考古学」第1巻第1号 29~32頁 「先史考古学論文集」第一冊(1967.4)所収
- 山内清男『日本先史土器図譜』同解説(1939~1941)再版・合冊(1967.12)
- 山内清男編著(1964.3)『日本原始美術1 縄文土器』1~220頁 付表1~3 講談社
- 山内先生没後25年記念論集刊行会(1996.8)『画龍點睛』巻頭写真図版1~119 本文1~282頁
- 山内幹夫他(1990.3)「上ノ台A遺跡(第2次)」「福島県文化財調査報告書」第230集 1~609頁
- 吉田格(1956.2)「縄文文化－関東」「日本考古学講座3」125~150頁 河出書房
- 吉田格(1960.9稿)「横浜市称名寺貝塚」「東京都武藏野郷土館調査報告書」第1冊 1~21頁 第1~11回版 武藏野文化協会
- 吉田義昭(1960.3)『門前貝塚』第1~12回版 本文1~31頁 盛岡市公民館
- S.TAIRA AND T.KATO (1959.12)「ON THE EARTHEN WARES OF THE THIRD JOMON CULTURE FROM NASHINOKIGAKOI IN MIYATO ISLAND」「Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletin」No.28 49~57頁
- EDWARD S. MORSE. (1879.7)「SHELL MOUNDS OF OMORI」「MEMOIRS」VOLUME I, PART I, UNIVERSITY, TOKIO, JAPAN.
- 西岡秀夫編(1967.11)「大森貝塚」1~56頁 PLATE I~X V III再録 中央公論美術出版
- エドワード・エス・モース(1879.12)「大森介墟古物編」「理科會粹」第1帙 上冊 矢田部良吉譯 1~73頁 図解1~18 東京大学法理文学部
- エドワード・エス・モース(1879)「大森貝塚」「東京大学理学部紀要」第1巻 第1冊 近藤・佐原訳(1977.12)『考古学研究』第24巻3・4号 1~50頁 考古学研究会
- 佐原真「大森貝塚百年」(1977.12)『考古学研究』第24巻3・4号 19~48頁



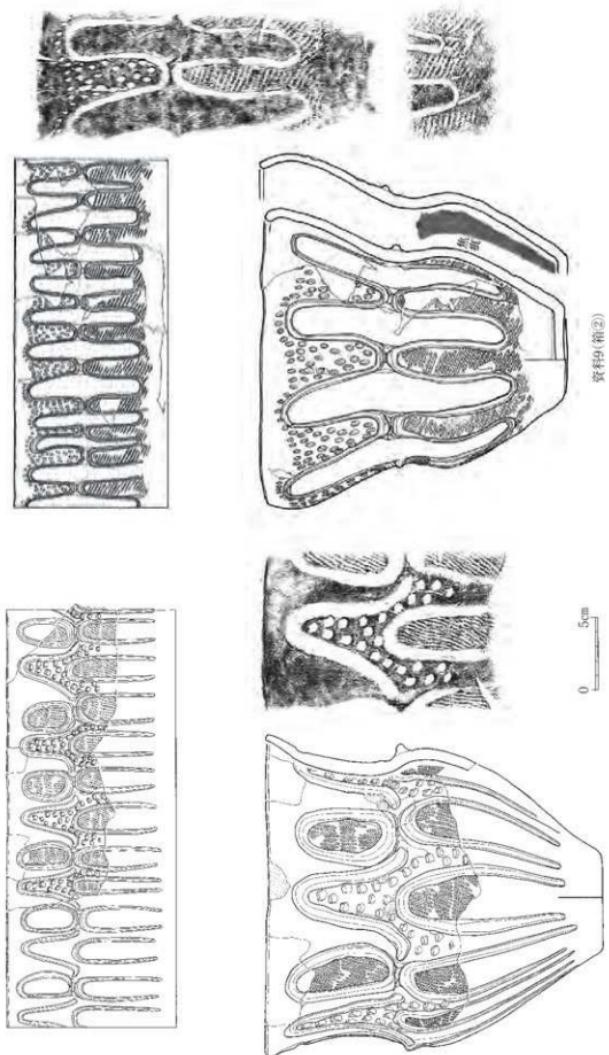
第1図 南地貝塚(1)



第2図 南境貝塚(2)



第3圖 南境貝塚 (3)



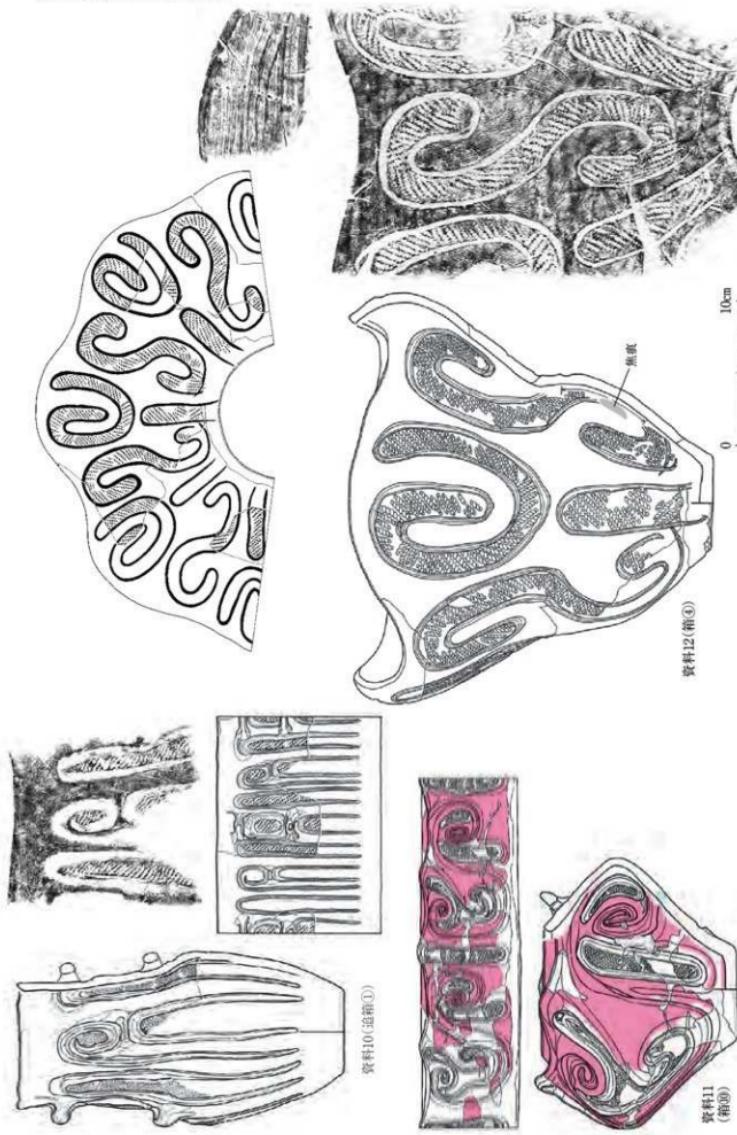
第5図 前塊貝塚 (5)

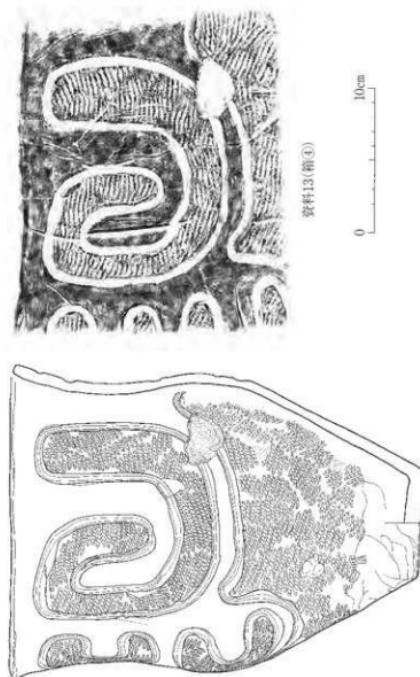
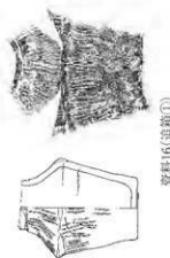
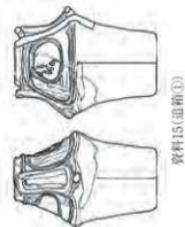
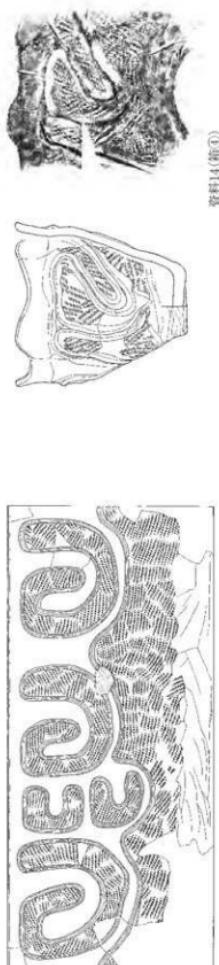
10cm

資料12(箱④)

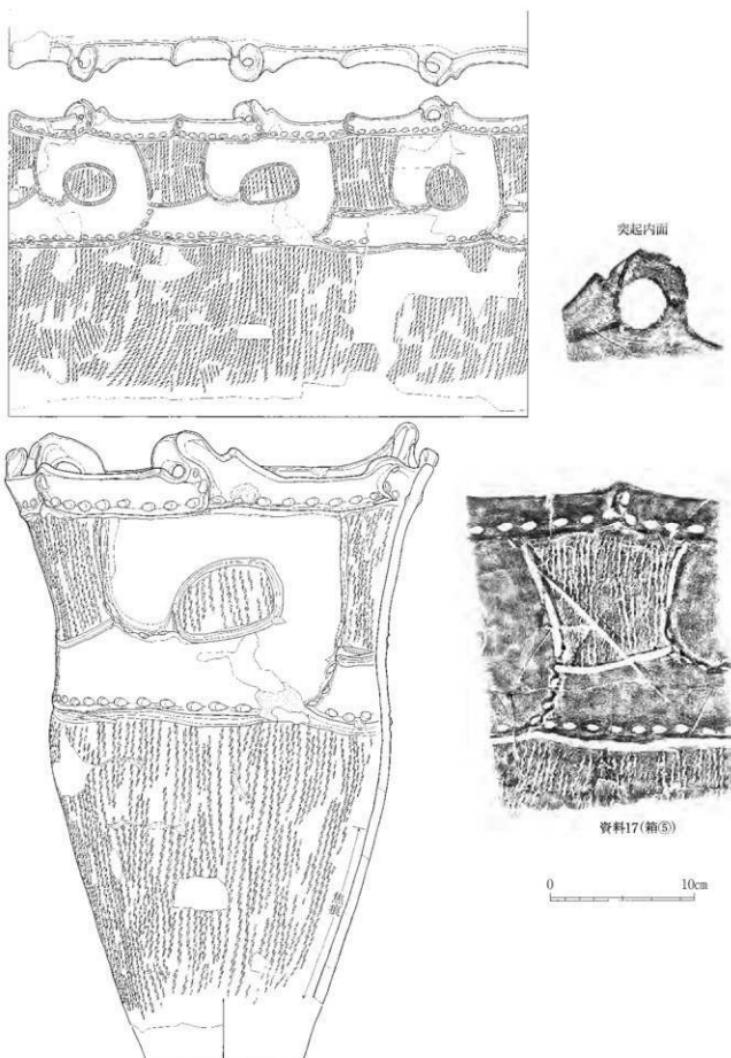
資料11
(箱⑩)

資料10(箱前①)

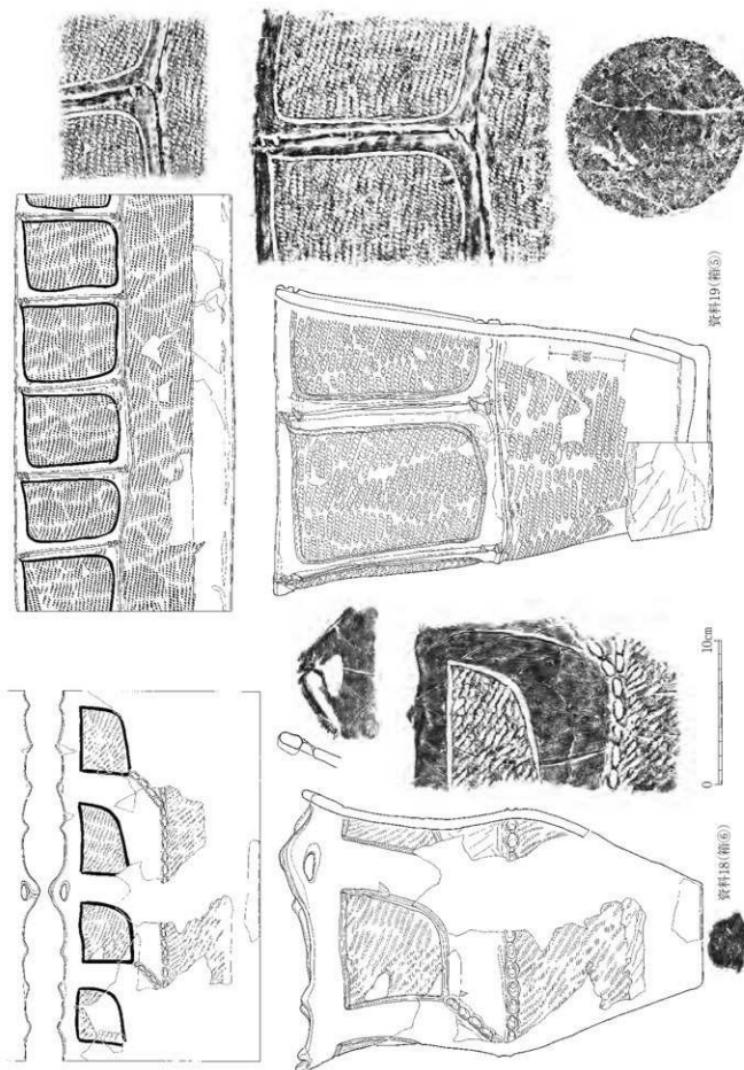




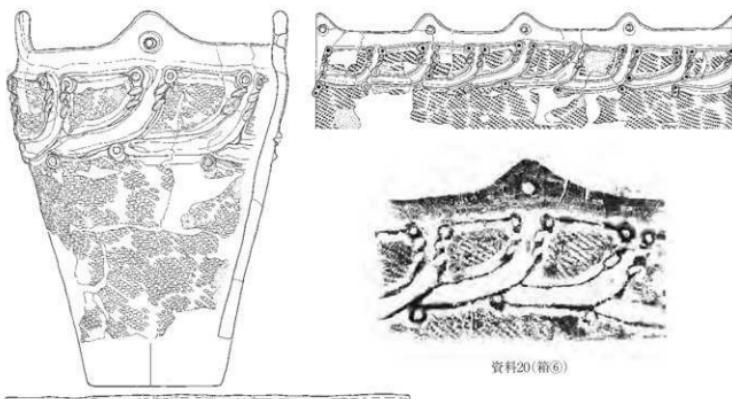
第6図 前境貝塚(6)



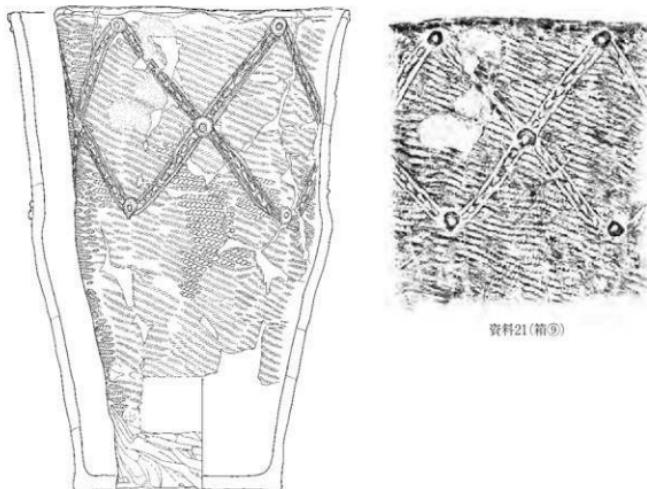
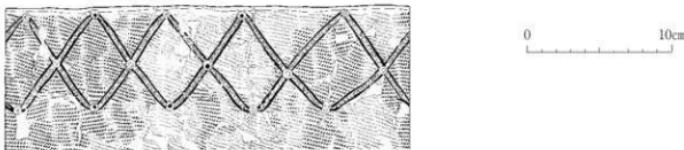
第7図 南境貝塚 (7)



第8図 前境貝塚(8)



資料20(箱⑥)

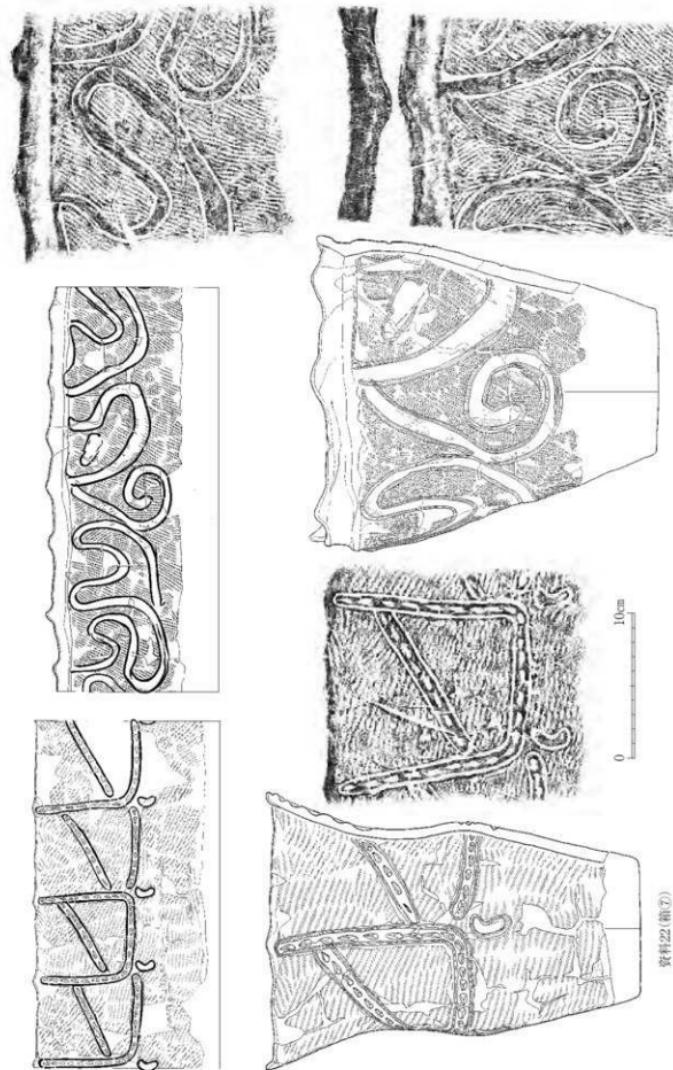


資料21(箱⑤)

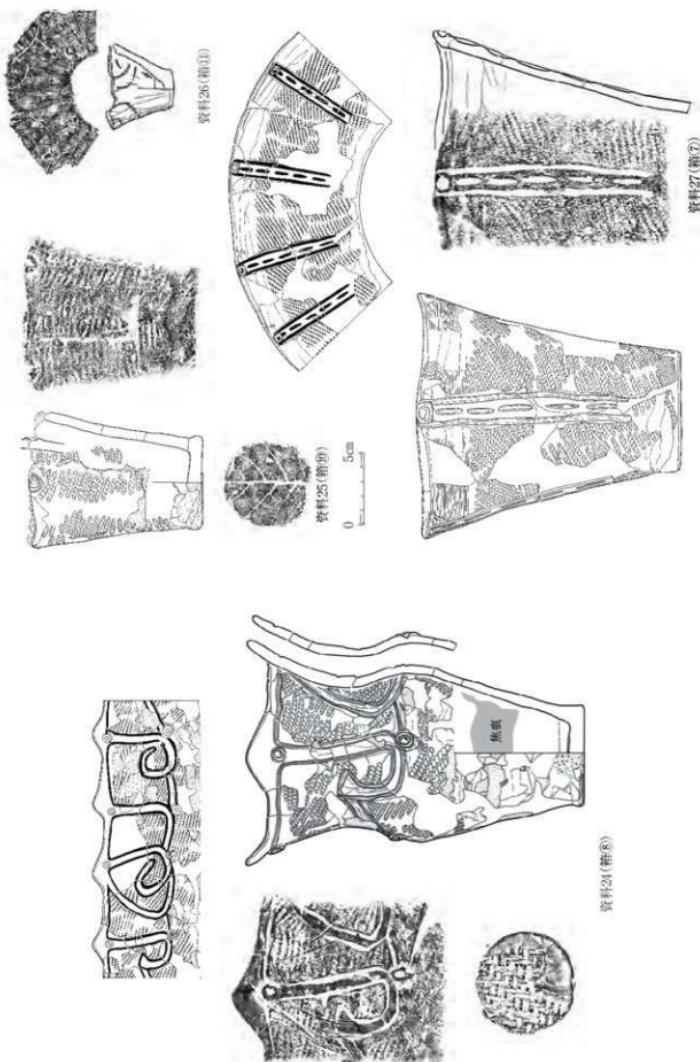
第9図 南境貝塚(9)

資料23(箱2)

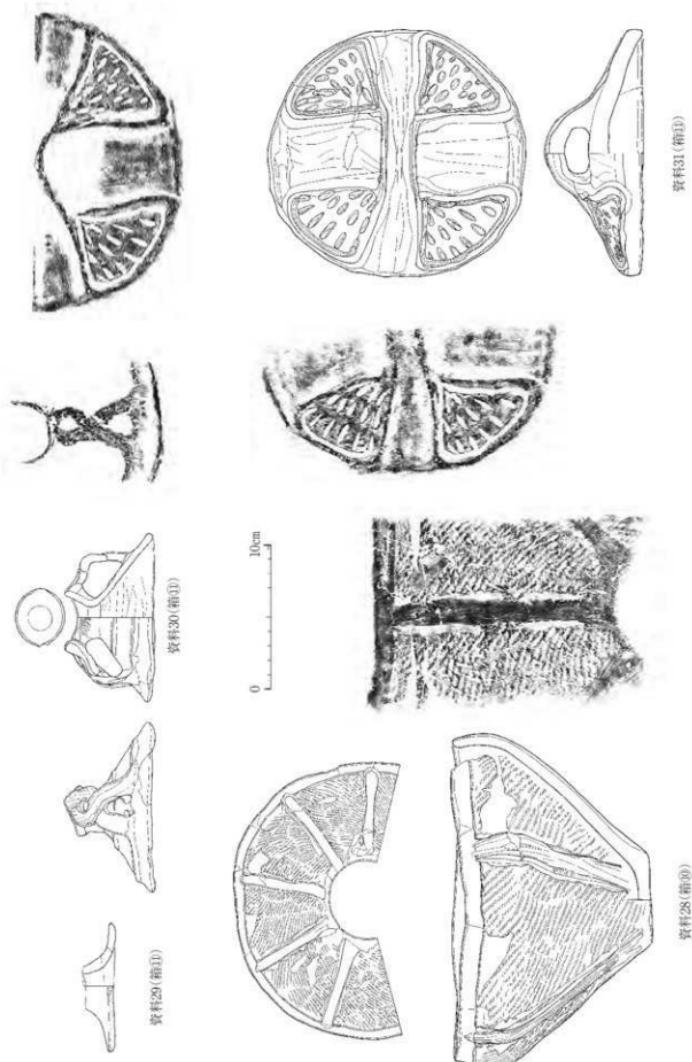
第10図 南境貝塚(10)



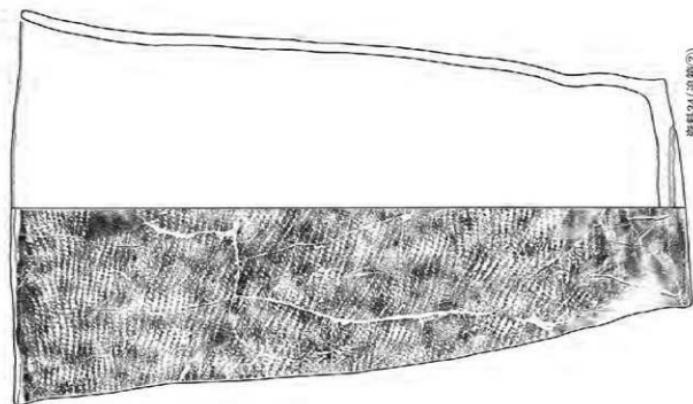
資料22(箱2)



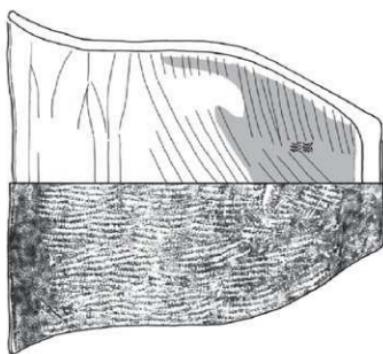
第11図 南境貝塚(11)



第12図 前掲貝塚(12)



資料34(追補②)

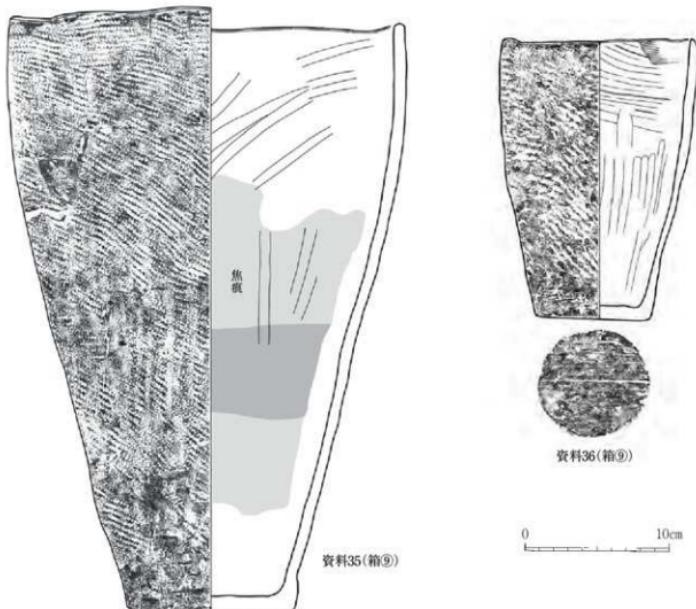


資料32(前8)

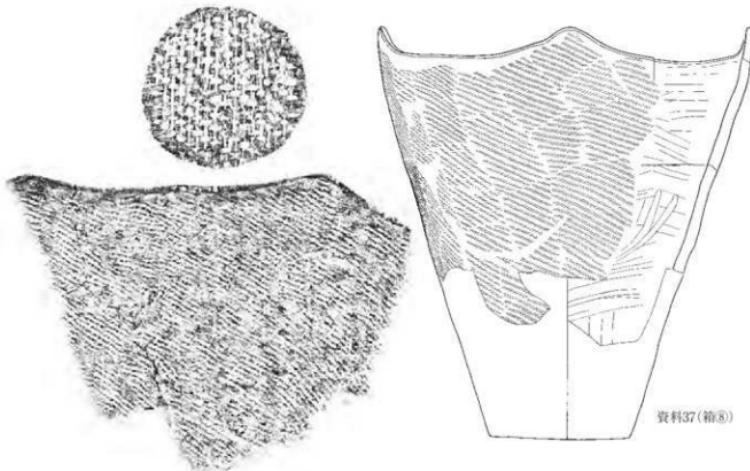


資料33(前9)

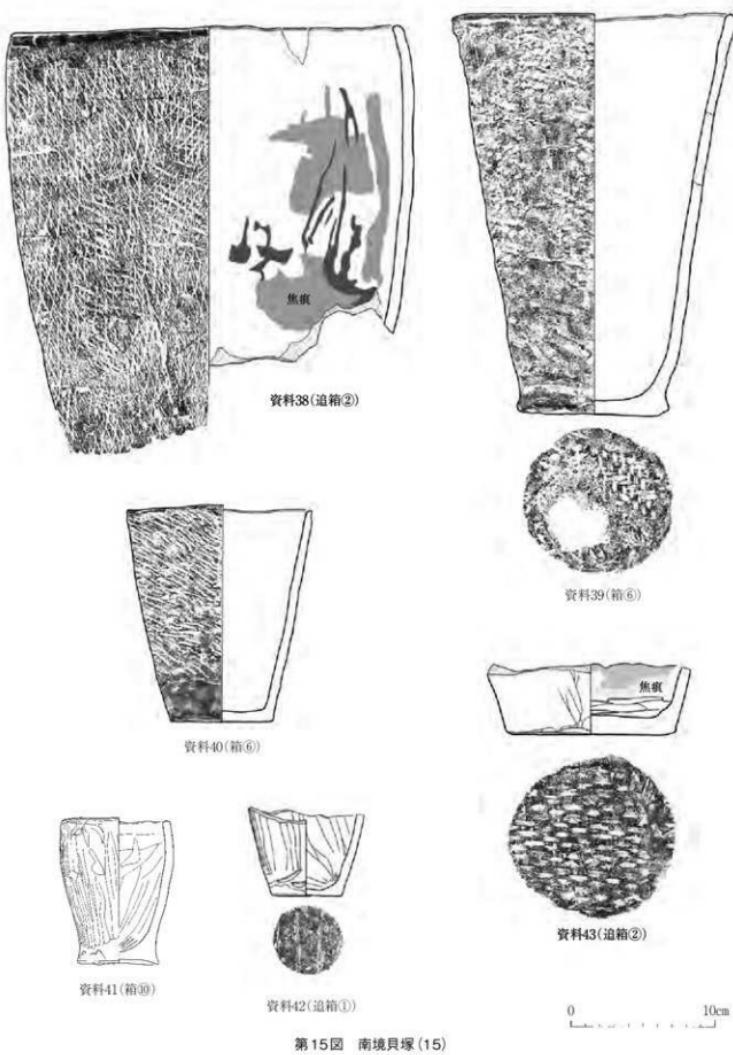
第13図 前境貝塚(13)



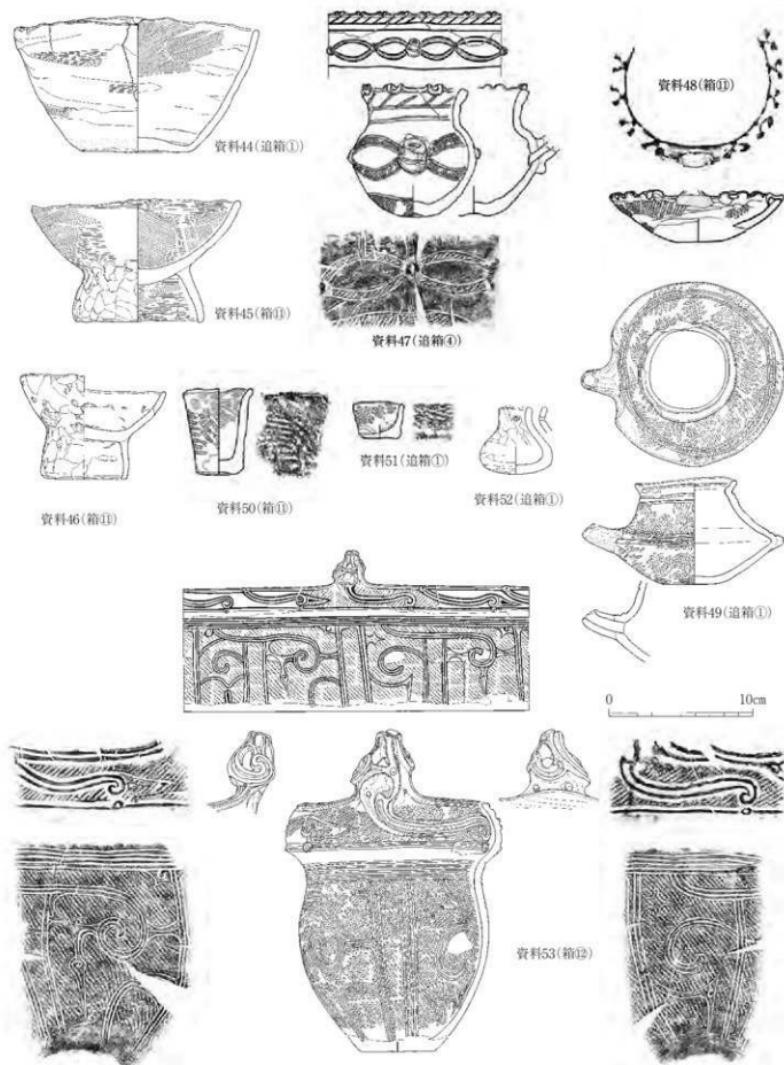
0 10cm



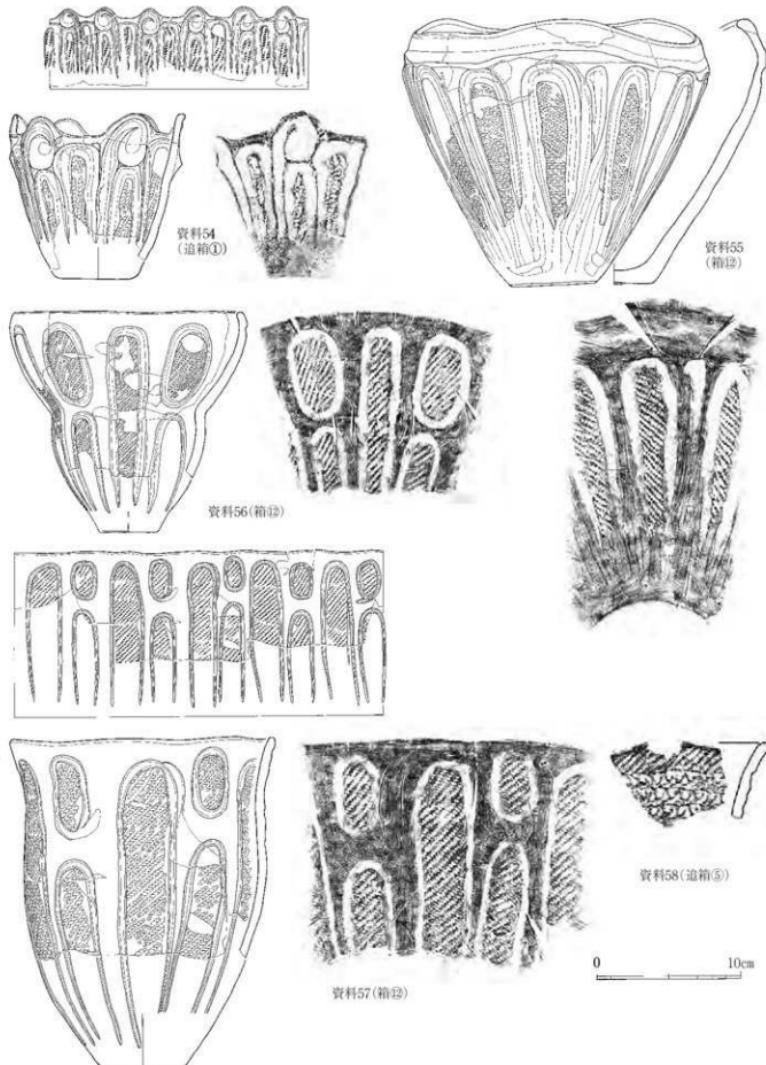
第14図 南境貝塚(14)



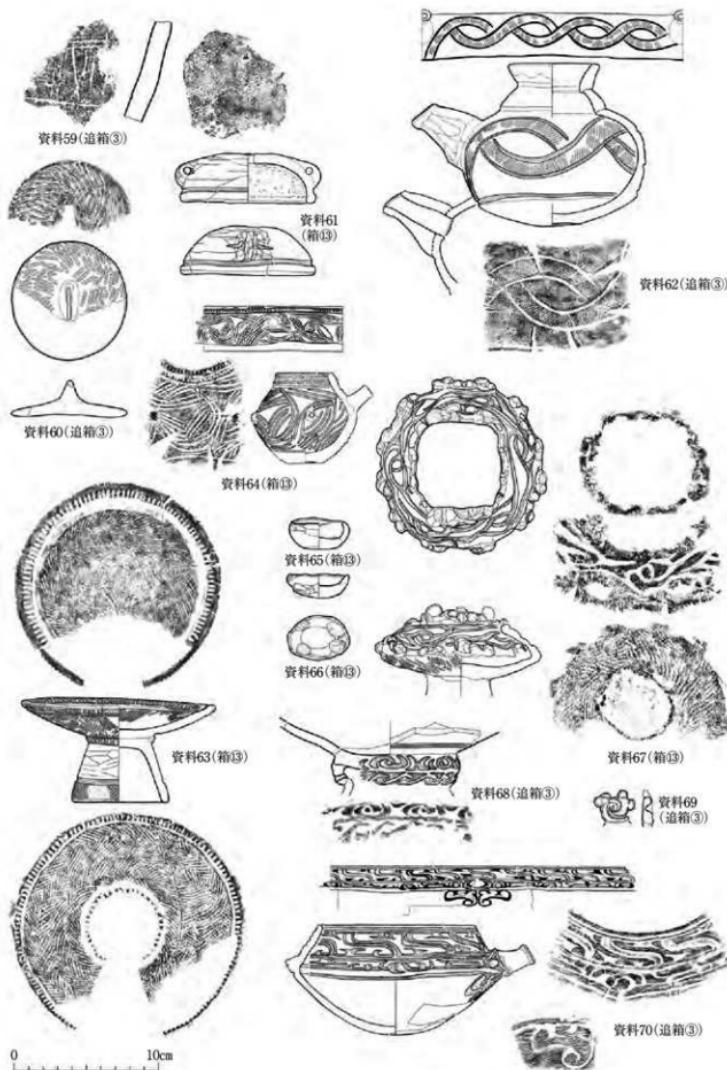
第15図 南境貝塚 (15)



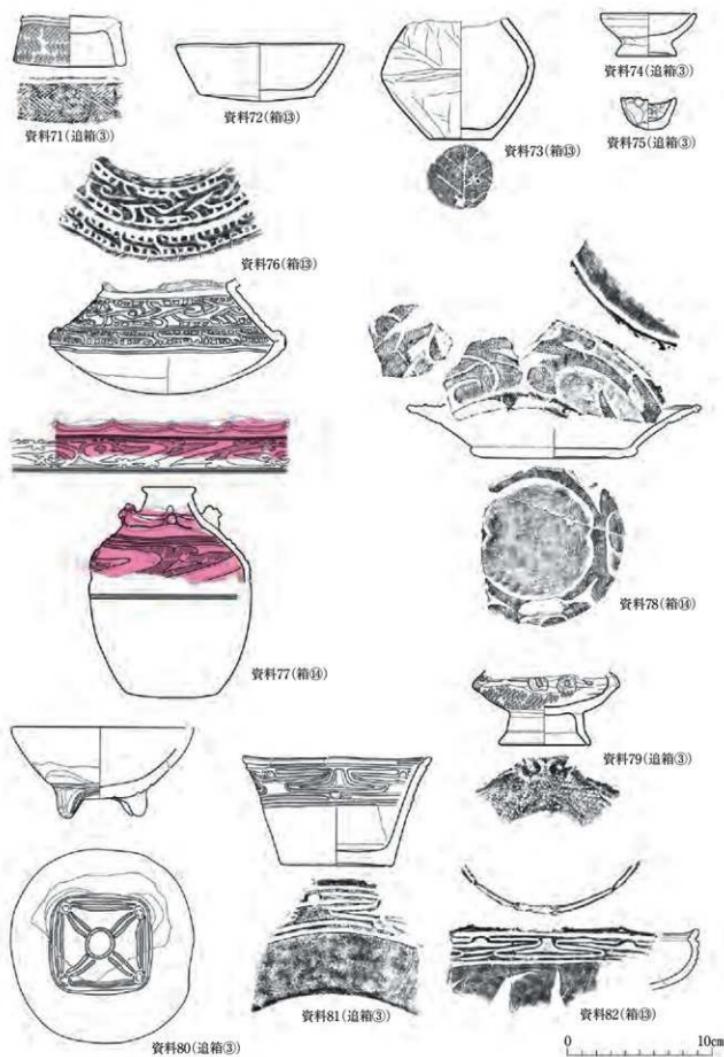
第16図 南境貝塚(16:資料44~52)・仁斗田貝塚(1:資料53)



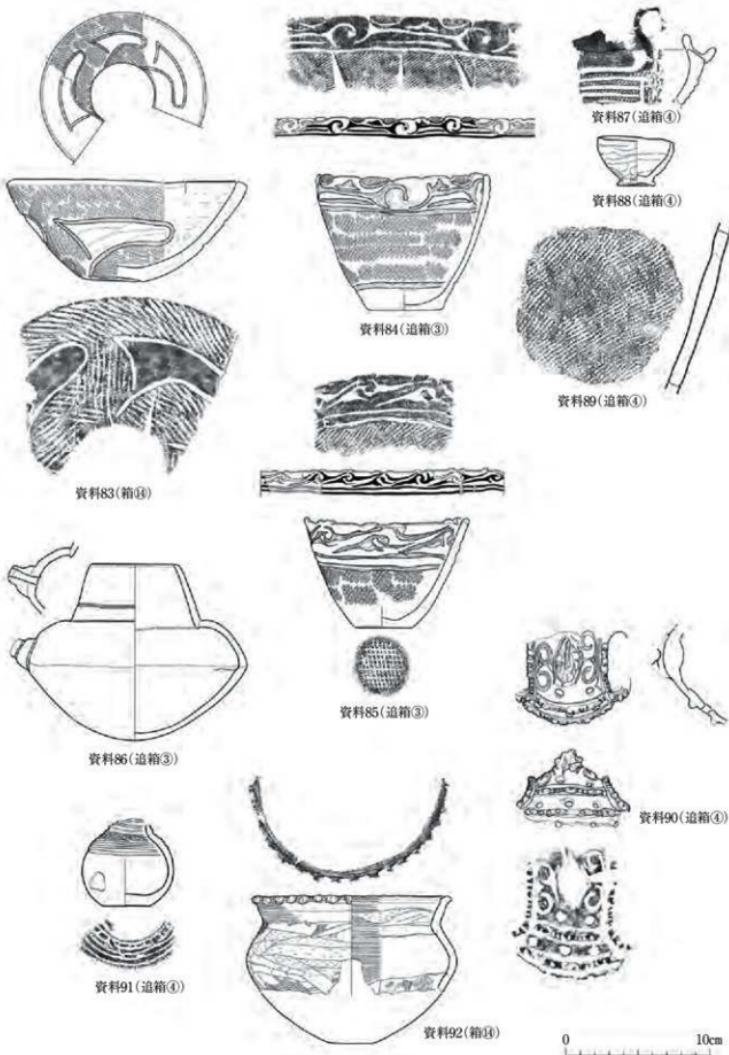
第17図 仁斗貝塚 (2)



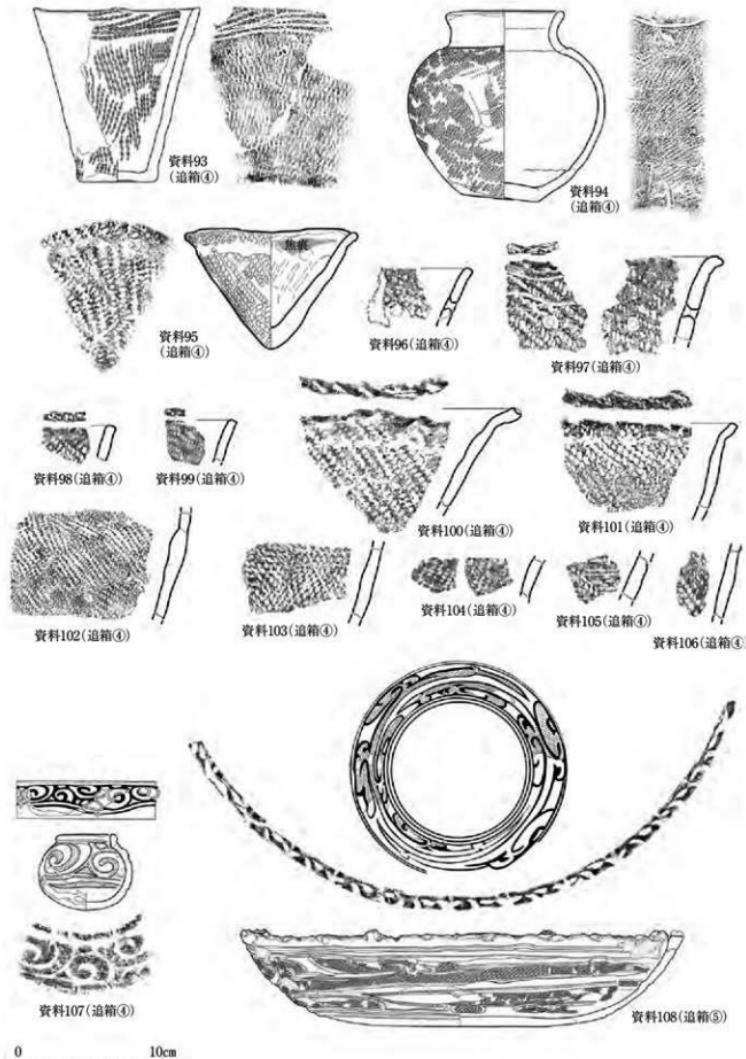
第18図 宝ヶ峯遺跡



第19図 沼津貝塚



第20回 泉沢貝塚(資料83)・二渡貝塚(資料84)・尾田峯貝塚等(資料85・86)・西の浜貝塚(資料87・88)・平田原貝塚(資料89)・いわき市平(資料90)・大船渡市泊貝塚(資料91・92)



第21図 津軽鰐ヶ沢町(資料93)・八戸市川中居遺跡(資料94)・八戸市長七谷地貝塚等(資料95～106)・宝ヶ峯遺跡(資料107)・(伝)沼津貝塚(資料108)

東北歴史博物館研究紀要 10

発 行／平成21年3月27日

編集発行／東北歴史博物館
〒983-0862 宮城県多賀城市高崎一丁目22-1
TEL.022-368-0101

印 刷／今野印刷株式会社
〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10
TEL.022-288-6123(代)
